# 偐紫田舎源氏第八編

柳亭種彦著

義政が側室多きが中に。千景の方と聞えしは。容麗しきと言には非ねど。其性いと柔順く。心を用ひて仕へければ。義政も不便を加へ。既に男の御子を擧け。四郎正倘と名のり。今年は早七才なり。

編者申。第二編目の初めに斷りし如く。義政の側室數多ありて。男女の子を多くうめり。其度々に誌さんには讀給ふに煩はし。故に其母其子に用ある時。委く是を說さとせり。今千景の方四郎の君の。二人の事を語り出るも。則ち先に斷りし例なり。」是のみに限らず。七編目に記したる赤松高直柏之助を擧て後。程なく男女の子をもてり。又惟吉が妻を娶るの類も。其度々に書付ず。誰の妻誰の子幾才許と末々に。用ある時に著すべし。

此正倘を藤の方。一方ならず愛しみ。膝元をはなち給はず。千景の方とも就中。其交情睦



じかりしかば。義政はふと心づき。藤の方の音川より。歸りこぬ由を語り。御身四郎を彼處へ連行。迎取りて來るべしと。千景の方に宣ひけるにぞ。仰せ畏み候とて。其次の日四郎の君を。我乘物へ乘せまゐらせ。忍びやかに音川の。下館に赴きつ。藤の方に對面し。義政公の等閑ならぬ。お心の程をつげ。此若君の朝夕に。藤の方の見え給はぬ。予をも彼處へ連行けよと。叨り給ふもいと悲し。ト詞を盡して聞えけり。既に先にも誌しゝ如く。庭の築山一つを隔て。富徽の前と住はんも。いと厭敷は思ひ乍ら。千景の方の心ざしも。振捨難く四郎の君の。迎へも憚り多ければ。近きに御所へ上らんと。直よかに事うけなし。酒肴を設けつゝ。夜に入まで饗應歸し。文月になりて後。漸く御所へぞ歸りける。義政は藤の方を。いと珍しく側へ近附。限りなき思ひの程を。物語りつゝ打見るに。腹は少し膨かにて。打惱み面瘦たる。實に似る者なく艶美なるに。彌あはれは勝りしなるべし。」光氏は去頃より。嵯峨の館へ引籠り。閑に思ひ續くるに。碓の音砧の音も。耳につきて聞憎かりし。夫さへ戀しう思ひ出られ。程なく八月十五日。かの自害せし黃昏が。一周忌とぞなりにける。其佛事もせま欲けれど。今日は壽く日にてあれば。先室町に至りけるに。父義政

は膝元近く。光氏を招きよせ。予世をとりて幾年か。斯穏かに治まるこそ。此上も無喜びなれ。然に依て通天の。紅葉の盛りなるを待。彼處に賀莚の酒を汲ん。其時は樂を始め。能今樣と夫々の役者を用ひず。其道を常に好む。家臣を撰び。御身義倚は云に及ばず。幼けれ共正倚にも。指南なして舞はせて見せよ。早此事は昨日の夜。當館には觸たりしと。仰せを聞て光氏は。委細かしこみ候と。御前を退きつゝ。かの黄昏が佛事のことの。心には懸り乍ら。直樣館も出難く。とある處を見給ふに。彼紅葉の賀筵の催し。人々興ある事に思ひ。廣座敷に集りて。俄に舞を習ふもあり。或ひは篳篥尺八の。笛抔を取出し。大鼓に吹上つゝ。或ひは太鼓を高欄の。元へまろばし寄懸て。手づからに打鳴し。物の音色も常よりは。耳姦しく遊び私語き。最せは〳〵敷樣なれば。我身を盗みて光氏は。ふと館へも歸り難く。心ならずも留まりて。十七日になりに鳬。今日は觀音の緣日なれば。清水寺へ參詣せんと。光氏は暇を乞。例の供人僅にやつし。直にかの御寺へ詣で。忍びてのとなれば。黄昏親子の名を包み。何人なり共宣はず。只心ざす人の爲迚。佛の飾り經を始め。布施料抔數多をさめ。讀經をせさせつゝ。此寺には光氏が。幼き時に學問の。師と賴みた



る睦じき。老たる僧の有けるに。箇樣〳〵の事なり迚。はかなき樣になり行たる。親子の上を失となく。物語りしたりければ。今は歌舞の菩薩と生れ。阿彌陀佛の御前にて。舞奏てゐる由を。いと哀れげなる諷誦の文に。書出て讀上れば。包むとすれど光氏の。涙こぼるゝ顔打まもり。抑何なる女なれば。斯迄思し玉ふやらんと。かの老僧に咎められ。何と答ん詞も無。そこ〳〵に暇を乞。心慰む方もやと。堂の舞臺に立出て。遠近を見渡すに。向ふよりくる女あり。色白して目元清しく。眉は此頃拂ひしか。其跡のいと青やかにて。色好みなる若人と。見るより心に微笑れ。いざや嬲りて遊ばんと。光氏頓て聲をかけ。「予は田舍の者なるが。是よりうたの中山へは。何程の道かある。トとはせ給へば此方を見返り。思ひも懸ぬ光氏君。何地へ渡らせ給ひしぞ。年月たてば。妾をば御覺えも侍るまじ其昔は若君も。召使ひ等し給ひし。ト懷し氣にいひければ。光氏熟々打まもり。「何とやらん面影の。ヲヽ思ひ出したり。空衣の腰元づかひ。名はたしか夏野とやらん。「能お覺え遊ばして。ト猶ありし夜の事抔ど。蕭々と言出れば。彼村荻が空衣と。灯光に姿もみだれごを。打解たりし其樣の。又見ま欲くや光氏は。差俯いて居たりしが。稍ありて面を上。「空

衣は夫と共に。さる年伊豫へ下りしが。汝は何れに仕へてゐる。ト問れて猶も近くより。

「仰せの如く本國へ。お移り遊ばす其時に。お供を願ふ筈なれども。老たる父を都に殘し。引離るゝも悲しさに。詮方なくお暇願ひ。親の元に侍りしが。過日稲舟様の。お側使ひを御尋ね。願ふてもなき事なりと。父の進めに又再び。姫君様へ御奉公。名をば早百合と改めて今は糺のお館勤め。今日は稲舟様の。御代參に清水へ。只今參詣致します。ト聞て光氏膝をうち。「そは僥倖の事にぞある。密に語らふ事あれ共。爰は往來の人目もあり。此方へ來よと傍なる。茶屋の座敷の奥深く。物閑なる處へ誘ひ。光氏早百合が身近くより。「糺の館は義勝公。世に在します時だにも。時々ならでは通ひ給はず。人氣少き處なりしが。今は殊更荒まさり。物凄じき體なるを。夫を憂し共いひやらず。靜にすめる稲舟が。心の裡も不審し。又顔貌は何なる樣ぞ。哀れにゆかしく思ふ也と。事あり氣に問給へば。早百合は聲を打密め。「姫君樣は物耻を。常々し給ふお性にて。暑き日迚も取はなし。端居抔はし給はず。隱潜て在すれば。私し輩は物越に。御物語致す斗り。御顔容は能も見上ず。お側に親く仕るは。紅といふ前方より。勤め馴たる女子一人。只琴をのみ明暮の。語らひ人



とはし玉ふと。言に光氏笑を含み。「琴酒詩を三ッの友と。樂天はいひつれと。詩は女にはこは〲敷。酒は尙更うたてくあらん。稲舟の父たりし。義勝公も琴を好れ。妙術を得られし由。其血統を受繼ば。音色も嘸と推計り。頻に夫が聞かまほしく。此如月の頃なりし。十六夜月の朧々。道を忍びて在下も。實は彼處へ行たるが。咎むる人の無りしかば。遙々と庭を廻り。内の樣子を窺ひ見るに。寢家と覺しき小暗き處に。稲舟は只一人り。晝の儘にて障子も閉ず。梅の花の盛開なるを。打詠めて居る處へ。かの紅とやらんにや。腰元使ひの女來たり。物の音の勝るべき。宵の程に侍るかし。いざ一手遊ばしてと。頓て琴を持出ければ。其儘微に搔鳴すは。然斗、深き手には非ねど。聞にくゝも無りし也。其中にかの腰元。我忍ぶをや見出しけん。思ひの外に月も更。曇勝に侍べる迚。障子を閉て辷り出で。今一曲とも進めねば。能も聞えず止たる也。此事姫に密知せ。同くば近き程にて。予に立聞せさせよと。宣ふ顔を心憎く。早百合は見上て打笑ひ。「過つる年も空衣が。閨に誘ひ進らせしは。私なりと疑ひ受け。歸らせ給ひし其後にて。言慫されたる事もあり。稲舟樣の御琴は。然程御心盡されて。聞食す程には非じ。今に變らぬお忍び歩き。お勞れを御

所樣の。若や御目に留りなば。何とか仰せあるべきと。聞ゆれば光氏は。行んとせしが立歸り。早百合の背中をしとゝ打ち。「是らの事を仇々敷。舉動と云はんには。女の罪は尙深し。其色めきたる姿にて。浮世男の心を迷はせ。佛參に假託て。忍び逢瀨は何處ぞや。中川で逢し折は。言葉を懸ても顏打赧め。しか〳〵返答もせざりしが。誰に習ふて斯斗り。浮世には馴たるぞ。事の序に語れよと。言れて早百合は恥かしと。顏打背けて物云はず。光氏彌少聲になり。問べき事を忘れたり。今物語したりし如く。糺の館へ忍びし夜。彼處を徐々立出て。透垣の只少し。折殘りたる隱れの方に。立寄てふと見れば。元より立てる男あり。誰ならん心懸たる。好者ありと驚かれ。尙月光の暗きにつき。立隱れて熟見れば。山名三郎統清なり。元來彼は風流に。心を寄る者ならねば。彼琴の音に聞惚て。立るにては有べからず。心を懸し仁木の娘。村荻を妻としたれば。すき心共思はれず。故こそあらめ予也と。知れじ者と拔足に。歩み退つゝ月光も。雲隱れたる道の程。笛吹すさみて歸りしが。哀れげなりつる住居の樣。琴の音色を思ひ續け。忘るゝとには非ざれど。瘧病に惱まされ。其儘に捨置つ。彼統清より姬の許へ。人して言寄事はなきや。ト仰せに早百合は



小首を傾け。「此頃此方彼方より。御狀はありしかど。何れも〳〵返事を。せさせ玉ひしとはなし。其先方は何處共聞定めん樣はなし。ト聞て光氏打案じ。「屢次文して言寄ば。遂には靡く事のあらん。宜なに姬を詐僞て。予を逢せて吳よかし。心焦れのせらるゝは。ト推返し〳〵。言葉を盡して責玉へば。早百合はいとゞ胸苦敷。なか〳〵なる導きして。我過失になりもやせん。然は去乍ら若君の。斯信實に宣ふを。聞入ざらんも憚りありと。漸に心を定め。始めにも申せし如く。物包みし玉へば。明々地の御對面は。思もよらぬ事なれど。物腰に聞えん程は。取つくろひて進らせん。淺茅分る人も絕たる御館へ。ト言懸るを光氏は押留め。予は荒たる其簀子に。たゝずま欲く思ふ也。又物恥を做とやらんが。女子めかしく却てゆかし。必ず首尾よく計らへ。ト口固めして立別れ。嵯峨の館へ歸りけりとぞ。同じ八月二十日餘り。宵過る迄またるゝ月は。未だ山の端の白みも見えず。星の光ばかり冴けく。松の梢を吹風の。音も宛然心細く。稻舟は寢もやらで。物思ふ樣したりければ。好機哉と早百合は思ひ。狀書認め光氏の。許へ斯と告しかば。例の忍びておはしたり。月は漸々差出て。荒たる籬のうとま敷を。打詠めて彳めば内には。早百合が夫ぞと悟り。琴

を持て出押直し。勸められて稻舟は。音色微に掻鳴す。其手遣の今樣ならぬを。何にか聞かせ玉ふらん。今少し花々しき。彈べ樣もあらん者をと。早百合は心に思ひ鳬。人目も無れば光氏は。心安く內に入。早百合〳〵と呼玉へば。走り出て打密語。綾柳と申す腰元。恰悧者に侍べるから。仰せの趣き竊に傳へ。今宵の事は彼女子。取まかなふ筈なれば。是に暫し待玉へ。ト立歸りて稻舟の。側近くすり寄て。「此頃竊に聞えたる光氏君の來ませしなり。何程に申しても。貴孃のお聞入なき事は。直に傳へ進らせしが。夫なら己が直にあひ。言聞せんとお來の樣子。なにとか云て歸し申さん。先物越にて光氏君の。仰せの程を聞食せ。ト云れて稻舟恥か敷。「男に物を言樣は。知ぬ者をと奥の間へ。ゐざり入んとし玉ふも。初々しげに見えければ。早百合は莞爾と打笑ひ。親の有て大事にかけ。傅く中は年長ても。若々しきは女子の常。貴孃は便のない御身。世に出玉ふ階梯と。なる事もござりませう。と敎へられて姬君は。强くも人の言事を。辭み玉はぬ性ゆゑ。「聞と云はゞ聞もせん。燈火はのけて其仕切。ト宣へば早百合は心得。間の障子を强さし。「光氏君に蓮葉なる。御擧動はよも非じ。ト云なす中に紅は。次の間に褥を持出で。光氏君の御座を設け。



引退けば此方の間には。綾柳が立廻り。早や整理へたる稻舟が。夜の具を押疊み。是も褥に敷換つ。「今宵は丁度折もよく。年の長たる女子輩は。夕まどひして部屋へ退き。お側に居は私始め。若きものが二三人。光る君と世の人に。愛られ玉ふ光氏樣と。床しがりて彼樣に。立騷いで居まする。お櫛の亂れも掻上て。いざ是を召ませと。色よき帷子取出し。きせ換申せど稻舟は。彼人ゆかしき氣色もなく。箇樣の時に言語らふ。詞は夢にも知ざれば。最謹ましげに仕切の障子を少し隔てゝつい居たり。腰元輩は打集ひ。障子の隙より光氏を。差覗いて熟々見るに。淸き性の其上に。物好したる單の衣を。嫺かしからず着なし。扇に肘を凭せし樣は。心ある人にこそ。見せま欲など私語あひ。若し姬君に逢そめ玉ひ。末の遂ざる其時は。御物思ひのまさらんと。密めき云を光氏は。聞ぬ樣に佯しつ。心の中に思ふ樣。予いとこ女には有乍ら。世をも治めん血統の姬。浮世に馴てざればみたる。女よりは却て床しく。一間の樣子を窺へば。綾柳に勸られ。隔ての障子へ最近く。稻舟はすり寄しか。衣の香發と薰けるに。さればよと光氏も。障子の許へ行膝寄。年頃おもひ渡る樣を。委細と云續れど。內には絕て答もなし。吐息倩々打歎き。(蝶々のしじまに負て秋の

蟬。)と。俳諧の句を言懸たり。是は此頃の童子遊に。とうしまに鐘つくと言て。何にても
打鳴し。其後に物を言ず。物言者を負とする。戯れの有かば。聲なき蝶に負て鳴。吾身を
蟬に譬しなり。稲舟は是にさへ。更に回答をし給はねば。綾柳側より差寄て。(入相や梔
色のはぢ紅葉。)と若やかに蓮葉なる。聲して姫にはあらぬ様に。吟じ上ば稲舟の。人柄に
は物馴て。譃ばみたる言様と。思ひ乍らに。光氏は綾柳なりとは心付ず。いと珍しき聲を
聞き。なか〳〵口も閉りつ。と尙も様々言葉を盡し。をかしき様にも信實にも。
　其甲斐もなく稲舟の。回答なければ若外に。通ひ馴たる人もや有と。妬ま敷思ひ
けん。光氏はつと立上り。隔の障子を徐々引開け。内に入つゝ傍なる。　。○
○○○○○○。腰元輩は打驚き。うたてき事とは思ひ乍ら。世に比類なき光氏の。姿に
恥て仂なく。聲をも皆々立兼て。さる御心なき姫君の。俄の事にて恥かしく。予にも非ず
打嘆き。玉はん事の最惜さと。思ひ乍らに早百合を始め。知ぬ顔にて我部屋へ。密々辷り
出にけり。
○既に先にも誌しゝ如く。稲舟姫は物恥を。深くし玉ふ性ゆゑ。障子を隔てゝ光氏に。物



語し玉ふ時。燈火を遠避たれば。藍色も分ぬ薄暗黒。思ひも寄ぬ杉生が。さし足しつゝ窺
ひより。光氏君我君ト。呼覺しつゝ袖をもて。光を包みし雲洞を。差附れども起も上らず。
「ヲ、杉生か用あらば夜明て後館へ來よ其時きかんと。言捨て其儘眠る手を捕へ。「心得難
き御有様。妾が申すを一通り。聞せ給へと引起せば。光氏は眠たげに。「天下の大事か父の
仰せか。夫より外に夜明迄。またれぬ用はよも非じ。早々語れといふ顔を。熟々と打まも
り。「君去つ頃妾を召れ。加茂の社へ詣でし歸り。糺が原を過たりしに。荒たる館に琴の彈
べ。耳を留めてよく聞ば。我家に傳へし祕曲。あら心得ずと密に問ば。稲舟の住よしなり
彼は我伯父義勝の。遺子にあるなれば。斯荒果て人けも無。館へする置給へるは。父義政
の過失なり。とは云へ兄の義尙を。差置て父君を。諫めんも叉憚りあり。汝宜しく計らへ
と。妾へ密に宣ひしを。よもや忘れはし給はじ。夫故にこそ藤の方の。御產の守に假託て。
此お館へ私しも。始めて上りて様子を見定め。藤の方のお願ひと。御所様へ申上。お側使
ひの女子輩を。都の町より撰出し。御事欠の無き様に。取繕ひしは改めて。今申さずと兼
てより。貴公にはよう御存じ。夫程大事の稲舟様と。御添臥は何事ぞ。御本心とは思はれ

ず。彼琴の音を聞食せし。其折に姫君を。見初玉ひて夫となく。恩をほどこし我戀を。叶へんといふお心か。餘りにさもしき御擧動。十七日の夕さり方。清水寺より戻りがけ。茶屋の縁に腰打懸け。何心なく差覗く。奥には君と早百合と二人。何事をか宣ふと。立隠れて委く聞取。元より早百合は此處許の。お館へ上る時。私が見出たる。女子なれば知たるなか。歸る處を呼留め。光氏君がお館へ。忍び玉ひし其時に。必ず妾へ知せよと。約束固めて今宵ぞと。音づれ聞と其儘に。お次へ參りて宵よりの樣子は見屆け侍べる。と言葉は水の流るゝ如く。さら〳〵と言流せば。光氏は吐息をつき。「我潔よき心の程を。告んとすれば怜悧げに。父の行ひ善からぬを。擧るに似たり如何せん。斯る筋には過つる年も。當惑したる事のあり。人にな漏しそ竊に語らん。御身が今も某しが。口眞似をしつる如く。稻舟は伯父の嫡女。成長の後壻を定め。世を讓らんが父上の。兄を敬ふ道にてあり。好夫迄の事はなく共。莊園數多つけらる可を。斯押込めて置せらるゝは。父君の怠りにて世に譏る者いと多し。夫故竊に御身を賴み。側づかへの女を抱へ。少しは時榮樣ながら。是此如く荒たる儘。館を修造の沙汰もなし。母花桐の餘波とて。此光氏を父上の。いとほしみ



玉ふ事は。今更云はずと知る如く。元義尙を差超て。家をも繼せ玉ふべき。御氣色ありしに驚かれ。浮れ人とは成たるなり。其愛子たる光氏が。通ふと聞食されなば。稻舟姫を父上の。よも疎略には仕玉はじ。然る時は自から。世の謗をも防がんと。斯計らひしぞ神かけて。我色好みの故ならずと云へば。杉生打微笑み。「宣ふ事は道に似て。道に背きし處あり。仰セの如く御兄上。義尙君を差除き。貴公に御世を讓らんの。義政公に御氣色ありとは。今も噂を言止まず。稻舟樣は取分て。世を治め玉ふべき。御身にて有ならずや。下俗の世話にいふ。媒鳥とやらんに姫をして。那光氏こそ天が下を。望むと人に云れなば。夫をば何とか言解玉ふ。よし然なく共御本妻の。早定まりし御身にて。おいとこ同士にはあり乍ら。前將軍の御胤を。遊び物と仕玉ふが。人の道とは言難し。押附わざに姫君の。御身を穢し玉ひしは。何と言譯し玉ふ共。御過失に侍べると。憚る色なく言放てば。光氏莞爾と打笑ひ。「否とよ姫の身は穢さず。夫へ出て杉生に。安堵させよト夜衣取除け。つき遣玉ふ女の顏。熟々と打まもり。姫君樣は何日迚も。扇を額に打かざし。物謹ましく仕給へば。お顔は能も見上ねど。夫とは見えぬ蓮葉の姿。世馴ぬ人とも思はれぬ。其上何やら見

た様たと。打案じつゝ膝を打。「ヲ、夫〳〵。名は慥か綾柳とて。早百合と共にお館へ。召抱へしお腰元と。云懸れば光氏は。打點頭て近く差寄り。「此女は元中空とて。二葉の上の傅きなりしが。太郎高直まだ妻を。迎へざりし其以前。妾になさんと言つれども。願ひある身と承引かず。程へて後に某しへ。心を懸て送らんと。竊に書たる玉章を。小毬に見出され。翌は館を拂はんと。押込め置し部屋を脱出。我寐間へ忍び來り。枕刀を盗みとり。自害と覺悟極めし體。押留めて様子を問へば。此女の父何某は。筑紫潟の武士なりしが。仔細あつて浪人し。其頃二人の娘をもてり。然るに其妻死亡て。未だ年もたらはぬ娘を。二人迄は養ひ難く。姉をば人にやりたるが。廻々て父上の。側妾となりて。先つ年四郎正倘を擧けたる。千景の方卽ち是なり。其妹は是なる中空。右のとども委く聞き。倩思ふに姉千景は。室町御所にて傅かれ。妹の家臣の高直が。本妻にもあらばこそ。側妾と爲んと口惜と。思ふよりして高直が。心には背きしならん。夫はともあれ彼が父は。堀川邊にいと微に。世を送れども。予こそは千景が實の父なれど。御所へ名乘て出ざるは。一たん養女に送りたる。其人に義を立なり。其義者の娘と云ひ。殊には父の御胤を。宿し女の妹



の中空。予ゆゑ殺さん道理はなしと。云慰めて赤松の。館を出し忍ばせ置。名を綾柳と呼替させ。予は知ぬ様に待遇。御身が爰の腰元づかひの。女を尋ぬる其時に。彼をも夫に加へしは。稻舟姫と添臥さまに。見すべき豫ての手段なり。然故爰を小暗なし。眞の姫は腰元に。打紛れて辷り出つ。此事を能知者は。久しく爰に仕へ馴し。紅計りに有なれば。早百合を始め其外の。腰元輩には沙汰するな。例の己が好心と。思はせよ。譏らせよ。ト語り玉へば光氏の。今に始めぬ事乍ら。用意深きを杉生は。深く感じて退きければ。光氏は暫し熟眠み未夜深きに立出ぬ。早百合は夫と聞附たれど。知顔ならじと打臥て。御送に共聲つくらず。此方もいと忍びやかに。歸らせ給ひ鳧となん。」遊佐河原之進國助は。光氏が猜せし如く。密に娘紫を。見ま欲くて姿をかへ。忍びやかに六條の。小玉が住居へ折節音れ。紫も馴親しみ。睦しく語らひしが。小玉は九月廿日の程。遂に空しくなりたり。ト言の葉より告越ければ。國助は打驚き其儘行かんと思ひしかど。室町御所への出仕繁く。五七日過て後。漸〻少しの暇を得。女乘物かき寄させ。竊に是へ乗移り。直に彼處へ至ければ。言の葉は一間へ請じ、哀れなりける小玉の様を。言出しつゝ泣ければ。國助も目を屢

瞬き。涙見せじと物淋しき。四下の樣を見渡て。いと廣けれど物古て。荒増りたる此家に斯ては如何で住果べき。近き中に紫は。我方に誘はん。家にも二人の子をもてり。諸共に遊びなば。少しは紛るゝ事も有べし。とは思へども光氏君。許多の黄金を積せられ。廓を出し給ひしを。連行んも憚あり。とあつて黄金を我もとり償ひたり共。若君の。受納めは仕給ふまじ。此事殆ど當惑せり。先夫よりは差當。小玉が果敢なくなりたるを。君には知食されしや。と問はれて言の葉膝を進め。久振にて今日晝頃光氏樣より御狀ゆゑ。其御返事に私から。委く申し上ましたと。語る折しも紫は。父の聲を聞つけて。走り出れば國助は。膝の邊りへ近くよせ。斯なる事と知るならば。頓に舘へ迎取り。母の許にて養育なば。假令繼しき仲なり共。一層不便もまさらんに。澤菊小玉が世を去て。寄邊なき故詮方つき。呼迎へしと思ひやせん。夫のみ心苦しゝ。吐息をつけば言の葉は。涙を拂ひ聲打密め。「お心細く侍らんず。暫しはこゝに任せ玉ひ。人の目顏をも能悟り。御物心つきて後。迎へ給はゞ奧樣の。御愛情みも深かるべし。此頃は就中。小玉樣の御事を。晝夜戀う思食し。お髮を上るも五月蠅がり。御膳もろくに召上らず。是お手迄が細りしと。又も涙に暮ければ。



國助熟々打見に。實に言の葉が言たる如く。髮も亂れて面痩たるが。猶美しく着なしたる小袖の古てなへたるを。哀れげに思ひなし。手を取て抱き寄せ。何程思ひ嘆く共。世に亡人は其甲斐なし。在家を知ねば今迄こそ。便もなさで過ししが。我だにあれば御身の上。惡き樣には。計らはじと樣々に賺し聞え。夕暮方になりければ。去來歸らんと立上るを。心細しと思ひてや。目を擦赤め紫は。裳に縋り放たねば。國助も打泣て。「さな嘆きそよ別るゝ共。近きに舘へ迎へんと。立出る後影。名殘惜げに打見やり。是より繼しき母に仕へ。辛苦やせんと言事は。年足はねば思ひもやらず。只年頃に奮縁て。片時側を離れざりし。小玉の事のみ戀慕ひ。幼心に胸塞がり。いつもの樣に遊もやらず。晝は紛るゝ事あれども夕暮方は何日迚も。思ひくづをれ居たりしかば。斯てはいかで過し給はん。哀の事やと慰め兼。言の葉は持てあぐみ。共に袖をぞ絞りける。」神無月に至りなば。紅葉の賀莚あるべしと。其催し頻りにて。能今樣に長たる者を。夫彼撰み給ひければ。光氏は暇なく。彼若草をも暫が程。音信ざりしを思ひ出。狀書認めふりはへて。彼處へ使を走らせけるに。小玉は過つる二十日の程。遂に空くなりたりと。言の葉の返事に。細々と聞えければ。光氏

は是を見て。母花桐に後れたる。其悲しさを思ひ出。我身の上に比較べ。幼心に戀やすらん。不便の事やと紫が。有樣の心許なく。一まづ彼處を訪はんと。忍びやかに出玉ひ。駕を急がせ行程に。早彼家に近附をり。怪しげなる女乘物。向の方より舁來り。光氏のおはするを。見るより駕の簾を下し。つと横道へきれ行にぞ。光氏是を見咎てや。惟吉を近く招き。何事かは密々と。囁き合て目印に。是もて行けと扇を渡し。彼乘物の後を追せ。其身はさらぬ風情して。頓て門へ立入給ふに。見しよりも猶荒增り。人少なる有樣なれば。幼心に紫の。嘸恐ろしとや思ふらんと。打案じつゝ呟き給ふを。言の葉は聞付て。平常の一間へ御坐を設け。小玉がはかなき有樣杯。打泣つゝ繰返し〳〵言出れば。光氏も袖を濡し。言出ん詞もなく。默然として居たり鳧。言の葉は涕打かみ。君には申し上るなど。口固はせられしかど。紫樣の父上は。何某殿とて國司。是にお在と聞附て。館へ迎へ給はんと。仰せ越れし其時に。小玉樣が密々と。妾へ宣ふは。世を過去し我娘。此紫を産たるは。何某殿の妾にて。彼處へ送りやる時は。其奥方とは繼しき中。殊には心頑しく。悋氣深き性にて。子も二三人おはす由。夫と雜らば紫は。妾腹とて蔑られん。何事をも辨へぬ。



幼稚程か扨は又。成長なして人の氣を。汲知る程なら宜けれども。其中空なる年頃故。彼處へ送る心はなしと。嘆き玉ふも無理ならず。なさぬ中故さがなき名を。世に歌はるゝは有慣ひ。若君樣の有難き。仰の程を言出し玉ひ。御戲れにて末々は。いかならん共疑はず。嬉敷事には有なれど。只紫が年よりも。最幼くて若君と。似合しからぬが氣懸りなと。果敢なくならせ玉ふ迄。其事斗り宣ひしと。語れば光氏顔を上。「先つ頃も言し如く。其幼氣なる有樣を。憐れに懷敷思ふなり。人傳ならで今宵こそ。彼に心を語らめ。ト宣ふ此方に紫は。小玉の事を慕ひわび。泣寐に臥て居たりしが。あの袴着しお盜の。艶美なる抔腰元の。女が言を寐耳に聞。父國助の來たりしと。思ひ違へて起出つ。言の葉よ。袴召してと腰元の。今言たるは父上が。道より歸來ませしかと。最愛しき聲にて呼。走り來たつて言の葉に。ひた〳〵と寄添へば。光氏は打見やり。「イヤ父君には非ずとも。思ひ捨べき人にもあらず。爰へ〳〵と宣ふを。恥かしかりし其人の。聲と有繫に聞なして。よしなき事を言たりと。顔打背け眠たきに。いざ言の葉よ連てゆけと。打紛らせば光氏は。少し面に笑を含み。など今更に隱るゝぞ。我此膝を枕にし。サア眠たくば寐るがよい。此方へ〳〵

と打招けば。言の葉も打笑つ。背丈は延て見え玉へど。御覧の通りの頑是なさ。七ッか八ッのお子の樣で。とんと他愛が御座りませぬ。と云つゝ側へ差寄れど。さのみは恥らふ氣色も見えず。何心なくつい居たる。紫が容姿。光氏熟々打見るに。寐間着の衣の柔弱に。艶々としてふさやかなる。髮少し打亂れ。衿へ懸るも美しさに。搔撫つゝ手をとれば。常には親しからざる人の。斯近付が恐ろしくや「ねなんと云へるものを迚。一間の裡へ引入れば。後につきて光氏も。其儘共に辷り入。疎み玉ふな。今よりは我こそ思ふ人なれと。云ふ聲聞て言の葉は。心の裡の安からず。「先程も申せし如く御心は未幼稚て。何と仰せのある迚も。甲斐なき事に侍らんと。いと苦しげに云ければ。光氏は打微笑。「予は幼稚娘一人。擧けし心に慰むのみ。心ざしの深さ淺さは。養育ての後見るべしと。宣ふ折しも時ならぬ。霰さら〳〵降出て。物凄き夜の樣なれば。光氏四下を打見廻し。かく人少にあらんには。心細くや思ふべき。人々も紫の。側近う寄て寐よ。雨戸もさせよとなれ顏に。屛風の中へ入玉へば。思ひ懸なき擧動を。言の葉は呆れ乍ら。聲打立て騷ぐべき。事にもあらねば轟く胸を。撫下してぞ居たりける。紫はいと恐ろしう。如何ならんと身も戰なかれ



不覺寒げに美しき。雪の肌も降來たる。霰の如く身の毛だち。俯し居れば光氏は。夜の具に押包み。寄添て莞爾に。嵯峨の館へ來玉へよ。彼處は庭もいと廣く。鬼わたし做にもよし。美しき繪も數多あり。雛遊びを常にする。相手も多き處ぞ。トまだ大人びぬ紫が。心につくべき事を撰。樣々に言玉ふ。其風姿のいと懷しきに。始めの怖さは忘るれども。有繫によくは寐も入ず。身じろきのみして臥居たり。夜一夜風は吹荒て。空の氣色も穩かならず。言の葉始めつき〴〵は。覺束なさに屛風の外に。打集りて居たりしが。若君の宣ふ如く。斯物凄き夜なんどは。心細くや思すべき。おなじくは御年の。よろしき程にて在まし。彼方へ行かせ玉ひなば。長閑に住せ玉はんものをと。密語あへるを光氏は。聞ぬ樣に起出つ。風少し吹止たれば。夜は深けれどいざ歸らん。哀れに住る有樣を。親しく見つれば猶更に。片時こゝには置難し。旦暮ながむる處へ移さん。住馴しとは言乍ら。予さへ凄き此家に。能も怖をせざりしよ。ト宣へば言の葉が。「小玉樣のお四十九日。過なば御館へ迎へ玉へ。夫迄には御物心。少しは附せらるゝ樣に。妾が教まゐらせん。ト容ふれば光氏は。打點頭つゝすやすやと。眠りこけたる紫を。搔撫て別れをつげ。返り見勝に出玉ひ

ぬ。」光氏は夫よりも。館の方へは立歸らず。彼六條へ忍び〳〵。通ひし道へ赴きつ。乘物
は待たせ置。彼方此方と浮れ歩き。霧わたりてまだ微暗く。遠目には見分難し。扇を竿に
結下げ門へ出せし處やある。能見てまいれト近習の武士に。吩附玉へば心得て。近邊四下
を走り廻り。あの家にこそ候ふなれと。敎へ申せば近く立寄。(朝霧の籬にしるし妹が門)
ト吟じつゝ門の戸を打叩かせ玉ひければ。是なん合圖と覺しくて。裡より惟吉立出れば。
光氏は小聲になり。昨夜の樣子を探り知。我渡したる此扇を。目印として此處に。待合す
べき手筈を違へず。太義〳〵と近く呼よせ。偖かの門にて見懸たる怪の女乘物は。推量
したるに違ひなく。遊佐國助にて有つらん。其故は我打通りし。坐敷に落し置たるは。是
此如く男扇。泥にて書たる遊佐の紋。また紫が父上の。道より戻り玉ひしかと。言たるに
て能知たり。ト宣へば手をつかへ。「仰せに從ひ乘物の。後をつけ行窺ふに。宣ふ如く彼國
助君の來らせ玉ひしを。彼も見とめて取て返し。秋草茂りし前栽へ。身を隱して樣子を窺
ひ。君のお寐間に入玉ひ。御物語し玉ふ間に。言の葉を呼出し。國助の言けるやう。山名
宗全反逆を企て。予を味方に附んとす。其事を光氏君。聞食されて紫を。在下が娘と知。



人質のため。誘ひ玉ふと今宵迄は思ひしが。然にはあらで幼氣なる。立擧動の御心に。叶
ひて愛し玉ふ樣子。あら有難き事にてあり。此後來らせ玉ひなば。心を盡して款待まゐら
せ。娘を如何にも言拵へ。彼方へ渡し奉つれと。喜び顏にて歸りし迄。後に付て聞取たり。
又此家は三筋町の。廓通ひをする者が。休らふ茶屋に候が。爰の娘は小辨とて。言の葉が
妹なり。鞍馬の山の別莊にて。彼を身請の其時に。來合せて居たりしかば。詞を交し其後
も。御狀をもて參る時。折節こゝに立寄て。樣子を見るにまだ年は。十六七に候はんが。
いと〳〵怜悧性と云ひ。殊には君の惠みを受し。言の葉の妹なれば。假令は密事を聞たり
共。外へは漏じと存ぜし故。御扇を印に出し。此處にて待合せ。奉つらんとは申せしなり
と。聞て光氏笑はせ玉ひ。「汝も最早成人したれば。忍び女を住する家かと。思ふよりして
妹が門と。押當に吟ぜしが。戀にはあらで言の葉が。妹の門にて有けるか。其小弁とやら
紫が。遊び相手によかるべし。父か母か有ならん。望みほど黃金を與へ。連來たれよと
言棄て。明行空にはしたなき。姿を人に見られじと。駕を急がせ給ひけり。」光氏は館へ歸
り。紫が未幼氣にて。をかしかりつる事抔ど。思ひ出して一人打笑み。暫しが程睡眠つ。

日高う起出んと仕玉ふ折から。早百合が來り。「けしからぬ御朝寐。昨夜どれへぞおいで遊ばし。其お疲れでと言を打消し。「イヤ心安き一人り寐の。床ゆゑ心緩びてなり。糺すよりかと宣へば。ハイ何れへも寄ませず。直に是へ上りました。何日ぞや君のおいでの後。お狀をお上遊ばせと。口々お勸め申しても。姫君樣は恥かしく。思食してや遲なはり漸是へと差出せば。「又例の綾柳が。敎へて書せし者ならん。と光氏手にとり見給ふに。(音もせず君は夫より遠砧)と能も聞えぬ發句をそへ。年經て色の變りたる。紫の半切紙へ。手は男めきてこは〳〵敷。上下そろへて散しもせず。拾ひ書したりければ。見る甲斐なくて其儘うち置き。早百合を褥の側まで近附け。我忍びしを杉生。に知せて憂目を見せたる報ひ。是より汝は糺へかへさず。送り遣はす處こそあれ。紫とてまだ幼き。遊女を一人り云々の。事にて此春身受なし。忍ばせて置つるが。斯樣〳〵の事共にて。彼は人手に渡し難し。とあつて祖母の忌の中は。先此處に置玉へと。言の葉がたつての願ひ。言破らんも不便故。その儘に歸りしが。心許なく思ふなり。御身今より彼處につかへ。怪敷事もあらんには。密に予へ告知せよ。御身の代りの腰元づかひは。是より糺へ送り遣はし。仔細あつて早百



合は暫く留置よしを稻舟の。許へ委く予より云はんと。宣ふを聞終りて。「ソハ輕からぬ大事ながら。仰せに背き侍べらじ。愚なる身の心の限り。是より仕へまゐらせんと。答ふれば光氏喜び。「恰悧性れに見えつれども。元は流れの女の言の葉。此事必ずさたするなと。繰返し〳〵。敎へ玉ふ其處へ。惟吉は小辨を誘ひ。御後より立歸り。「是こそ過刻申し上し言の葉が妹なれと。聞え上れば點頭玉ひ。「其娘と此爰にをる。早百合を誘ひ京極へ。汝は直に取て返し。人少にて紫が。淋き樣に見えたる故。腰元づかひを遣はすと。言置て歸るべし。予も章を送らん。ト頓て机を引寄せしが何と書とも彼幼き。心には見分まじと。只目を附べき愛らしき。繪をかきなして是持てゆけと。早百合に渡給ひけり。」十月十日あまり。東福寺の紅葉盛りにて。殊に此頃春めきて。麗かなる日の打續けば。明日なん賀莚あるべきと。室町殿より觸られける。尋常ならず面白かるべき此遊びを。富徽の前を始めとし。御方々の見給はぬを。口惜がり玉ひければ。義政も藤の方に。見ざるが殘りおほく然あらば明日は諸共に。何れも彼處へ行べしと。俄に其準備を調へ。義政父子は東雲の。頃よりして館を立ち出。夜も全く明て後。富徽の前藤の方。其外寵を蒙りし。女乘物うち

續き。いと華々敷南をさし。東へ折てねり行けり。」抑恵日山東福寺は。大和大路に聞えたる。一二の橋の間にあり。法堂より山上の。傳衣閣へ廻り行。廊の下に流水あり。爰をわたる回廊は橋の如くに造りし故。是を通天橋といふ。橋下を洗玉礀と呼は。岩に當つて玉なす水の。潔よきを云ふなるべし。此邊りに數多立てる。紅葉の今を盛りにて。錦を晒すに異らず。偖今日の結構は。洗玉礀の其上に。廣き舞臺を打渡し。通天橋に御簾をかけしは。義政始め富徽の前。方々の是よりして。物見給はん設けにて。總て廻廊を棧敷とし。法堂をまくやと定めつ。是らの事は光氏が。昨日より爰に來り。悉く指揮なし。總て準備ぞ整ひける。

偐紫田舍源氏第八編終



# 偐紫田舍源氏第九編序

今は昔の田舍莊子は。葎にすだく蟲の。物語になぞらへて。よく人を教誡しつ。蚯蚓に骨あり。蛙に力あり。未學の者の爭およばん。これも昔の田舍談義は。狐の夜話雜長持と。もろともに流行れ。十方世界の穴を穿ち。一切衆生の願を解き。彌陀の利劒に睡魔を拂へり。それより後の田舍芝居は。とん〳〵せりふの筆ばしり。をかしき事のかぎりを盡し。腹筋のより〳〵に。もてはやし〳〵を思ひ出。やがて此の草紙にも。田舍といふ名はかうぶらすれど。人を敎道力も無く。人を笑す才もなし。前にも引書に著したる。雛鶴紅白なんぞ號。果敢なき冊子の拾ひ書き。紫女七論の七編まで。やう〳〵去年刊行成。今年は八編九品の淨土。源氏供養竟宴までは。思ひもよらぬ拙作ながら。せめてふるき常言の。三月庭訓須磨源氏。明石の卷までたち消の。せぬやうにと油をのせ。燈心おさへて書きたつること斯の如し。

天保癸巳初春　柳亭種彦誌

# 偐紫田舍源氏第九編

柳亭種彥著

義政公富徽の前。義尙光氏始めとして。昵近外様の面々迄殘る人なく。東福寺に集ひければ。今日の各自心を屈せず。思ひの儘に酒うち飮み。紅葉狩なすべき旨。義政公より觸られけるにぞ。或ひは方丈の座敷に集り。或ひは庭に打こぞり。莚をはしらせ毛氈を敷連ね酒宴して遊びしが。冬の日の最短くて。早晝さがる頃になりぬ。此時に義政は。豫て棧敷に設け置し。通天橋に御座を移され。左りの方は富徽の前。押並んで藤の方。其外數多の女輩。處せましと居流れたり。右の方は屛風を以て。其間を押圍ひ。義尙が席と定め。少し下つて光氏は。大人しやかにぞ控ける。廻廊には諸士の大勢。星の如くに列りつ。義政は下知を傳へ。準備も最早調ひつらん。夫々と宣へは。仰せ畏み候とて。何れも衣裳に綺羅を飾り。能今樣を盡したる。舞ども種々多くあり。其鼓の聲太皷の音。實に世を響かす遊な



り。遊佐河原之進國助は。尺八の能を勤め。石堂馬之丞は浮世忘れの今樣を奏で。其他の者輩も。豫て各自の師を撰び。此程より引籠り能習ひ浮めしかば。何れも疎なるは非ず。就中かの光氏は。樂の道に精しく。舞にも妙を得たるに依り。遙往時唐土より。此日の本へ傳たる。青海波をこそ舞たりけれ。是は二人連舞に。倣べき樂にて有ければ。赤松太郎高直ぞ。御對手を勤めける。彼も世に聞えたる。國司の嫡子といひ。顏貌も尋常の。人には遙立まさり。最風流なる男ながら。彼光氏と立列ては。花の傍の深山木なり。入方の日影さやかに射たるに樂の聲まさり。同じ舞の足踏も。光氏はいと長閑にて。打笑玉ふ目元清しく。常よりも光り差添ひ。挿頭の紅葉甚散過ぎ。顏の匂ひに消押れたる心地すれば菊の花も折來り。遊佐の國助さし替けり。さる艶麗なる光氏が。姿に菊の色々映ひ。えならぬを翳しつゝ。聲打揚て謠ひ杯し玉へるは。佛の國に有ときく。迦陵頻伽も斯やらんと面白く又哀れなるに。聞人涙を落しけり。偖光氏は謠ひ終り。袖打直せば待設けし。樂の聲賑しく。手を盡したるいりあやの程漫ろ寒く。此世の者とも思はれず。物見知まじき下賤杯の。木の下岩隱れ木の葉にうづもれて見ゐたるさへ。思はずも哄ゑ造ト。聲を揚てぞ

褒たりける。富徽の前は此舞を熟々詠めて莞爾笑ひ。「人には缺目の有こそよけれと。俚諺にも言慣はす。文武は元より此様な。遊び業迄長たる光氏。早世か神隠しか。然した事でも無ればよい。ト口には賞て心には。呪咀する如く宣ふを。吁心うき仰せやと。耳に留めて付從ふ。女は此方を見返れば。藤の方は光氏と。親き仲と人も知。我も心の恥かしさに富徽の前の女輩。もし我顔をまもるかと。此面白さも身に染ず。只夢心地に見居たり鳧。富徽の前は尻目に見やり。「藤の方は三月より。心地悪とて引籠り。君の宿直をし玉はず。音川の下館へ。下られたるは卯月の頃。然すれば君の御胤を。宿されたのは如月にて。算へて見れば九の月。嘸かし御身も重からんに。今日はようこそ是迄。ト云れて猶も胸苦しく。答ふる言葉もなき折柄。木の葉下しと云琵琶の。撥音繁く彼方に聞え。次の舞の始りぞと。人々の立騒ぐに。打紛らして藤の方。さらぬ風情に佯したり。程なく舞臺へ練出し。千景の腹なりし。彼四郎正尚が。まだ童子にて櫻人と。云今様を舞たるは。彼光氏が青海波に。差次ての見物なり。之に付ても光氏の。能教玉ひける迚。人の目をも驚かせ。義政初め千景の方の。心をも喜ばせ。斯人々の賞讃る。光氏君の昔の世は。如何許かの善根



を。做玉ひし故なるかと。床しがりつゝ私語けり。是らに面白さは盡にければ。こと醒しとや笑はれんと。續いて舞はんと云者なく。芝居破り（是は今切狂言と言程の事なり。慶長中の物の本に見えたれば。猶古き俗語なるべし。）は義尚と。光氏の兩人にて。折に合たる紅葉狩の。能を勸めん定めなれば。是をこそ迚勸めけれ。左右なすまに。日も西山に傾きければ。夫よからんと義政の。仰せに從ひ光氏は。烏帽子をきなし太刀を佩き。惟茂の姿に打扮ち。義尚は袿をまとひ。結帽子を結下げ。是は此邊りに住女にて候と打出し。或ひは謠ひ或ひは舞。小高き紅葉の蔭にして。吹立たる笛の音は。松風の響きにあひ。眞の深山颪と聞え。種々に散亂るゝ。木の葉の中より裝ひ飾り。予は平の惟茂なり。と輝き出たる其様は。最恐ろしき迄に見ゆ。此時日は既に暮かゝり。景色ばかり打時雨て。空物凄くなりたるも。能の感應なるべしと。片唾を飲で見物す。時に怪しや警固の中より。鬼の假面にて面を隱せし。曲者二人ン飛で出。義尚光氏二人りを目懸。切て懸れば近習の武士素破事こそと刀押取り。各自彼處へ馳集る。其時光氏少しも騒がず。身をかはして曲者の襟髪摑んで取て投。足下に踏伏て動かせず。又一人ンが打懸るを。腕首摑んでぐつと捻上

げ。「ヤレ仰山なり靜まれ〳〵。まづ兄上をば父君の。御側へ誘ひ進らせ。傅いて居べきなり。予は是より一人にて。いで〳〵舞て見せ申さん。目出度御世の遊びに迄。眞劍帯すは武士のたしなみ。切味見せんと聲張揚げ『南無や八幡大菩薩。と心に念じ劍を拔て。待かけ給へば微塵になさんと。飛で懸るを飛違ひ。無手とくみ。鬼神の眞中刺通し。』一人の曲者切て捨。一人ンを搦めとり。誰かある此者を。糺問せよと。突やり給へば。承はりぬト遊佐の國助。引立行に。目も懸ず『急地鬼神を従へ玉ふ。威勢の程こそ恐ろしけれ。』ト悠然と舞納め。幕屋の裡へ引取りけり。「内君方々は言もさらなり。義政も此騒ぎに。心穏かならざりければ。直に歸館を促され。路の程も覺束なし。光氏も共々に歸るべき由宣ひけれども。予は後に留りて。彼曲者に同類ありや。樣子を見極め候べしと。其詞に従はず方丈に一人り殘り。彼曲者は如何にぞ。ト問ひもやらずに盃取上げ。閃く月にはらはらと散しく紅葉打詠め。刄に血しほを濺ぎたる。景色は見えず長閑に。暫し發句を打案じ。硯を乞て懷中紙へ。さらさらと書終り。惟吉を呼出し。「汝今より御所へゆき。司と云へるまだ若き。腰元を在下が。豫て語合ひ置たれば。夫を呼出し此章を。人知ず藤の方へ。進す



樣に計らふべし。杉生には沙汰するな。ト追遣玉ふ其處へ。遊佐の國助御前に出で。「仰せに従ひ曲者を。嚴しく詮義致せし處。彼は猫山三毛藏とて。北國の浪人者。過刻の御手を下され。討て捨給ひたる。犬嶽むく平と牒し合せ。或ひは騙兒或ひは盗賊。都を横行したりしが。先年舞の指南する。凌晨に語合はれ。君の忍ばせ玉ふを見定め。打取らんと做たるが。壁を毀ちて落失玉ひ。剰へ御家臣の。何とか言し者者に。投附られ踏飛され。辛き目に出逢たる。其無念忘れ難き。折に僥倖さる人が。君に深き仇あつて。密かに討取る者ならば。武士に取立えさせんと。聞と其儘味方に加り。草履掴みの僕と共に。音川の館より。御歸路を待伏して。只一刀に討て捨。又も以前の御家臣に。見咎められて彼の僕は。其處に敢なくなりしかど。二人りは難なく逃果せ。仕濟し顔に立歸り。先斯々と告ければさる人大きに打喜び。猶も樣子を聞糺せば。打留たるは苅萱とか。云ふ尼にて有ける由。有繫に予も。犬嶽も。面目なさに其處を立退き。左やせん右やと思ふ折。今日の事ども委しく聞。警固に紛れ入込しは。言迄もなく君を弑し。武士にならんと思ふて也。言べき事も是限り。疾々首を刎られよと。語合はれたる其人の。姓名は白狀せず。猶も糺問致さんや

ト伺ひ申せば打笑玉ひ。「彼ら如きを頼みとし。予を討んと做程の。臆病者の姓名は聞に及ばぬ棄てをけ。偖折角の紅葉の御賀。思ひ懸なき騒動にて。人は興も醒つらんが。予は今日程惟茂を。快く舞たる事は。今迄一度も無りしなり。御身の勤めし尺八の。能は見物にありける抔。彼紫の所縁ぞと。思ひ給ふて睦しく。いと細やかに樣々の。物語りしたりしかば。國助も光氏の。常より殊に懷しう。打解たりし顔ばせの。艶麗なるを打眺め。予若女にあるならば。此若君に宮仕を。願はん者をと見惚つゝ。紫の事思ひ出で。わが女壻にも齊き君。娘は果報いみじき者と。始めて己れが色めきし。心を深く恥らひけり。「義尙光氏兩人が危かりしに興盡て。義政は路を急がせ。室町へ歸りしが。何れも些か過失なく。殊には愛子の光氏が。武勇の程を間近く見て。又喜びも大方ならず。機嫌よげに打休み。今宵宿直に侍べりし。藤の方を近く招き。「今日の舞は青海波に。事僉盡て其外には目を移らざる心地せり。御身は如何見たりしと。蕭やかに問給へば。もし若君と語合ひし。事も有かと試に。斯宣ふやと胸轟き。回答も直には聞えにくゝ。「殊に勝れておはせし。ト詞少に差俯く。義政は心も付ず。「相手に出たる高直も。あながち惡と言には非ず。舞の樣手づかひ抔ぞ。國司の子は又格別。今の世に名を得たる。舞の師匠は上手なれど。只何となく長閑に。媚く姿は高直こそ。却て彼師に勝るらめ。富徽の前を誘ひしは。御身に見せん爲なり。ト物語りつゝ打眠る。折柄來たる腰元司。屛風の裡を差覗き。密々と打招けば。何事かはと藤の方。徐かに其處を立退つ。此方へ來たれば件の腰元。帶の間に打はさみし結び文を取出す。不審乍ら藤の方。押開いて詠むれば。光氏の手跡にて。『物思ふ身は世に知ぬ。みだり心地に侍りしを。人は如何か見給ふらん。(心しるや袖打振し村時雨)あなかしこ』ト書てあり。常には人の疑はんと。返事はせざりしが。今日の舞の面白さを。只見過さんも堪難くや。懷中の紅筆にて(袖ふると見るや紅葉の唐錦)大方には。と書棄て投やりければ。彼司袖に隱して走り出。惟吉にこそ渡しけれ。惟吉は受取て。急がはしく立歸り直に御前に罷出。差上申せば光氏君。「いと珍敷返事と。云つゝひらいて讀下し。等閑には見ざりしを。大方にはと仄知し。青海波は唐土より。傳へたる樂なる故。唐錦とは爲られしならん。女の身にて唐土の。樂の道迄委きは。吁奥懷し父上の。彼をば富徽と同じ樣に。人々も傅けよと宣ひしも。實に道理なりと。心の裡に微笑まれ。佛經を讀如く。兩手に

さゝげて打廣げ。暫し詠めて居給ひ鳧。「光氏一日赤松の館へ行けるが。例の二葉の上は直に對面も仕給はず。人々に勸められ。漸に立出乍ら。打背けて親げに。物語りをも爲さざれば、光氏はむづかしと。吾妻琴を菅掻て。『ひたちには田をこそつくれ。』と云ふ歌を。聲はいと媚きて。謠すさびて居給ふ處へ。先の程紫の。許へ使に走らせたる。惟吉が歸り來たれり。二葉の上は彼らに逢はんも。物うし迚入ければ。光氏惟吉を近く召寄せ。其有様を問ひ給ふに。聲を密めて答ふる様。最怪しき事こそあれ。御章を持參り。言の葉に渡したれど。常の如くは讀もなさず。紫様の父上より。明なば迎へ給はんと。仰せ越れ侍れば。最々心慌たゞし。此頃久しく住馴し。蓬生を離れんも。流石に今は心細し。俄の事故此様に。何も彼も取散し。ト詞少に云々とは。在下を待遇はず。縫物抔を取急ぐ。様子は譯の有べき事と。返事を乞ず其儘に。立歸り候と。聞て光氏眉を顰め。「何日ぞやの夜國助が。立聞なすと推量し。態と親しく紫と。添臥す様を見せたる故。彼も心を安んじて。歸りし事は汝も知る。然すれば今更紫を。迎へ取るべき筈もなし。ト暫が程打案じ。夫よ〳〵ト小膝をうち。何は兎もあれ人手に渡さば。盜出んに事難し。夜更て後彼處へ行かん。



乗物の準備なし。汝は馬にて後より續け。「承はりぬト惟吉が。立去ると引違へ。慌忙げに早百合が來たり。「仰せに從ひ紫さまの。御側に付從ひ。心を付て侍りしが。今日夕暮がた國助殿の。家來片欖調太夫と。言者來つて言の葉と。密に語るを何事かと。障子の隙より窺へば。彼調太夫小聲になり。「能々世間の噂を聞に。光氏君は紫を。眞に愛し給ふに非ず。人質の爲め鞍馬にて。身請されしに疑ひなし。然すれば彼方へ渡しなば。まだ分別も知ぬ娘。如何なる憂目を見んも知ず。と最哀れなる物語りを。種々にしたりしかば。言の葉は大いに愕き。如何にせんと泣惑ふを。調太夫押留め。「夜も明なば迎へに來ん。嘆いて人に氣取れなと。約束なして立歸れば。言の葉は忙がは敷。紫さまの前へ出で。「父上の御許へ明日は誘ひ參らせん。大人しやかに做給へ。光氏君の若是へ。今宵忍びておはす共。物の序に幼なく。此事聞えさせ玉ふな。夫が障りとなる時は。お側に付て居者の。落度なりと父君に。さいなまれ侍らんと。言のは何共思召さず。遊んでおいで被成ます。紫様へも夫程に。口かためして置乍ら。惟吉殿に浮々と。言の葉が言出したは。流石女の淺果敢と。可咲くもあり何した事か。様子は知ず此事を。申し上に參りし。ト聞て光氏莞爾と笑ひ。

「然もあらん〳〵。詐られては口惜し。其先に彼奴輩の。計畫の裏をかき。ア、高直は折惡く。室町へ宿直の不在。いかにせましと手を打組み。思案に暮る其折柄。かの石堂馬之丞。御機嫌如何と入來れば。ヲ、好處へ馬之丞。頼みたき事こそあれ。と耳に口を差寄て。稍暫く密語玉ひ。「な。彼片櫃調太夫は。必定山名のまはし者。鞍馬の山にて國助が。娘の遊女になつたる事を。宗全に語りし故。元來奸智の深き宗全。是こそは好人質なれと。其娘の行方を尋ね。在下彼處へ忍ばせ置を。捜り知て奪取らん。奸計に疑ひなし。我は夜明ぬ其中に。言の葉諸共紫を。嵯峨の館へ連歸らん。汝は後に留りゐて。調太夫が迎への乘物坐敷迄舁上させ。乳人なんどゝ合輿の。樣に伴し人知ず。汝夫へ乘移り。山名の邸へ舁行かば。乘物を踏碎き。迎への奴輩切捨よ。併し彼者國助が。實に家來にあらんには。遊佐の館へ歸るべし。其時は荒氣を出さず。國助に面會し。眞もつて紫を。人質に做にあらず。光氏思ひに堪兼て。貰ひ受しと神妙に。とわりて立歸れ。其駕添は此早百合汝も。油斷を致すな。ト猶言敎へ給ひければ。了承候とて。二人りは御前を退きけり。「光氏さらぬ風情にて。又琴を引寄せつ。掻鳴して居たりしに。二葉の上は又例の。澁々に一間を出で。



夜もいかう更たるに。憩ませ給へ。ト聞えければ「イヤ予は嵯峨の館にて。急に做べき事ありしを。今思ひ出したり。其用を調へて。立歸り來るべし。と言紛らして出給ふを。心解ねば二葉の上。今宵は爰にと留めもせず。夜中ばかりの事なる故。腰元輩も光氏の。歸りは更に知ざりけり」。光氏彼處に赴き。門打叩かせ給ひければ。何心なき下男。ヲウと答て開たるに。徐々乘物舁入させ。惟吉が雨戸を鳴し。打咳けば言の葉が。聞知て出來り。光に透して此方を詠め。「紫樣は前後も知ず。お靜まつて御座ります。何と思ふて今時分。三筋町のお歸りか。夫にしても餘りに夜深。ト言を光氏引取て。「紫を父の元へ。明日は送ると傳へ聞。其先に只一言。いひ聞け置ん事ありて。と宣ふ顏を打まもり。「何の事かは知らねども。見給ふ如きあどなきお性。果敢〴〵敷お返事を。なさる事では有まいと。打笑ひつゝ言の葉が。言を聞捨光氏は。入んと做を押留め。「爰の間には女子輩。枕を外す夜衣ふみやる。打解姿で寢て居を。お目に觸るも憚りなと。縋る袂を光氏は。振拂つて襖をあけ「紫はまだ目が覺ぬか。どれ〳〵己が起してやらう。日は最とくに差登る。此朝霧の深いも知らで。寢てゐる事がある者か。とまだ夜深さを僞りて。閨の屛風を押遣りつ。何心なく

眠りゐる。紫をゆり覺せば。側に臥たる小弁はふつと。目を打開いて怪しとは。見たれど呀とも聲をば立ず。紫は父國助の。迎へに來ると寐をびれて。思ひ違へつすや／＼と。猶打眠る髮搔上げ。「いざ御供を仕つらん。父君の仰せをうけ。御使に參りたり。ト宣ふ聲の父ならねば。紫は始めて驚き。吁恐ろしと迯んとせしが。ふと其人の顏を見るに。彼恥しと思ひたる。光氏にて有ければ。少し怖さも打忘れ。夜衣引被ぐを搔抱き。「父も予も同じ人ぞ。さのみに疎み給ふなと。誘ひ出んと爲たりければ。言の葉は又縋り付。「想ひやりなき御程とは。常々聞え置たるに。如何にかせさせ給ふぞと。云へば光氏振返り。「爰へは繁々通ひ難く。覺束なく思ふがゆゑ。心安き處へ置かん。汝も共に來れよかしと。聞て言の葉猶放さず。「此頃申し上し如く。紫さまの父上は。人も名をしる國司。然すれば此事聞えて後は。左も右も成侍らん。周章しく連退き給ひ。父上明日にもおはしなば。何とか申し開かんと。聞て光氏打微笑み。「よし何者の胤にもせよ。一たん遊女と成たる紫。其身の代を償ひおき。連行を誰かはこばまん。御身は爰に用あらば。後より來れと駕籠を寄させ。紫を打乘すれば。道理に迫つて言の葉も。今は留めん詞もなく。遊佐の館へ紫が。始



めて行ん晴衣にと。昨夜縫置し小袖を引下げ。自らも又寐衣を脱捨て。上着下着を手早に着替。帶ぐる／＼と卷乍ら。庭へ下れば光氏は。夫々と指揮して。かの紫の乘物へ。言の葉をも共にのせ。惟吉が馬引寄させ。其身は是へ乘移り。手綱かいくり歸りけり。

○いと夜の永き頃なれば。東も未だ白まぬ中に。嵯峨の館へ歸り給ひ。駕をば直に庭口より。西の方に引離れし。座敷の緣に舁寄せさせ。光氏はいと輕らかに。紫を搔抱き乘物より出ければ。言の葉も續いて出で。其處等四邊を打見廻し。「殆ど夢を見た樣な。妾は是からは。何致すので御坐ります。とトべつたり坐れば光氏可咲く。「紫を早迎へ取れば汝には然迄用もない。歸りたくば送らせん。心任せに做がよい。ト言れて流石行かれもせず。彼人質とやら怖ろ敷。憂目をば見玉はんと。苦慮に胸も靜ならず。左にも右にも賴母敷。小玉に後れ紫の。甲斐なき運を想ひやり。落る涙を始めての。輿入なるに忌々しと。漸こたへ居たり鳧。此所は光氏が常に住ざる座敷故。衝立屛風も無かりければ。是らを始め夜の具。枕の類を惟吉に。吩咐て取寄せさせ。假に四下を引繕ひ。「紫も是へ來て。先緩々と休むがよい。と最馴々しく宣ふが。何とやらん恐ろ敷。身は震はるれど聲立て。流石に泣

も出されず。言の葉と共に寐ん。ト言聲のいと若し。光氏は打笑ひ。乳母腰元に抱かれて寐るは幼稚中の事。最早然云ふ年でもなし。女は人の詞を背かず。如何にも心安らかに。持こそ宜けれと教へられ。何と回答ん詞もなく。袖をまさぐり差俯く。言の葉も只虚々と明行儘に見渡せば。書院樓閣亭坐敷。其結構は更にも云はず。庭の砂子も白玉を。重ねたる樣に見え。輝き渡る心地して。寐亂れ髮の仂なき。己が姿は恥かしけれど。既に先にも言如く。爰は偶來る客を。款待ために造りたる。離座敷にあるなれば。女の居ぬに心緩み。徐々庭へ立出で。向ふの方を打見やる。折柄切戸を徐に開き、女乘物かき入て。駕夫は辷り出ぬ。誰が爰へ來たりしかと。何心なく差覗けば。駕に添しは早百合と小弁。言の葉は走寄り。「お前方も紫樣の。お伽に後からこざんしたか。彼所においで遊ばす。ト詞を懸るを光氏せいし。「樣子あつて其者には。在下が問事あり。言の葉は紫を。誘ふて次へたて。と追遣る中に乘物の。戸を引開て馬之丞。力もなげに立出つ。御前に手をつかへ。「仰せに從ひ彼處へ赴き。待間程なく。遊佐の迎へと。彼調太夫が來りしかば。御覽の通り此駕へ。人に知さず乘移り。鏖殺になさんづと。思ひの外に山名の館へ。舁行ん體もなく。



遊佐の館へは猶更戻らず。北へ〳〵と行先は。何處ならんと躊躇うち。案の外なる君の御所。こゝへ送りし彼が胸中。一えん合點進らず。ト申上れば有繋の光氏。小首を傾け思案にくれ。「河原之進が紫を。予へ送る程ならば。家來をやりて言の葉を。驚かさん筈もなしはて訝しき事にぞある。ト言に早百合がすり寄て。「御迎へに參つたる。片攬の調太夫。あのお切戸の外面迄。付添て參りしが。石堂樣が乘物から。お出なさるを透し見て。横手を拍て驚いた。樣子で控へて居まする。彼者を召まして。仔細をお尋ね遊ばしませ。と勸められて。「夫よ〳〵餘りに屈して心付ず。其者よべ ト仰せの下。恐々這出る調太夫。刀脇差投出し。「お腰元がた暫く夫を。トにぢり寄を見やり給ひ。「予に手敵ひなさゞる證。帶劍を渡せしは。四下の者を遠避て。直々密事を告んとなるべし。石堂始め女子輩。次へ退き休息せよ。調太夫とやら近う〳〵と。其身も緣の端へ立出。遊佐の家臣と言しは詐り。汝山名の間者にて。人質のため紫を。奪はん巧みと思ひし故。今見し如く石堂を。入替て乘つるなり。汝夫を知ならば。引包んで討取らん。備をこそ做べけれ。又其事を心づかず。紫なりと思ひなば。館へ誘なひ行べきに。乘物の儘在下へ。渡せし事こそ心得ぬ。予豫じめ

推量して。山名父子の奸計を。是迄屢次挫しが。一度も其圖を外さず。只此一條のみ思ふに違へり。如何〳〵にと宣へば。調太夫平伏し。「在下山名の家臣にて。人質に奪はん段々御賢察の通りなれば。喃々と申すに及ばず。又此駕へ御家臣の。乘られし事は努々存ぜず紫さまと一筋に。思ひて御供致せしなり。其故を申さんに。仔細あつて拙者めは。君に大恩受たる者。其御恩を送らんと。樣々心を碎きし處。此節山名宗全が。謀反の企て頻りにて。諸浪人をかり入る。是僥倖と是に加り。入込だるは密計を。盡く聞濟し。君の御不便かけ給ふ。女に親しき者あれば。夫より密に其事を。告奉つらん爲にてあり。又此度紫さまの。迎への役を乞受しは。先供人に聞するため。言の葉を驚かし。奪ひ取さまに伴し此處へ誘ひ進らせ。偖宗全が館へ歸り。今度巧みし事どもを。何者か漏しけん。光氏早く是を知り。彼紫をば取隱し。僞物を渡せし故。連歸ては胡盧ひと。嵯峨へ直に引立ゆき思ふ樣に嘲弄し。門の裡へ突入て。罷り歸つて候と。云ひ欺かんと存せしが。石堂どのと入替て。置せられたる御明智。在下如きが怜悧げに。御迎へに來たらんより。佞人輩を差越て。辛き目に出逢さば。お心もはれ石堂殿も。よき慰みに候べきを。却て赤面仕つると。



恐れ入てぞ蹲踞る。光氏ほく〳〵打點頭。「何かは知ねど紫と。思ひて予へ渡せしは。過分〳〵と振返り。早百合來れと呼出し。「其大小を彼へ渡し。はや紫を引取たれば。御身も爰に用はなし。元の如くに糺へ歸り。稻舟に仕ふべし。綾柳が病氣にて。人少にあるべしと聞て驚く調太夫。「なに綾柳は病氣にとや。と云顏光氏瞠乎と見遣。「イヤ彼が病氣と言しは詐僞。其一言を聞ん爲。早々歸れと言捨て。一間處へ入て見れば。紫は夜の具に。打纒はれて臥て居たり。相手なくては淋しからんと。幼少童の愛らしきを。撰ておこし給ふべしと。室町へ言やりつ。雀を逃して紫に。叱られたる犬吉をも。連來たれよと惟吉を。三筋町へ迎ひに走せ。光氏は立寄て。(日は高う差登りぬ。いざ起ずやとゆり覺せば。漸々に起出る。かの紫の姿を見るに。小玉が服の中なれば。華麗ならぬ染小袖の。打なへたるを引かけつ。何心なく打笑める。其顏の美しさに。光氏も打笑れ。「イザ是よりは我常に。住る座敷に移るべし。ト先に立て行給へば。紫は其後に付。東の方へ至り見るに。霜枯の前栽も。繪ける樣にて面白く。見も知ぬ下髮に。つぼをり姿こき雜て。間なく女の往通ふ樣をかしき處に來つるよと。心の裡に思ひ乍ら。珍敷き屏風の繪抔。見つゝ慰め居たりけり。

兎角なす間に其處此處より。相手の子供も集りければ。珍しき手遊の。樣々なるを取寄させ。馴なつけんと思ふから。其身も共に遊びゐて。室町へも赴かず。繪習ふ手本になるべき繪杯。をかしげにかき集め。(武蔵野に咲ば所縁が草藤も)と色美しき紫の。紙に小く書なして。紫に見せ給ひ。「御身も爰へ書てよ」と。勸められて差俯き。「まだ能は書ず迚。見上たるが美しければ。光氏も打微笑み。能書ぬ迚書ざるは。却て人も憎むなり。いで教んと宣へば。最耻かしげに筆取上。何やらん書倣て。書損ひつと振袖の。袂に隱す手を差入れ無理に取りて見給ふに。(所縁とは何の所縁ぞ菫草)筆の運びは幼けれど。柔かに書倣たるは。行末のたのも敷。小玉の手跡に能似たり。若き人の手を習はば。今樣に移るべしと。打詠めつゝおはし鳧。斯て日數を經程に。紫は住馴て。犬吉始め室町より。來りし童子兒輩と。思ふ事なく遊びつゝ。京極に在つる時。光氏君とて傅きし。人形を取寄て雛と共に飾り抔倣ければ。言の葉も此體を見て。漸安堵の思ひをしつ。紫は光氏を。親の如くに思倣し。實の父の國助は。此頃折々逢たるのみにて。傍らにて生育ねば。戀慕ふ樣もなく。只光氏は館におはせず。淋敷夕暮抔には。小玉の事を思ひ出。打泣事も有けるが。夫も光



氏歸來れば。喜ばしげに出迎へ。いと親しく打語合ひ。共に遊び共に臥して。更に耻らふ氣色もなし。實の子にてあらんには。斯成長して父親と。共に添臥す者にも非ず。されば子に似て子に非ず。眞の枕を交さねば。妾に似て妾に非ず。是はいと樣代りたる。傅き草なりと。光氏は思ひけり。

(末摘花。紅葉の賀を。雜へて作りし若紫の。卷は全く爰に終る)

此頃藤の方は。又音川の下館に移り住せ給ひければ。光氏は密に逢ひ。打語合ふべき事もあり。又其容も懷敷て。隙もやあると彼邊りを。窺ひ歩き給ひつゝ。熟々と思す樣。杉生は何とやらん。予を疑ふ體なる故。腰元司を馴付おき。折節狀をば進らせしが。忍び逢べき手段には。年まだ若くて頼み難し。如何にかせんと或夕暮。何となく案内を乞せ。彼處へ至り給ひけるに。杉生司名も知ぬ。女輩數多いで。三つ指ついて對面し。公だちて待遇ければ。是は餘所〳〵敷擧動やと。安からずは思ひ乍ら。打沈めて藤の方の。樣子抔を問程に。音川勝元御前に出で。「今日晝頃より此邸へ。罷越て候が。只今御所より急のお召然乍ら若君の。來らせ給ふと承まはり。其儘出仕も憚りあれば。お目見得致し候。ト慇懃

に述ければ。「ヲ、打絶て逢ざりし。物語るべき事多けれども。お召とあらば取急がん。其内嵯峨の館へ來よと。仰せに猶も頭を下。「然らば君は此處に。寛々と御休息。藤の方へお暇乞ひ。申し上て參らんと。奥の方へ立行くを。羨ましげに打まもり。往昔は實の母の如く。人傳ならでも物言交し。常にお側に居たりしが。求めて人の疑ひうけ。疎く過行き果敢なさよと。思ひ亂るゝ光氏の。顔を杉生差覗き。「尼苅萱が若君の。御身代りに討れしも此お邸より戻りがけ。然云ふ事も有まいが。只用心に若はなし。日も暮たればお館へ。早々お歸り遊ばしませ。賤妾事は千景樣へ。お使に上ります。御機嫌ようと座を退き。徐々と出行けば。光氏もつぎほなく。「屢次もまゐらんが。然迄の事の無時は。自からに怠りつ我身に應ずる御用もあらば。仰せ越され候へと。克傳へてトすげなくも。立出んと做ければ。「若君樣〳〵。ト呼つゝ出るを何者ぞと。振返りて見給へば。思ひ懸なき綾柳なり。何の故に此邸へと。問れて下坐へ引下り。「稲舟樣の御使ひ。御返事を頂いて。只今糺へ歸る處僥倖君へ少しも早く。差上くれよと。某人より。言づかりたる此一通。御覽なされて下さりませ。ト差出すを取上て。口の中にて讀終り。「皆の者は送りに及ばぬ。奥へ戻れト腰元



を。退かせて小聲になり。『此頃山名三郎統清。稲舟姫へ狀を送り。手に入んと計るなり。是も一つの手段なれば。御油斷ある可らず候。』ト姓名は記さねど。此密書こそ其方の父。調太夫が送りしならめ。統清兼て稲舟に。心を懸る其事は。此如月に忍び行。予とつくと見極めたり。屢狀を送りなば。御身其返事をかき。彼を糺へ誑引寄せ。云々して慰ん。ト耳に口よせ打密語。立歸らんとし給へば。綾柳は又引留め。「君には何のしるしも無。爰を過行給ふか。ト云れて光氏立留り。「何のしるしも無てとは。「否へお隱し遊ばすな。爰へおいで被成たは。腰元輩を欺りて。確に藤の御方に。逢たい君の思食し。其しるしもなく悄々と。過行給ふがお最惜さ。今宵お逢せ申しませう。先刻奥に居た時。君の來たらせ給ひしを。女中方が差覗き。見る度毎に若君は。猶艶麗に成給ふと。立騒ぐを聞食し。屏風の隙より微見給ふ。藤の方の御顔容。懷しと思す御氣色にて。互ひに盡ぬ御思ひ。若事が破れたら。申し譯には私しが。自害して死まする。君故捨ん覺悟の命。君の惠みに助けられ。又君故に捨るは本望。あれなるお庭の小座敷の。裏手の方へ斯々と。密々と敎へつつ。奥の方へ入ければ。光氏は心得て。歸る樣に佯しつ。庭の切戸を打廻り。彼處に隱れ

て息をのみ。今や〳〵と待程に。暫くあつて足音を。忍びつゝ來者あり。と見れば二人の女。先へ立しが燈籠に。何やらん打覆ひ。手に引提し斗りにて。爰には外に灯火もなく。朧げ乍ら熟々見るに。衣の色合帶の紋。綾柳に疑ひなし。手を引誘ひ來たりたる。女に何か打囁き。物をも言ず光氏が。側へ頓て押直せば。留奇南の香はつと散。闇にも輝く縫小袖。夫と悟つて。「母上か。御懷しやト宣へば。此方は深く忍ぶと覺しく。有か無かの細聲にて。「紫を呼迎へ。憮恤給ふは嬉しけれど。噂に聞ば二葉の上。此事を洩聞かれ。此頃嵯峨の舘へは。女を迎へ給ふ迚。腰元婢の女子迄。言罵りて騷ぐとやら。ト後は宣ふ詞も聞えず。光氏は吐息をつき。「されば其事にて候なり。未だ年のゆかざる事も。貴孃の姪といふ事も。知ねば予があた〳〵敷。心を怨むも道理乍ら。其怨みを打出し。言出しなば斯々と。予もうら無く謂合ひて。言慰めんと思へども。只陽のみ清潔にて。心の底に濁りある二葉が性にもてあぐみ。思はぬ方に遊び歩き。斯る恨みも受るなり。然は云へ父の許せし妻。何迚疎み思はんや。我眞實ある心の裡を。二葉も悟り知ならば。遂には思ひ直さんと夫を頼みに過行ぬ。偖母上にも恨みあり。先つ年室町の。人丸堂にて御目に懸り。予を眞



の子の如く。可愛と思食されなば。お命を賜はれと。申し上しを聞すまれ。忍ひ逢瀬を宗全に。見咎められて諸共に。自害せんと做たるを。人〴〵に留められ。思はず命は長生たれど。眞の契りは無にもせよ。早二人り共穢れし體。夫に何ぞや此度の。御懷胎より世の人の。彌疑ひ私語を。いと憂事と思食し。心解ざる御氣色。なせ有しより親しくなし。浮名を立ては給はらぬ。其事を如何といふに。宗全彌討て出ん。其時に兄を差置き。怜悧げに在下が。切平げんも本意に非ず。とあつて他に眺めては。弓矢とる身の甲斐もなし。故に彼を誅伐せん。手段は音川勝元へ。悉く吩咐け置。予は播磨の國へ赴き。宗全に一味せん。奴輩をくひ留ん。とは思へども常々に。申す如きの父の愛子。もし失策も有んか迚。軍にも出し給はず。他國へ下るは猶更もつて。許し給はぬ其時は。身の恥のみか家の恥。彼お命を捨給へと。願ひ置しは此時節。些か二人りの浮名を包まず。此方より言觸し。母と。齊しき其人と密通なして懷姙せしと。父上聞食されなば。何程に此光氏を。不便と思食されても。豈夫家には置れまじ。其時には都を退き。心の儘に計策を。施すべく思ふなり。一たん予に下された。命を惜み給ふか。ト席を打て恥むれば。發と斗りに差詰り。回

答なければ光氏は。猶促迫て膝を進め。「御承引なき其時は。切腹なすより外はなし。如何に〳〵と捕へる手を。振拂つて迯のけば。後面の方にてつく〳〵と。笑ひ乍らに燈籠へ。打懸し衣取のけて。差出す火光に能見れば。藤の方と思ひたる。裲襠姿は綾柳にて。夫を誘ひ來たりしは。思ひ懸なき杉生なり。光氏は呆れ果。詞もなくて打まもる。側へ杉生差寄て。「戯れも事によれど。お腹の立かは知ねども。此事は妾が計らひ。綾柳殿に罪はなし後でお叱り遊ばすな。先刻貴方が此邸へ。來駕なされた其時に。定めて又四月の樣に。忍びてお逢なされ度。お心と見た故に。早くお歸り遊ばす樣。御意見を申し上。千景の方へお使に。表迄は出たれど。貴公の事が心もとなく。裏御門から取て返し。御前に出た其時に。藤の方の被仰るは。糺からお使に。過刻來たあの綾柳。其方は何日ぞや逢たとやら。妾と今日が始めてなれど。最親しげに物語り。私し事は光氏樣の。御不便にあづかる者。何事に依ませず。密な御用も有ならば。お心を置せられず。仰せられて下さりませと。信切に言た故。先つ頃紫とて。未だ年齡のたらはぬ娘。嵯峨へ迎へ給ひしと。人の噂に聞たるが若し知てかと問たれば。其夜の事は見たやふに。綾柳が委い談。聞ても何やら落着かず。



ちと譯あつて其娘は。妾が親族の物なれば。後の樣子が聞たいと。言流して稲舟樣へ。お返事を書認め。今歸したとの御物語り。私しは手を清めに。立て參つた其後へ。綾柳殿が立返られ。藤の方のお側へより。光氏樣をそこ〳〵の。處へ忍ばせ置ました。憚り乍ら私しが。此小袖を上にめし。貴孃とは見えぬ樣に。隱れておいで遊ばせと。帶を解いて着せまする。樣子を蔭で熟くと見。づつと出て押止め。否々夫はなりますまい。卯月にお逢なされてから。彌よからぬ噂はつのる。綾柳殿は若君に。一方ならぬお惠みを。受られた故御恩送り。夫は聞えて居るけれど。外に忠義の仕樣もあらう。假令然でないにもせよ。浮名の立たお二人りを。媒妁する事はない。悋氣しても宜い筈。と戯言雜りに私しが。綾柳殿の小袖を着て。お方の御服を此樣に。綾柳へ着せまして。偖御前に打對ひ。薄闇黒にて光氏君へ。貴孃樣の樣に見せ。聲をも夫と知れぬ爲め。打微めて閑雅に。紫さまの御事を。綾柳に問せなば。若君へお直にあひ。お聞なさるも同じ事。さすれば人も疑はじと。申し上たら打笑み給ひ。夫ならば斯々云へと。お口うつしを綾柳殿。能覺えては來られたなれど。思ひ懸なく宗全の。事より起りて綾柳殿の。知らぬ事を問懸られ。何いふて宜やらと

逡巡されたが笑しさに。つい笑出しました。何日ぞや糺の館で。綾柳殿を稲舟様と。私しに思はせて。お欺しなされた其代り。下俗の諺に。二度ある事は三度とやら。斯いふ事が又一度は。何處ぞでは御坐りませう。僥倖藤の御方も。後から忍んで光氏様の。仰やる事を聞う迚。彼處においで遊ばします。サア〳〵お逢遊ばせ。ト頓て誘ひ進らせて。光氏の身近くなほし。「今綾柳に仰せの趣き。名を流すのもお家の爲と。承まはれば理に迫り。最御異見も致しませぬ。お床をとつて上ませう。只富徽様始めとし。其付從の者輩に。讒らせ申すが口惜い。ト落る涙の顔背け。部屋へ下つて。明朝はお謁見えを致しませう。綾柳殿はお返事を。「ハイ何やかやで遲なはり、姫君様もお待兼。サア御一所にト暇を乞。二人りは其坐を退きたり。藤の方は憂身の上。思ひ續けて稍暫し。差俯いておはせしが。漸くに涙を留め。「紅葉の御賀の其時は。危い事で有たれど。僥倖にお怪我も無う。紫は健全でト取混て問給へば。少し前に進み出て。「紫を引取し。其事は内々の。者にも暫し知さじと。西の方に離れたる。茶屋を坐敷に整理はせ。人を撰みて附置ば。惟吉の其外は。何人を迎へしかと。皆訝しく思ふなり。予も明暮彼處へ行き。今迄他に住せたる。娘を呼たる心



にて。萬の事を習ひ教へ。好物思の忘れ草。いと壯健には候へど。只過行し祖母小玉の。事を左に右忘れ兼。打泣なんど做事あり。夫も在下館にある。其内は紛るれど。山名の謀計を挫かんと。其事に暇なく。暮れば出る其事は。跡を慕ひて涙ぐむ。夫を見るのも胸塞り。母の無子を持たる思ひ。忍び歩きも靜なる。心は更に侍らず。ト彼紫を愛する體。詞の中に現れければ。幼き者を斯迄もと。怪しき物から嬉しさの。笑を含んで藤の方君のお側に見習はゝ。嘸紫は心たて。立舉動も柔方に。生育ゆかん喜ばしさ。小玉の法事も懇切に。せさせ玉ふと傳へ聞。夫には心殘りもなし。只悲しきは綾柳に。今宣ひし此身の上。さはさり乍ら杉生も。今言如く女の道を。捨るもお家の爲なるを。深く恥しは妾が過失。身の淫奔になりぬべき。夫も定まる因縁づく。人も語れ浮名もたて。早是からは厭ひはせじ。ト涙落せば光氏も。見上る目元打うるみ。假にも親子と言交はせし。夫も果敢なき契りやと。思ひ亂れて亂れ鳥。曉近く立別れ。かたみ嘆は盡せぬなるべし。

修紫田舍源氏第九編終

# 偐紫田舍源氏第十編序

熱湯好湯番にいへらく。湯は熱くして置くこそよけれ。うめれば何時でも溫くなる。溫湯好湯番にいへらく。湯は溫くしく置くこそよけれ。沸せば何時でも熱くなる。是に似たりしことのあり。始めて此の田舍源氏を。作りいでんとなしたる刻。老たる友人予に曰。いかにも源氏の條をくづさず。なるべき程は詞をも。其儘用ひて書き給へ。源氏を讀ざる童子の。些しは助となる事ならん。若き友人予に曰。源氏の條を飜案して。歌舞伎狂言淨瑠璃の。趣きに綴り給へ。源氏を讀まざる者やはある。予思ふに源氏の如く書と教へし老人は熱湯好なり。狂言歌舞伎の樣に綴れと。すゝめし人は溫湯好なり。是にまごひて初編の草稿。幾度か書なほし。先づ若き人の意見につき。泥藏の物語。人丸堂の無言場。溫く仕込で置たれど。標題の源氏がさめて。水にならうと卷々の。詞をそろ〳〵折くべて。去年今年と沸しかけ。既に十編に及びしが。此の湯の加減未分らず。赤本にはうつらぬ詞が。多くて熱くて讀み憂く覺ほさば。仙鶴堂を叩き給へ。次の編より狂言の。水をうめて溫く

せん。板元は湯屋の亭主。作者は湯番に異ならず。どうでもかうでも這入人が。多ければよいまでにして。一家の作と見識ぶつても。戸棚ががらりと空てゐては。眠氣がさして居たゝまれず。十能で運ぶ消炭に。當りつづけにしたいが願ひ。されば御客様方の。御意にかなふやうにと。井戸ならねども彫をあらため。竹の洗で板の間の。摺仕立を奇麗にして新米糠の袋入。随分出精つかまつり。明年休の札を掛ず。紙拂底に付値あげといふ場を。こたえた代りに。現金湯は。御承知のうへ御買入可被下候。

天保癸巳初春　　柳亭種彦敬白



# 偐紫田舎源氏第十編

柳亭種彦著

其年も既に暮て。日の朝とぞなりにける。未だ曉の頃よりも。光氏は起出つ。梳り湯をひきて。装束華麗に改め。元旦の祝ぎに。先室町へ赴かんと。立出乍ら紫を。住せ置たる西の對を。差覗いて見給ふに。紫が祖母小玉の服も。母方故に三月を限り。早くも昨日晦日に。其事の果たれば。紅山吹己が名の。所縁の色の紫なんど。色々の衣打重ね。姿をかしう引装ひ。三尺の御厨子一揃に。何時か雛を押並べ。又。些く座敷書院のかゝりを。造り集めし雛の舍と。云ふ物を飾り立て。犬吉小辨其外の。童子を相手に處狭く。遊び弘げて居たりけり。光氏は打笑て。「一ッ年をとりたれば。今日よりは大人敷。なりたるならんト愛敬づき。云へども答へず涙ぐみ。「犬吉が鬼は外。福は内の眞似をして。是程大事にして置だ。雛の家を毀しをつた。今繕ふて居る處。アレ犬張子が瞠乎と。私しの顔を見る様な

犬吉の犬の字と。思へば是も憎らしい。ト答なき者へやつ當り。取て投れば蓋と實と。破る中より溢れ出る。狀を光氏手に取上げ。光氏君御内覽。「某しとは心得難し。そも此密書をこめたる犬箱。何れよりか送りし。ト言の葉に問給へば。すり寄て手をつかへ。「雛の座敷は綾柳の。父が造らせ候とて。其犬張子諸共に。何日ぞや糺のお館より。紫樣のお手遊びと。綾柳が進らせたれど。中に手紙の有事は。今迄心付ざりし。ト答ふる中に。光氏は件の密書を徐やかに。讀終りて打點頭。懷中へ確と收め。紫の脊を搔撫て。「心なしの犬吉が。惡い事しをつたの。今に近習へ吩咐て。元の通りに繕はせん。今日は目出度日にてあり。泣者ではない機嫌直しや。ト言捨て表へ立出給へば。待設けたる數多の供人。前後左右を打圍み。行列美々敷行給ふを。人々諸共紫も。はし迄出て見送しが。元の處へ立歸り光氏君と名づけたる。彼人形を取下し。雛道具の乘物へ。乘て相手の童子を呼び。「犬吉はお挾箱。お長柄傘は小弁が持や。サア室町へ光氏樣の。おいで遊ばす處ぢや。ト立騒げば言の葉は。興さめ顔に押留め。「若君の仰せの通り。一つお年もめしたれば。大人びさせ玉へ。十に餘れば雛遊びは。せざる者とか世にも云ふ。貴孃は夫の早ある御身。行義正しく



遊ばす筈。夫にマア其樣に。遊びに計り打掛り。お髮を上る中さへも。泰然なされず身動き計り。ちとお嗜み遊ばせ。ト耻かしめられ紫は。袖の振を顔にあて。只戯れと思ひしがさては眞に光氏君は。我夫にて有けるか。常々出入女子ども。我男とて傅くは。多くは見にくき顔貌。我は若くて美しき。夫を持てりと心の裡に。始めて思ひ知たるは。幼き樣でも一つゞつ。年の數添しるしなめり。頓て雛は差置て。褥に戻れば言の葉は。眉刷紅筆取出し。涙に洗ひし紫の。顔を再び粧ひつ。熟々と打まもり。をかしき世をも見つるかな。元國司の御胤乍ら。一旦苦界に陷りて。末には多くの客を迎へ。肌を穢さん身なりしを。上なき人に思はれて。榮華に過させ給へるは。小玉のぬしが明暮に。御身の上を苦にし給ひ。絕ず念佛經だらに。信神されし御佛の。しるしを現はす者なるか。然はさり乍ら赤松の。二葉の上を始めとし。其處や彼處のお忍び歩き。頓て大人び給ひなば。夫や彼やに六か敷。事の起りてお心の。揉る種とや成もせん。然れど幼き此程を。わりなく思ひ給へるは。最賴もしげなりしかと。心の裡に言の葉も。樣々案じ居たりけり。」光氏は室町の。御所より直に赤松の。館へ退出給ひけり。二葉の上は例の如く。表向のみ麗しく。心の底は

美しき。氣色もなきが苦しければ。人なき間に光氏は。二葉の上の袖を捕へ。年も既に改まれり。御身も心を改めて。今年は打解玉ひなば。如何に嬉しからん抔。樣々聞え玉へども。嵯峨の館へ女を迎へ。傅き玉ふと聞しより。我をば捨て本妻に。夫を仕玉ふなるべしと心置れて有しより。疎々しげの有樣を。光氏夫とは猜し乍ら。知ぬ樣に伴して。浮世語りに打紛らし。戯れ言など宣へば。有繫に心强からず。只よき程に回答抔。し玉ふ樣は尋常の人には。遙に立優り。光氏よりも四つ計り。年上なれば殘りなく。開きし花の盛りにて何に足はぬ事のなき。姿を熟々打まもり。世の亂れんと做を防ぐ。計策なりと知ざれば。餘りに予がけしからぬ。すき心と思ふより。斯恨むるも道理ぞと。心の底に思ひ知り。種々に言慰め。其夜は爰に宿りけり。」赤松左衛門政則も。娘二葉と光氏の。其交情の睦じからず。頼もしげなき御心を。强顔と常には思ひ乍ら。打對ひて光氏の。顏容を見る時は。忽地に恨みも忘れ。心を盡して傅きけるが。明れば二日の朝未明に。光氏は起出て。伏籠にかけし小袖を取寄せ。着替んとなす時に。政則は物蔭より。此體を差覗き。西陣の名高き織屋が。手を盡したる綾の袴を。手づからに持て來り。光氏の衣紋を直し。小袖の後方



引繕ひ。たふやかに着せ進らせ。只履物をとらぬ計りに。信やかに仕ふるも。主を敬ふのみならず。子にひかさるゝ親の心は。最哀れなる者なり鳧。光氏は彼袴を見やり。「是は美しき綾にてあり。去頃紅葉の賀莚の折。斯る袴を調せんと尋ねたれども遂に得ず。此後も又左樣の催しあらん時に用ひん。ト打置玉へば政則笑ひて。「然る折には此綾より。遙に勝る物もあるべし。是は只目馴ぬ樣の。模樣なればと言つゝも。强て穿せ進らすれば。光氏は我姿を見返り。兄義尙も此如くの袴の。模樣を好まれたれば。一ト領進らせたし。何れに求められたるか。ト問せ玉へば謹んで。「是は有難き御意にてあり。義尙君にも此如く。調じて近きに奉つらん」又其綾の模樣を寫せし。扇も作らせ置たり。ト政則頓て取出し。光氏の腰にさゝせ。出行玉ふ後影を。熟々と打詠め。偶さかにもあれ斯計り。優に艶しき若君を。いはゞ婿ぞと我館へ。出入させて見奉つるは。人と生れし甲斐こそあれと。心の裡に思ひけり。」嵯峨の館の藤なみの。所縁の色の紫を。迎へ取玉ひてより。其愛らしさに光氏は。心曳れて六條の。阿古木をだにも久しく問ず。況て糺の荒館は。思ひ捨ると言には非ねど。只其儘にすぎ行しが。正月七日の夕さり方。糺よりの御使が。是持て參り候と

惟吉が文箱の紐を。解ほどきて差出せば。光氏取て打開くに。是綾柳が狀にてあり。「此頃は猶繁々に。三郎統淸狀を通はせ。姬君に言寄る樣の。心得ぬ事もあれば。今宵忍びておはせよかしと。妾より僞りて返事をしたり抔細々と書誌し。去年より絕て音づれの。無き恨みをも返す〴〵。取り混て聞えければ。光氏半讀さして。打笑ひつゝ膝をうち。「敎へし如くに綾柳が。統淸を釣寄るとな。彼より先に予も行き。事のやうを窺はん。返事に及ばず使は歸せと。直に供の準備を調へ。糺へこそは赴きける。道の程にて日は暮ぬ。空の景色物凄く。雪掻たれて夥多降けり。例の如く表立て。案內も乞はず庭口より。徐ら內に入玉へど。夫とは誰も心付ず。打解たる女輩の。眠りこけたる枕許を。打またぎて唐紙の。間より差覗けど。稻舟は能も見えず。御簾屛風の竹も折。絲もほつれて損ねし物から。亂りかは敷押やらず。昔の儘に立繞らし。紅早百合四五人の。腰元輩がつい居たり。不圖此方を見返れば。彼昔より此館に。久しく仕へし女輩。煤けたる白無垢に。幅いとせばく穢げなる。帶の兩端押垂て吉彌風に結びたる。腰つきの頑なしく。流石に櫛を押立て。可咲さしたる額つき。田舍の祭に神子抔が。煉出したる姿に似たり。各々立て懸盤折敷。取出



して打向ひ。天目茶碗皿の類ひは。皆唐土の物なれど。ひゞ破缺て見處なく。數々のそへも置ず。飯打喰つゝ物語る。斯果敢なげなる有樣を。親しく見るは始めてなれば。興醒ながら光氏は。猶も窺ひ居るとは知らず。就中老たる女がいふ。「如何なる事か去年より。姬君樣の御前へ。でる事を留められ。遠く離れて宿直計り。用が無ので足腰が。猶怠惰うて堪へにくい。哀れに寒き年なる哉。なまなか命長ければ。斯る世にも逢なりと。潸々と打泣けば。其傍らより差出しは。今降雪を頭につみ。猶老屈りし女が答へて。「其事よ〳〵。義勝公の在せし時より。此御館に勤めたれど。室町御所とは事變り。常には人の出入もなく。淋しき事ぞと嘆きしが。斯ても過れば過る者を。嘆きし昔日の戀しさよと。飛立ぬべく身震ひするを。一人りの女が押止め。「光氏樣が姬君を。哀れみ玉ひて彼の樣に。若き女子を抱へられ。お側へ付て置るれば。お前や私しの身の勤めは。樂に成たを喜ばず。御前へ出るを止られたと。嘆くのは冥加ない。謹愼だが宜さそうなと。言のも聞ず老たる女。火鉢引寄せ吐息をつき。「羨ましいは水原殿。前度からして愛の勤め。私どもと同じ年頃。はや六十に近けれど。男の髮を結事が。上手な故に御所樣の。お髮を上に去年から。室町

へ上られて。今程はよい身の上。夫に引かへ浮々と。爰に居る程老人と。若き者には蔑られ。花も咲ざる枯木の枝。焚木となるこそ增ならめと。憂へあへるを聞給ふも。片腹いたしと立退て。今來る樣に光氏は。打咳きつ唐紙を。ほと〳〵と打叩けば。誰やと咎むる彼女の。聲を綾柳早くも聞つけ。夫と猜して灯を取直し。直に唐紙押開て。入奉つれば光氏は。今物語りしつる女を。近々と打見るに。鄙たる限りにて。白灰がちになりたる火桶を貧窶しげに打まとひ。風吹荒て灯火の。消にけるを點しもつけず。不斗黃昏が古寺にておそはれたりし事共を。思ひ出て見廻らすに。荒たる樣は劣らねど。彼處よりは坐敷も狹く。此家には人けの有に。少し心は慰め乍ら。何とやらん物凄く。氣色も長閑ならざるを綾柳は心得て。屏風に圍ひし一間處に光氏を。伴ひて。「過刻狀にて聞え上し。山名統淸是非共に。今宵は忍びて來たるべし。爰に隱れて事の樣を。密に窺ひ給へかしと。言程もなく紅が。慌忙しく走來つ。「如何してか此館の。案内を知たりけん。庭の折戸を音づるゝを誰なるらんと立出れば。一人りの男が彳み居て。予は山名統淸なり。密に姫に逢せよと物馴顏に言寄るが。可咲けれども笑ひを隱し。姫君樣は物恥を。深く仕玉ふお性質。言葉



少に御寐なれと。暗きお寐間へ連て行き。押入て立退けば。有繫に男もつぎほなく。踟躕として居る樣子。密に御覽遊ばせ。ト勸められても光氏は。點頭計り動きもせず。彼方よりは我方の●見えぬ樣に襖を閉立り。明の朝彼が歸りを。透見して慰まんと。頓て寐屋を設けさせ。枕はとれども始めにも。記すが如きの荒館。柱の曲み戶のひづみ。稍ともすれば風を吹入れ。降間に解る春の雪。軒端漏來る滴の音の。耳に付て眠られず。代もを治めん姫なるを。斯埋れて過行は。是非なき事にあんなれど。頻りに哀れを催して。人知ず袖を濡し。偶の逢瀨と綾柳が。蕭々と物語るも。只夫なりに聞流し。春とは云へど未だ永き夜すがら嘆き居たり鳧。」辛うじて夜も明ぬる。氣色なれば起出つ。手づから雨戶を押開て庭の雪を見渡すに。踏あけたる跡もなく。遙々と荒渡り。最淋しげなる有樣にて。夜は未だ全く明やらず。微暗けれど降積る。雪の光にいとゞ猶。淸らに見ゆる光氏が。姿を障子の隙間より。彼古くより仕へたる。老人輩は差覗き。身の憂事も忘れ果。打笑つゝ詠め居たり。此時に綾柳は。御手水の湯をもて參り。今統淸がお寐間より。アレ〳〵あれへト敎ゆれば。光氏も身を起し。此方の一と間を窺ふに。統淸は斯共知らず。今は本意を遂たり

と。喜ば敷有樣にて。縁の端迄立出つ。「あら面白の雪景色。此儘歸るも心なし。姫も諸共爰へ來て。をかしき空をも見給へや。一夜にもせよ添臥たる。中に心の隔はあらじ。ト暗にて逢たる手探の。心得難き事あれば。見顯はさんとや思ひけん。恨み顔に言ければ。閨の屏風を紅が。押疊んで「姫君樣早々あれへ出させ給へ。女は心美しく。人の敎へ聞ゆる事は。辭み給はぬ者とやら。耻かしと思食すも。折にこそよれ山名の殿が。待ておゐで遊ばす。ト勸められて稻舟は。小袖の衣紋引裝ひ。膝行出れば統淸は。外の方を打詠むる風情に佯し唯ならぬ。尻目づかひに能見れば。先居丈高うして。背の長き事譬難し。手探りの怪しかりしが。然ればよと胸塞り。ふと目の留るに是に次で。不具と見ゆるは鼻なり鳧。普賢菩薩の乘給ふ。大白象の鼻の色は。赤き蓮華の如く也と。佛經に見えたるも斯やと思ふ計りにて。淺間敷迄高やかにて。先の方少したれ。色付たるは笑破し。柘榴の實に能似たり。面の色は降積る。雪恥かしき樣乍ら。餘りに白くて靑みを含み。額大きく腫れたるに。夫にも勝りて下は膨み。恐ろしき迄面長なり。姿貌は痩さらばひ。小袖の上より肩の骨は。痛々しげに顯れて。最ほしげなる風情なれば。統淸は呆れに呆れ。何の爲にか



殘りなく。見顯しけん口惜さよ。通宵のさゝめ事も。今となりては胸惡き。心地は仕乍ら珍しき。有樣なるに猶熟々。髮のかゝりを打見れば。世に愛らるゝ女にも。劣るま敷綠なるを。房やかに結上たり。着給へる衣をさへ。言立るに物云ひの。さがなき樣に聞ゆれども。總て昔の物語に。先人の裝束を。記し留むる慣ひなれば。其樣を疎々云はんに。紅の綾にやあらん。緋の色さめて黃ばみたるが。猶年經て白みたるに。打重ねしは紫の。是も幾年經しやらん。黑き色とも紛へるを。亂雜なげに補襠りたり。又其上に虎の皮の。胴着と云へる物を着做つ。實に此皮は淸かにて。かうば敷迄美しければ。太刀のしり鞘敷革には。作りて人の愛玩せざ。まだ若やかなる姫君の。裝ひには最似氣なし。然れども此皮無りせば。寒げに見ゆる顏ばせを。心苦敷見るからに。統淸左右の言葉もなく。暫しが程は茫然と。彳で居たりしが。今更捨ても置難く。傍らに押直り。物言懸て心見れば。只いたう恥らひて。袖をもて口元を。覆ひ隱すも古めか敷。彼浮世又平が。畫たる屏風の女畫に魂入て。立出なば斯もあらんと思ひ合せ。重ねて通はん心も失はて。口に任せて戲事を。種々に言懸れば。流石に打笑給へる氣色。いと仂なく姫君と。人の敬ひ册ける。人品には

似合しからず。室町殿にて捨置るゝも。道理なりと統清は。心の裡に興を醒し。急ぎて其處を立出けるが。宵に駕を舁入させし。門はまだ開ざりければ。鍵預りの者やあると。統清が家來輩。そこらを尋ね廻りければ。雪を重げに積なして。今や倒れんとする。小家より。老耄ひて海老の如く。腰屈りたる一人の男。顔も肌も煤けたるが。寒しと思へる氣色深く。箱めきて怪しき物に。火を微に入たるを。袖ぐゝみに持アラ冷たやと足をつまだて澁々に出來たり「門の番は予にて候。いで開て進らせん。と言つゝ鍵は取出せど。手は屈り目は疎く。錠の開ぬに氣を焦ち。「娘が家に在ける中は。箇樣の時は力とも。助け共なりたるが。去年より姫君の。お側使ひに召呼れ。世にいふ有難迷惑とは。斯る事にやあらん杯。一人り言に打私語。果し無有樣なるを。山名の供人もどかしがり。立寄て門引開。舁出す乘物の簾を上て統清も。何心なく門番の。翁の顔を打見るに。其鼻いと赤かりければ。寒しと見えつる稻舟の。面影をふと思ひ出し。打微笑つゝ歸りけり。

○紅此方へ走り來たり。「今統清が姫君の。御顔容を始めて見やり。常も圓くて大きな目を猶見張たる其可咲さ。漸堪へて居ました。ト袖を口に押當て。笑ひ轉びつ光氏に。樣子を



語ればつと坐を立ち。「予も襖の蔭よりして。始終の事共よく聞けり。先稻舟に對面せん。ト襖押開け彼處に入。「統清との新枕。如何なる事を語りしか。聞かせ給へト寄添へど。姫は顔を打赧めつ左右の返事もなき處へ。屏風の蔭より杉生は。早百合を誘ひ徐に立出て。

「二度ある事は三度目に。又若君のお胸の裡。承はりに參りました。御物思ひのお紛れに綾柳を愛に据置。通ひ給ふは聞え乍ら。其綾柳に姫君の。御返事を認めさせ。山名三郎統清を。此お館へ招きよせ。貴公さへ大切に。思食して御添臥を遊ばさぬ。稻舟樣に。逢せ給ふと云事を。是なる早百合が常の通り。知せを聞て宵より是へ。上りまして何かの樣子は。承まはつて居ました。御用意深い貴公の事。よもや眞の姫君では。彼者は御坐りますまい。何卒眞の稻舟樣の。御在家を承はり。「ヲヽ安堵したいと言ふのであらふ。綾柳早百合其外の。腰元輩も必ず共。此事人に漏すな。ト口堅めしつ紅が。手を取て上座へ直し。早くも世を去給ひたる。義勝公の御嫡女。稻舟姫にお目見え致せ。ト聞て杉生始めとし。在合人々うち驚き。「左樣なら只今迄。紅殿と朋輩の。懇接にした貴娘が眞の。「ウヽ其譯を語つて聞せん。杉生には先つ頃も。心腹を告つる如く。男子ならば世を取べき。血筋にて

有乍ら。此處に埋れて。賴もしき人も無。有樣を見るに堪かね。人目を包み吾儕は。疎からず問寄しが。宗全が事よりして。思ひ捨ては止難き。事のみ彌出來れり。其仔細は彼統清。常に窺ひ來る有樣。是あながちに稻舟に。心を懸る計りに非ず。隙を窺ひ奪ひ隱し。此姫を護立る。樣に佯し謀反を企て。主に刃向ふ無道者と。世に譏る人口を。且は阻ぎ且は。又人質とする計策と。思ひ計りて古くより。爰に仕へて姫の面體。見知たる女輩は。悉く前を遠ざけ。側仕への女輩を。新に爰へ進らせよと。杉生に吩附つ。早稻舟の年の程は。立待居待も過たれども。猶若やかに見ゆるを僥倖。まだ幼げなる腰元の。姿にやつさせ夫ぞとは。内外の者に包み置。さて姫の代りには。誰をかせんと案ぜしが。尋常の女には。統清が盜み出し。其後詮義もむづかしと。思案を廻らしあの如く。不具に近き女を見出し。傅かせて置たるが。思ふに違はず繁々に。統清狀を送りしかば。引入て逢せしに人々も見し如く。興醒顏に歸りし樣子。思ひ絕んは必定なり。假令ば戀慕の事は差置。かの人質の爲山名の館へ。盜み行ともあの女は。顏の可咲のみならず。心も愚鈍の性質。何を問ても生度なく。持てあぐみて返すならん。返す〴〵も此事は。深く隱して玆に列なる



其餘の者には沙汰するな。ト說諭し給ひければ。杉生莞爾と打笑ひ。紅殿を姫君とは。承はりしは始めてなれど。其樣な事で有うと。大方は推量し。お尋ね申して彌安堵。して又今迄姫君に。なつて居たあの女子は。「アリヤ統清が歸る時。鍵を持て開に出た、門番の親父の娘。併し年が若過れば。孫かも知ぬが何にせよ。去年迄あの小家に。一つに住でゐた女。鼻の先が赤いとて。誰言となく紅と。仇名に呼だを稻舟の。名にして是から姫君に。手前は成て居るのぢやと。言聞せたら喜んで。行儀つくつて居る可咲さ。併し心はずんど正直。己が素性を話した迚。手前達が蔑つて。彼を阿房にしてはならぬ。今迄よりも大切に。仕へて居るが家の爲。始めて彼を稻舟の。姿につくつた其時から。隨分顏は隱して居ろと。吩附ては置たれど。朝夕側に居る早百合。見ぬ事はあるまいが。去年の秋淸水で。姫の器量の何樣ぢやと。己が問た其時に。種瓢に目鼻とやら。取べき方なき御有樣と。明々地にも答へ難く。隱潛みておはすれば。其顏容は能も知ずと。言紛らして居る可咲さ。山名を計る其餘りが。思ひ懸なき人へかゝり。心苦敷ありつらんと。言つゝ光氏四方を見廻し。「益もなき長談話。前より仕へし、老人。に見付られては詮方なし。又々席を改めて。稻

舟殿は腰元紅。門番の紅は。元の如くに稲舟姫と。褥の上に押直せど。愚なる身の淺ましさ。然迄恥らふ氣色もなく。脇息引寄せ面杖つき。扇を手だまに打かへし。餘念もなげに遊び居たり。光氏は近くより。「爰の舘へ吾儕が。通うと人に知する爲。折々は汝よりも書を送りて音づれよ。足はぬ筆も又興あり。綾柳必ず敎ゆるな。ト宣へば綾柳が。被布を光氏に。引かけて進らせ乍ら。「何日ぞや早百合がもて參りし。姫君の御狀も。御代筆は致しませず。お一人りでお認め。「ヲヽ然もあらん强々しく。上下をきつと揃へ。男めきて書たるは。鍵預りの彼親父が。手本を姫は習ひつらん。若し統淸が又來たらば。直々と打解ず。猶ゆるしなき氣色に伴し。無情なと男に嘆たせ。氣をもたするが戀の秘事。心得たるか稲舟。ト左右聞え給ども。例の無言に物云はねば。可咲も哀れにも。打見やりつゝ光氏が。(さすや朝日軒の氷柱は解乍ら。ト打解ざりし心をこめ。口ずさみ給ひければ。只ム、と笑ふのみ。口重げなる風情なれば。其儘に捨置つ。紅の事懇切に。綾柳早百合に頼み置杉生にも暇を告。そこを立出給ひけるが。宵に駕を寄せさせし。庭口の門抔は。危き迄にいたう曲み。扉は朽て倒れたり。大方の有樣は。夜目にもしるく見ゆれども。猶隠れたる



事も多かり。今朝は雪も降止て。日は高う差昇。殘りなく見渡さるゝに。哀れに淋しう荒まさり。只松の雪のみ暖和に降積り。山里の心地して、葎の門とは箇樣なる。處をこそ言べけれ。去年よりふと心づき。己れが密に貢しも。姫を哀れと思したる。義勝君の魂魄の導き給ふ者ならんと。心の裡に思ひつゝ。橘の木の枝重げに。降り積雪に埋れたるを。早百合を召て拂はせ給へば。拂はぬ松も羨み顏に。己れと一人り起返り。梢よりさと溢るゝ雪も。名にたつ末の松山か。空より浪の越ぬ日ぞなき。と云へる。歌の心も思ひ合され。立返りて見給へば。戀ならねども我袖は。濡さじものと早百合は飛退き。打ふるひてぞ居たりける。光氏舘へ歸りて後。惟吉に宣ふ樣。去年より屢次稲舟を。音づれたれど何日とても。夜のみ通ひて明ぬ中。忍びて歸るは知る如し。今日は偶統淸を。遣過さんと思ふから。日の差出るも厭ひなく。憩ひて立出つ。東の雨戸を押開くに。向方なる長廊下は。家根もなく荒破たれば。日のあし程なく差入て。宵より積りし雪の光。定かに見ればなかなかに。哀れさまさりて覺ゆるなり。姫を始め人々の。衣も古びて見苦しゝ。ト假に姫と搨きおく。鍵預りの彼娘へは。彼虎の皮ならぬ。純子三本紅絹五疋。綿迄も取揃へ。宵に

寒さを打嘆きし。古くより仕へたる。女輩へは帯小袖。門を守る翁の爲迄。思ひやりつゝ上下の。程々を能分ち。孰れも〳〵悦ぶべき。物を數多送り遣はし。人に包みて稲舟の。後見なして養まんと。心を盡すを夫と知ぬ。二葉の上の傅き抔は。又例の若君の。打解所爲を仕給ふと。密々語合たりけり。」常の一ト間に光氏は。長閑に詠めて居る處へ。紫を住せ置たる。西の亭より言の葉參れり。彼は元來添臥を。したる中にはあらざれど。鞍馬山より物言馴れ。腰元の女よりも。心安き心地して。召仕ひなどし給ひつ。此頃は就中。男の髮を結覺え、夫らの事にて光氏の。呼ざる時も折々に。御前へ出しかば。此方にも心を置ず。彼方も左迄憚らず。近く寄て手をつかへ。可咲き事の侍るを。申し上ぬも如何なれど。又聞えんも恥かし。ト微笑て言やらねば。「夫は如何なる事にかあらん。三筋町に在し時。言かはしたる男より。是非に此方へ來たれよと。人に言傳け言寄たるや。予には包む事はあらじ。物言かけて詞をこめ。恥らうも年によれ。何れ仇めく事なるを。然あらぬ顔の憎さよ。ト言れて言の葉差俯き。「予身の事に侍らば。お輕蔑遊ばす迄も。申し上も致しませうが。是は夫には引かへて。ト倘打笑ひて「稲舟様より貴方様への御狀。ト懷中より取出



たり。「然迄是は取隱す。物にもあらぬを事有さうに。云たるは却て可咲。ト打開いて見玉ふに。陸奥にてや漉たりけん。紙の肌も美しからず。厚く肥て白からぬに。沈香丁子の類ならん。懷しからざる匂ひを焚しめ。彼強々しき艶なき手にて。漸に書果せたれば。發句も又夫に次で。(から衣つらくと君が砧かな)「アラ心得ざる發句なりと。打かたぶき玉ひければ言の葉は妹の小辨に。持せ來りし最重さ。帛包みを取出させ。御前に差置を。光氏頓て開き見るに。今は世に用ひざる。衣箱と言物なり。から衣とは此事ならんと。一人笑して居玉へば。言の葉は聲を密め。「紫様へ綾柳より。御手遊の類の物を。屢次に進らすれど私しは未だ綾柳に。一度も逢たる事はなし。其禮がてら稲舟様へ。お目見えも願ひ度。昨日糺の御殿へ。始めて上り侍りしが。輿の醒たる事と言は。先姫君の御前へ出。御有様を見上るに。扇を額に翳させ玉ひし。其外れより溢れ出し。髮のかゝりの美しさに。引變て御鼻の。色付たるは見るも不快く。夢かと思ひて御次へ。辷り出れば其お狀と。此箱を中に置。お腰元が取圍み。是を何して若君へ。上られる者かいな。と紅とか云ふ若き女子が顏を赤めて打笑へば「然ばさて光氏君の。御裝ひにと姫君が。態々とお取寄せ。此儘に捨

置ば。お心ざしも空からんと。綾柳が云ふてなれど。其お使ひには私しがと。言者もなく逡巡ばかり。早百合がふつと心づき。此頃迄は一つに住。親しい中の言の葉殿。爰に居るのは好序。歸り給ふ其時にと。言つけられて詮方なう。持て參りは參り乍ら。稻舟樣へは一方ならず。君の御不便かけ給ふと。世の噂とは大きな違ひ。三筋町の局にも。彼樣のはない御顏容。葛籠ならねど此箱も。見懸よりは重さ〳〵。化物が出ようも知ぬ。皆の者が讓合ひ。お使ひを否がつたは。何ぞ譯のある事と。夫故御目に懸ぬうち。可咲き事の侍ると。申したに違ひなく。お狀をお讀遊ばす。と何か莞爾〳〵お一人笑み。少しお見せ遊ばしませ。ト差覗けば光氏は。態と我身を嘆ち事。「一人轉寐の夜毎〳〵。濡たる袖をまき乾さん人もなき身を此の如く。訪るゝ事の嬉しさよ。此儘にして捨置ば。姬も悲しく思はんに。能ぞ言の葉持て來る。去乍ら繰返し。吟ずれば吟ずる程。吁淺ましの發句やな。呆れて物も云難し。くちなし色のはぢ紅葉と。物陰にて答へしは。綾柳が執成ならんが。此から衣は姬の手織。筆も字太に强々し。然は云へ己れが心には。是を砧に打柔らげ。心を盡して仕立しものを。眞にたまの言の葉とは。是をこそ云ふべけれ。去頃一度おこせし狀は。筆



尻を紅が。持添てや書せけん。是よりは宜かりし。ト微笑みて見給ひつ。彼箱を打開けば絹の光澤なう古めきて。二百年計り前に。世に流行たる結柴小紋の。就中細かなるを。黑紅に染なして。鹿の角と山蜂を。五寸許の大きさの。紋を着たる羽織なり。淺ましと傍に投やり。彼文を廣げ乍ら。手習ふ樣に其端へ書付るを。言の葉が。傍らより打見れば。『統淸に代りて。(袖に觸て思へばくやし紅の花)色濃はなど見しかども』と書汚し給ひけり。言の葉は其故を。能も知ねど彼鼻の。咎めならんと心に可笑しく。投やり給ひし羽織を取て熟々と打詠め。包の裡を開かねば。如何なる品か知ざれど。斯る物を若君の。御目に觸しは予迄も。心なしとや覺さんかと。最耻かしく人々の。參るに驚き取隱し。斯淺ましく古たる衣を。送り給ひし姬君の。御心根の不審さよと。打かすめつゝ小聲に云ひ。御前を立んと做ければ「予も事に打紛れ。昨日よりして紫の。許を一度も音づれず。いざ諸共に行かん迚。言の葉を引連つ。頓て西の亭へ赴き。紫の體を見るに。眉鮮明に額を造り。顏いと白く頰の邊り。少し紅の色を含むは。彼稻舟が鼻の赤く。匂はしきには引變て。未だかたおひの大人とは。見えねど艶に美しう。尙年立て鐵漿を。附なば然こそと思ひやる。口

元のいと愛らしく。留奇南は梅が香を散す。縫の櫻も嫋々に。振の袂へ枝垂て。柳の腰に著なし丶は。てしがなと云ふ三の願ひも。宛然揃ふ思ひしつ。心苦しき事共も。是にぞ少し忘れける。言の葉は小辨をよび。御鏡臺から櫛笥。亂箱等取寄せさせ。光氏の御背方へ立廻れば振返り。髪は昨日結たれば。今日は後れを掻上て。撫付て置べし。ト宣ふを心得て。御鬢ぐきの亂雜なきを。理ひ等する傍らに。紫は例の如く。雛遊びに餘念なく。畫などかきて色どるにぞ。予も共にと光氏も。すり寄て筆をとり。背丈は高く痩たる女の。姿畫をかき做て。鼻の處に紅をつけ。打置て見給ふに。畫にかきてさへ可咲しげなれば。一人り心に微笑まれ。己れが影の鏡臺に。うつれるに不斗目を留め。手づから鼻を赤く染。稲舟に比べなば。予も少しは好顔ならん。夫だにも斯鼻の先を。匂はしたるは見苦敷を。況て色は青白く。長き面廣き額。親しく見るより統清が。興を醒して歸りしも。道理なりと思ひつ丶。熟々と眺むれば。言の葉は彼姫君の。姿を畫き鼻を染め。御戯れに其眞似をせさせ給ふと心は附ぞ。打出しては言難く。可咲さ堪へ袖をもて。口を覆ひて物云はず。紫は其故を。知ねば背方に延上り。鏡にうつる光氏の。顔を倩差覗き。何の眞似をか仕



給ふ。ト聲打揚て笑ひければ。光氏は此方を見返り。「若吾儕が此様に。不具にならば如何ならん。ト問せ給ふに紫は。眉を顰めて吐息をつき。「夫こそ悲しく侍らめ。若し染付て脱ぬとわるい。其様な事を廢にして。ト危く思ふ氣色なれば。光氏態と紙をもて。落ぬ程に押拭ひ。「如何にも其方の云ふ通り。元の様には白くならぬ。益なき事を做てけり。室町の父君に。何と言譯なすべきと。眞しやかに云ければ。紫は憂しき。事と思ひて振袖へ。鬢水入の水をつけ。立寄て押拭へば。光氏は莞爾と笑み。「昔し平仲と言し者。泣眞似をして女に見せんと。硯水を付たるを。女が夫と心づき。密と墨をすりたるを。知ずに倘も目へ摺付け。顔を黒く染たるは。墨塗と云ふ狂言に。まなびて今も做事なり。其様に押拭ひ。倘々紅を散すまい。赤き物はあやかると。諺にも言なれば。我顔中を紅に。染なす時は平仲が。墨にも増して見苦し。ト戯れ玉ふを言の葉は。可咲き妹背の御交情と。思ひなしつつ立上り。「今日は空も晴たるに。斯垂籠ておはしなば。御心も結ぼれなん。ト徐々障子を押開れば。日は麗かに風も絕。いつしか花は咲出んと。心もとなき梢々。引渡したる霞の中にも。梅は早氣色ばみ。微笑みたるも能見へぬ。籬の許の紅梅は。いと早く咲花にて。色

付しを光氏見やりて。(紅の花は見憂きぞ梅ながら)ト一人り言して何やらん。打うめきてぞ居玉ひける。彼腰元の紅と。身をやつしたる眞の稲舟。假に姫と侍きゐる。門守の翁の娘。斯る人の末々は。如何なりけんか逢生の。卷に至て委細云べし。

末摘花の卷全く畢んぬ。

(是より紅葉の賀の卷の説殘したる事へ移れり)○藤の方の御懐胎。既に師走も過にしかば此月はと杉生始め。附々は待聞え。室町にても其設け。頻りなりしが。氣色もなく。睦月もつれなく經行ぬ。物の祟りにおはするかと。人々の言騒ぐに。藤の方は猶侘しう。最苦敷て惱みまさり。室町へは歸りやらず。彼音川の下舘に。引籠りて居たりしかば。義政の苦慮大方ならず。光氏も夫とはなしに。加持祈禱抔せさせけるが。其驗にや如月の。十日餘りに安々と。男御子をぞ産玉ひぬ。此所の館に附添ゐる。人々は言も更なり。御所に仕ふる面々も。悦び聞えて。其所此所より。使者は門に市をなし。騒が敷迄賑ひければ。光氏は其人の。絶間を窺ひ彼處へゆき。杉生に對面し。先平産の喜びを。仔細と述て後ち。如何なる樣かと父公の。覺束ながり玉ふ事。昨日に今日は猶勝れり。いで其御子を予に見



せよ。樣子を直に言上せん。ト言のを聞て杉生は。少し進みて面を上げ。「生れ玉ひてお日數も。經ざる中は淸からぬ。御顔容を御目近く。見せ奉つるは憚りあり。夫のみならず若君の。是へお來なされし樣子。若や藤の御方が。知せ玉はゞ御産後の。御惱みの障とならん。早々御歸り遊ばせと。いと伪なく差放ちて。聞え上れば不興げに。「夫は如何なる故なるぞと。問れて聲を打密め。「然も無事をも言續け。疵を附るは人の口。殊に貴方は怪しかりし。御過失を世に知せ。浮名を漏すが御望み。藤の方も其事は。能御合點を被成てなれど。女の果敢ないお心では。いと憂事と思し續け。早身二つになる上は。浮世に思ふ事もなし。寧その事に此疾が。重つて妾は死たいと。お叨るのが憫然く。私しが申すには。光氏君の御事さへ。呪う樣に富徽樣が。仰せありしと紅葉見より。お歸りの後御物語り。然すれば貴孃が此儘に。果敢なく過行玉ひなば。内君始め其附々。いと好事と笑ひやせん夫口惜と思食し。早御本復遊ばせと。お力を附てより。お心もさはやいで。お案事遊ばす程ではない。室町へお歸りも。最遠からぬ中の事。お出生なされた和子樣をば。其時御覧遊ばせ。トすげなき體に光氏は。言葉を盡し言迚も。甲斐はあらじと暇を告。立上れば杉

生が。後方に控へし腰元司。「御誕生の若樣と。光氏君の御顔ばせ。珍敷程似申して。トまだ若やかなる心から。辨へもなく云出るに。款と思ひて杉生は。袖を引て押止るを。光氏は見ず聞かぬ。風情に佯し歸りけり。四月になりて藤の方。室町へ歸り給へり。義政始めて其子を見るに。誕生ありて未だ漸。三月目なれど其程に。較ては體も大きく。智慧附のいと早くて。起返り抔もしつ。顔の樣子は光氏が。生れ出し其時の。有樣に露違はず。同じ光に見えければ。疵無き玉の思ひして。其喜び面に現れ。眞に花滿中將の。遺子の藤の方。其腹に生たれば。母の素性も耻かしからじと。寵愛する事大方ならず。光氏此由聞よりも。直樣に御所へ赴き。藤の方の產後の惱み。餘波なくさわやぎ給ひ。歸られたる祝詞を。表立て杉生の。許迄狀にて云遣けるが。折よく義政彼處に在て。彼幼子を傅きの。女に抱かせ立出給ひ。「ヲヽ光氏か能こそ〳〵。我數多の子は持しかど。產所を離れて。日を經らず。斯る程より明暮に。見たるは御身のみにてあり。思ひなしにや此子の顔。最よく汝に似たる故。猶寵愛しく思ふなり。幼少中は何の兒も。斯るものにや有らん迚。只管愛し玉ひければ。光氏は發と斗り。恐ろ敷も忝けなくも。嬉しくも哀れにも。種々に思ひ



亂れ。落る涙を押隱し。手遊びの振鼓を。差翳して熟々見れば。彼幼子は夫に目の。移りやすらん莞爾と。笑へる顔の美しきに。我身ながらも此兒に。似たらんには憎からぬ。幼だちにて有しならんと。心奢の傚につけ。母花桐の事をさへ。思ひ出して見上れば。義政は猶彼兒と。光氏の面を見比べ。餘念もなげの有樣なれば。愚なる身を斯迄も。愛し給はる父君の。其御心に背かんと。態と浮名を世に流すは。如何なる因果にあるやらんと。心地も宛然かき亂る。樣なれば御前をたち。常に通はぬ長廊下へ。ふと行懸りて何氣なく。差覗いて見給ふに。此處は富徽の前の。傅きの女輩が。集る部屋と覺しくて。彼白糸が眞中に。押直りて指折數へ。藤の方の今度の御產。一ト月延たにした處が。四月からで無れば合ぬ。御添臥は二月限。もう其頃は音川の。館へ歸りて住給へば。怪敷事じやと打笑へば。一人りの女が差出て。「噂に違はず光氏樣の。お子に彼は極つた。紛れの無御顔容。あれ程似申したを。思ひ懸ない事なれば。御所樣はお氣が附ず。何でもよい子は此樣な。者と思ふておゐでの樣子。他目に見るも齒痒。トロ々語るを光氏は。漏聞からに豫てより。覺悟の上には有乍ら。今更に最苦しく。面の色も變るべき。心地なしつゝ忍びゐる。」又彼

方には藤の方。積る思ひのやる方なき。胸の裡を光氏に。密に語聞せんとや。後より密々來たりしが。是も襖に立隱れ。我身の上を聞せつなさ。汗も流れて戻るにも。戻り難くて佇立けり。夫とは更に白糸が。點頭て片頰に笑み。「夫や言ひでも知た事。光氏君をも彼の樣に。幼少時から御寵愛。兄公をさへ差超て。世を讓らんと遊ばしたれど。富徽樣を始とし。人々も其事は。承引せぬ故是非もなく。嵯峨の舘に置申すを。今もつて御所樣は。心苦しく思食す。其折から今度又。夫に似た子が御誕生。御成人の其後は。又お舘の騷が敷事が大方起るであらう。ト四下を更に憚らぬ。高聲を光氏は。有繋憎しと思ひければ。予漏聞しと彼らに知せ。物懲させんと聲打揚げ。「花が咲かしイヨ八重梅が。ト唄ひすさびて出給ふを。おかしき聲ぞと女輩。皆立出て見送りけり。

偐紫田舎源氏第十編 終



# 偐紫田舎源氏第十一編序

梅が咲かし イヨ八重梅が枝を手折ふりしてかならずござせ トサさまをまねく夢になりとも逢たや見たや浮世ぢやな稀に逢夜は現か夢かかたる間もなきサンサ短夜やよしなの思ひ浮世ぢやな［松の葉］元祿十六年印本 に載たる八重梅といふ曲子なり。昔は流行し唱歌とおぼしく。［俳諧柳の水］元祿十三年撰 の文に。「冬枯し聲に八重梅を薫せ云々。又［古今我集］寶永年間寫本 酌にたつ毎に八重梅二上りに八重梅うたふその八重梅を」といふ事見えたり。是に錄して序にかふるはたゞ梅の花の色のごと三笠の山のをとめ。と風俗歌を源氏のうたひ給ひし事をまなびて。十編の尾に光氏が。梅がさけかしイヨ 八重梅がと此小歌にひきかへしゆゑにてあり。

天保五年甲午春 柳亭種彥誌

# 修紫田舎源氏第十一編

柳亭種彦著

室町殿の御身近く候ふ。水原と云へる女有けり。彼は久敷糺に在て。稲舟姫の傅きなりしが。男の髮を上る事を。能手馴し由聞えければ。去年よりして御所へ召され。義政公にぞ仕へける。年の程は五十の上を。七つ八つ越たれども。人柄は賤からず。心も賢き方ながら。婀娜めきたる産れにて。髮の飾衣裳のあや。若やかに粧ひつ。小笹の霰萩の露。觸ば落ん風情なるを。光氏日頃心を留め。娘を早く擧けなば。曾孫をも持べき年なるに。斯心の亂るゝは。最訝しき事に思ひ。戯れ事を云懸て。試給ふに彼水原は。嬉しさ面に現れて。似合しからぬ中也とは、思ひも寄らぬ風情なれば。光氏は呆れ乍ら。斯る樣も又おかしく。折節物等言つれど。若し人の漏聞かば。斯古めか敷女に戯れ。狂氣せしかと笑ひやせんと。此頃は遠けて。傍へも寄せざりければ。水原はいとゞ光氏が。辛き心を打嘆き。



怏々苦慮居たり皃。偖一日。水原は奥へ召させられ。義政公の御髮を。例の通りに上はてて。長廊下へ差懸り。部屋へ退んとする折柄。光氏は不斗行會たり。常より清げに打扮たる。水原の樣を熟々見るに。薄き額は眞菰墨に。黑々と際を取り。鬢簔髢を入たりけん。房やかに髮を結なし。肌に著たる紅を。見せん爲にや最薄き。帷子を上に引懸け。模樣の好み帶の色。皆今樣にて若々敷。いと華麗なる粧ひなれば。年にも耻ぬ姿哉。と懷しからずは思ふ者から。心の裡は如何なりけん。例の嬲て遊ばんと。四下に人の無のを幸ひ。言葉も懸ず光氏は。徐々水原が帷子の。裾を捕へて打笑つゝ。引驚かし給ひければ。色美しき扇を開き。差翳して顏を隱し。此方を瞠乎見返りたる。目の皮は強く黑く。落窪みて穢げなり。衣裳のみかは扇の畫さへ。華々敷て似合しからず。何をか書けると光氏は。頓て我扇を拔取り。「男に顏を差向て。まもらるゝを耻思はゞ。夫にて覆へト投出し。彼扇と取替見るに。赤き色は持手へも。映る計りに色濃に。小高き森を緑青にて。青々と塗隱し。（森の下草老ぬれば。ト其傍に書たるは。水原が筆と覺敷て。よしある手とは覺え乍ら。筆艶もなく古めきたり。光氏彌心におかしく（大あらぎの森の下草老ぬれば駒もす

さめず苅人もなし）と其古歌の二三句を書すさびて置つるは。若草ならでは苅人なく。馬にかひても喜ばずと。老たる其身を草に譬へ。思ひを懸る人の無を。打嘆いたる述懐ならんか。（郭公來鳴を聞ば大あらぎの森こそ夏の宿なりけれ）と。知家も讀たれば。扇に書し此森の。下臥願ふ者も有らん。戀は姿に寄る者かは。然な嘆きそト云中も。似合しからぬ戯れを。四下の人や見附んと。心苦敷立んと做を。水原は厭ふ氣色もなく。（來て見よや咲り過たる姥櫻）ト云樣もいと馴顔に媚きたり。光氏は增々興さめ。立も立れず熟々と。水原の顏を打まもり。（手折なば人や咎めん姥櫻）任意老木にあれば迚。誰か其儘見過さん然れば今迄眺めたる。人の咎めも煩はしと。枯て花なき枝乍ら。詞に花を持せつゝ。脫れ出んと仕給ふを。水原は周章引留め。「髮の綠も冬柳。雪を頂く此年迄。斯も難面應對され物を思ひし事はなし。老の後の身の耻を。不便と思し給はれと、打嘆かれて持餘し。「夫には折も亦有らんと。思ひ乍らの橋柱。絕るも人目ある故ぞと。引放せば猶縋付き。「人目に中の絕るとは。夫や貴方のお僞り。其橋柱朽果て。古ぬる我身を厭ふての。事とは合點し乍らも。思ひ切れぬ身の因果。只此上のお情には。御手に懸てお刀の。錆となるのが妾の



願ひ。何卒殺して給はれ。と恨みかけ口說たて。俯し倒れ泣叫ぶ。此時太郎高直は。水原の聲を聞附て。小蔭に窺ひ居たりしが。折こそ宜けれと拔足に。水原の後へ立廻り。背負守りとか言慣はす。帶を結びし其間へ。挾し守りへ手を懸て。紐引解いて取上れど。泣くづをれしを光氏が。介抱すると心得て。水原は更に是を知ず。高直は光氏と。顏見合せて笑ひを隱し。少し後へ引退き。今來る樣に廊下の板を。動々と踏鳴せば。水原は別に人有事を。漸に心附き。流石に顏を打赧め。袖打翳して迯行を。高直は遙に見送り。「後姿は二十山。前に對へば田子の浦。浪の寄せくる額にも。耻る樣なき淫奔者。御前近く寄せ給はば思ひの外の事なりと。嘲る者も候べし。又彼が守り袋。折あらば取隱し。得させよとの御仰せ。便義なくて等閑に。今日迄は打過しが。今水原が前後も忘れ。嘆くを僥倖其暇を。見すまして奪ひ取たり。抑君は此守を何にかせさせ給ふならん。ト不審顏に差出せば。光氏守りを手に取上げ。「二重鶴の擬似織。是には何の用もなし。何日ぞや確乎に見留しは。鏡袋に有けるならん。夫を此方へ取る手段は。先斯々ト高直の。耳に口よせ打密語。猶も水原を詐謀計策。道すがら物語らん。サア供せよと光氏は。嵯峨の館へ歸りけり。」廊下

の此方も奥殿へ。通ふ路にて有ければ。義政は藤の方。其外數多の女を引連。廣座敷へ出んとして。何心なく窓の障子の。裡より彼方を差覗けば。水原が只管光氏を。捕へて何やら打泣體。可咲き事ぞと振返り。藤の方を招き寄せ。諸共に始終を見終り。頓て設けの席に直り。義政は聲を密め。「若きに似合ず光氏は。女に强面產れ故。二葉と交情の睦じからずと。心に苦慮ゐたりしが。今の樣子を打見れば。情を知ぬ者にも非ず。然は去乍ら水原とは。似合しからぬ年の程。いと訝しき事にぞある。此處に居流し。腰元づかひの女には。見苦しからぬも多くあり。夫に心を留ざるは。若き女は目に馴て。珍しからずや思ふらん。虛實は知ねど過頃より。嵯峨の舘へ人知ず。女を迎取りしと云ふ風聞高く赤松の。舘にも聞傳へ。二葉を始め附從の。女も妬く思ふ由。我耳へも入たる故。捨置難く光氏を。密に招いて次第を語り。人に恨みを受ざる樣。此後心懸べしと。敎訓なしゝ其時に。畏まり候と。答へしのみにて座を退き。彼女は何者とも。樣子は予に告ざりしが。今日の體を倩見るに。夫も是も只一時の。戯れにして光氏は。眞に心の打亂るゝ。本性には有べからず。御身は如何に思すや。ト問ひ給へば藤の方。我身の胸の苦しさを。試み給ふ者な



るかと。思へば答ふる詞もなく。「仰せの通りに侍らん。ト只差俯き居たり鳧。義政夫共心つかず。「今の二人りが物語り。遠く忍びて居たりし故。事の樣子は聞留ねど。水原は鬢に置霜の。消て花香のなき身を恥ず。言寄る心の不便さ。情あり氣に打回答。光氏は歸りしなるべし。御身は只夫となく。光氏が徒然を。問慰む章をかき。其使に水原を呼び。夜も更行かば嵯峨の館へ。今宵は泊りて翌日早く。歸り來れと吩附けし。一ト夜彼處に宿らせなば。彼白徒何をか做出し。五月蠅事よと光氏が。迯隱るも一興ならん。ト機嫌よげに宣ふにぞ。藤の方は漸々と。心落つき笑を含み。「管絃の折は何日迚も。男の中へ立混り。琵琶は就中水原には。優る人なき上手なれば。若君の好お慰み。只今申し附ませう。妾が平常の描き筆。御前に執も憚りな。ト直にお次へ辷り出。料紙硯を取寄る。折柄例の腰元司。走り來つて聲を密め。「過刻に夕立の。降出したる其時分。光氏樣が徒然と。お庭を詠めて御座りましたが。私しをお側へ召され。何となく靑み渡る。其中に常夏の。華麗に咲たる事よ。折て參れと被仰る故。其儘手折て露を拂ひ。差上ましたら此樣に。何やらお狀を結ひ付け。折もあらば貴孃樣の。御覽に入て愛らしき。此葩へ塵計り。お返事取て參る

れよと。密の仰せに侍ると。差出せば此方にも。物いと哀れに思ひ知。事のみ繁き折なれば。先打置ず取上て。書給ふ事多かるべし。繰返し巻返し。暫く詠め居たりしが。(撫子を見るに置けり袖の露)と光氏が狀の奥に。書藏たる發句を吟じ。小膝を打て莞爾笑ひ。「此お返事を上るには。願ふてもない好便りと。筆早に書認め。彼水原を呼出し。「此狀を嵯峨へ持行き。光氏君に參らせ給へ。夜も更行か然なく共。御用もあらば若君の。お館へ今宵は泊り。翌日戻りても苦しうないと。御所様の御差圖。急いで支度なされましと。聞て水原は我願ひ。今宵こそは叶はめと。悦び乍ら出行けり。夕立の餘波涼しき宵の程。光氏はしとけなき。姿を取も繕はず。笛を取出懐しう。吹號びつゝ廊架を。傳ひて心慰めに。西の亭へ赴きつ。差覗き給ふれば。紫は彼撫子の。露に濡たる風情して。言の葉に添臥たる。其様の美しさ。愛敬は溢るゝ様にて。尻目に此方を見やり乍ら。光氏の今朝よりして。音信ざるを打腹立。背差向て物をも云はず。光氏縁の柱にもたれ。此方へ〳〵と打招けど。身動きもせず振返り。「一つとや。人に物を思はせて〳〵。と手毬唄を口號び。振の袖にて口元を。覆ふ姿はこまざくれ。馴顔も又美しく。光氏は莞爾に。「二つとや。二



人り寐る夜の繁々にて。あかるゝよりは増ならん。其様に憎き事。誰に習ふて口馴し。指南をしたは言の葉。ト仰せに莞爾打笑ひ。「是は又迷惑な。紫様も辨への。無いお年と云ふでもなし。お氣の揉るも御尤も。幼馴染と紅花染は。色が褪ても黄が殘ると。なげ節にも唄ふ通り。二葉様とは久敷御縁。三筋町へのお忍び歩き。糺もたいして見たならば。何やら怪敷詞のあやなぎ。所縁の色の藤の花。彼で斯でと人の風説。此お子様が私しで。御覧遊ばせ御所様へも。赤松様へも連立ねば。お一人は遣り申さぬ眞に齒痒事だらけ。ト疊叩いて腹立聲。「是々己が過つた。紫を諫止せて。呉るであらうと思ひの外。ほふかい嫉氣に此光氏。返答も殆ど當惑。あれ〳〵誰やら人が來る。靜にしやと留むる折柄。太郎高直罷出。手をつきし儘詞もなく。稍暫く打笑ひ。漸々に顔を上げ。「重ねて水原に面會なさば。實に彼へ戀慕と見せ。言寄べしと此夕暮。路すがらの君の仰せ。私しと比なば。四十も違ふ老女房。御馬前に捨る命は。露塵程も惜からねど。此事計りは身に取て。なんぼう苦敷候ゆゑ。何卒水原が頓死するか。然なくば是より逢ざる様。神を祈りし甲斐もなく。藤の方のお使に。只今彼が罷越。此お館へは始めてなれど。夫に似合ぬ仕こなし顔。今宵は一

宿願ふとやら。お座敷へ押直り。悠々とした面の憎さ。併し厳命もだし難く。近く居寄て樣々に。戯れ懸れば誠と心得。例の窪みし目を細め。難面人の忘れ草。貴方の心に随ふが寧ましとは思へども。何と云ふ因果か其人が。私や忘られぬと涙を流し。白粉はとゝろはげ。彌二目と見られねども。斯くては果じと心を激まし。今宵是に泊りなば。夜更て後に忍ぶべしと。背打叩けば莞爾と。笑ひし顔は目に附て。今宵眠らば襲れん。難面人とは此君の。御身の上と覺えたり。壓の強い奴等と。下賤に云ふ烏滸の者。いかに計らひ申さん。と聞て光氏打喜び。「此方より迎へをやらんと。思ふに幸ひヲ・よし〳〵。是言の葉。今聞く通り水原と言は。早六十に近き老女。夫に似合ぬ色好み。予へも心を懸しと思しく戯れ寄し其時に。懐中より落せしは。我久しく尋ぬる錦。能見留んと思ふ間に。水原は周章押隱し。足早に逃去ぬ。夫故是なる高直に。吩咐置て今日薄暮。かれが持たる守り袋を盜み取せて能見れば。金襴の紛ひ織。我望みの品にはあらじ。元來大事の物なれば。肌身を離す由縁もなし。さては常々人に隱し。帶の間へ差込み置。鏡袋が夫なるべしと。心は附ど予輩には。奪取るべき手段なし。水原は糺の館に在て。去る年より室町へ。召させら



れたる者なれば。此館へも來るは始めて。赤松の邸抔は。門をくゞりし事もなし。去れば二葉に對面せず。其方の顔をも知らざれば。先斯做て彼が持つ。鏡袋を取てくれ。ト耳に口よせ密語けば。言の葉は興さめ顔。「何して夫が私しに。ト言を光氏打消て。「其方を爰へ呼前に。人の目に立ぬ樣。眉毛は既に拂はせたれど。此春より又眉毛を。剃ずに置けと吩咐たは。水原を招いで彼品を。奪はせんとの豫ての謀計。簪は紫ので。大方は間に合ふ振袖の帷子は。行長の合樣に。用意して早置た。男では角が立つ。然も有さうに柔和く。其方が言たら實と思ひ。放心と渡すであらう。サア早う仕度しや。と小弁を呼で帶帷子。取出させ給ひければ。言の葉は詮方なく。手早に鏡臺引寄せて華麗に粧ひつ。帷子取て着更る間に。光氏は高直を。側近く招き寄せ「汝も随分油斷なく。箇樣〳〵に計らへ。ト密々聲に言含め。言の葉諸共追立やり。後見送つて座に戻り。「嘸 紫は退屈ならん。小弁其琴此所へもて。ト押直させて光氏は。雲井調子に掻合せ。差遣給へば。紫は今日の恨みは晴ねども。最美しう引鳴し。些少手には有乍ら。押色の音も能すみて。最愛らしく見えければ。笛吹鳴して其處は斯。此處は此こそ彈者なれ。と敎へ給ふにむづか敷。彈べ難き處

さへ。ひとわたりにて習取り。末頼母敷見えけるにぞ。光氏は我思ひの。叶ふ樣なる心地して。「此頃唄ふ柴垣。菅笠。獅子跳。など言者は。名はにくく聞ゆれど。をか敷節よト面白う。笛吹すまし給ひければ。夫に附て掻合する。未だ手づかひは若けれど。拍子違はず上手めきたり。さて紫は琴を押遣り。小弁と共に繪冊子を。取出して見居たりければ。光氏は言の葉の。樣子如何にと立んと做を。「又何處へか行給ふと。紫は心細く。冊子見さして俯しに。倒れ臥を光氏は。哀れと思ひて側へ寄り。いと美敷溢れ懸る。鬢の髮を掻撫て「己れが館に居ぬ時は。戀しくや思すか。ト問せ給へば點頭斗り。物も言ねば猶すり寄。予も一日逢ざれば。心もとなく思へども。打捨置ば世の亂れと。成べき大事のある間。斯は彷徨歩くなり。御身の成人して後は。外へは更に行まじきぞ。此頃心を碎くのも。世を靜にして末永く。添遂ん爲にてあり。恨めしとな思しそ。と委細譚合ひ聞ゆれば。有繫に心恥かしく。回答は無てつい膝に。倚懸りし儘眠りけり。光氏は手を鳴し。夜食の膳を取寄せて。紫をゆり覺し。「今宵は館に用もあり。又もや雨も降出ん。雲行も暗ければ。早他へ行心はなし。予も直に此所へ寐ん。御身も共にしたゝめやと。聞いて紫胸おち着。



心も解て膳に對ひ。箸をば取れど何とやら。氣むづかし氣に碌々に。物も喰ぬを打見やり「物も喰たう無ならば。其處へ小弁に床をとらせ。先へ憩みやと光氏に。勸められても其後にて。忍んで出行給ふかと。疑は敷て寐もやらず。光氏は笑を含み。「禁裏の宿直さては又父君の召にもあれ。和女の夫程苦慮るを。見捨ていかで行べきぞ。眠氣が附ずは遊ぶがよい。氣に入の犬吉は。宵から見えぬが何處にゐる。ト言慰むる其折から。高直と打連立ち言の葉は歸り來て。「まうし〳〵若君樣。貴方樣の仰せの通り。身にもそぐはぬ此振袖。帶の〆樣身の擧動。髮の飾も華麗に。さし飾つて赤松の。姫君らしく拵へて。歩みぶりをも柔和に。褥の上に斯整然と。直ると頓て高直殿が。勿體らしく水原に向ひ。今日折よく二葉の上。此お館に來駕にて。お目見え仰せ付らるると。言るゝと水原は驚き。「夫は思ひも懸ぬ幸ひ。有難い義と男の樣に。四角四面に挨拶し。恐る〳〵に斯云身で。這出る可咲さ。三筋町の神林の。鴇母の玉に生寫し。祝儀を貰ひに出た樣など。思はずふつと吹出すを。漸と耐へて眞面目になり。聞及んだ水原とは。和女の事か苦思ない。近う〳〵と言たれば。發と斗りに蹲踞り。暫くあつて顏を上げ。何ぢやか知ぬがむつか敷。事を云ては低

頭をし。又少し振仰向き。饒舌ては低頭をする。其内の長さ〳〵。退屈はする氣は詰る。脇の下から冷汗が。流れるのを辛抱して。宜い程に應接ひ。和女の所持の鏡袋は。世に珍しい錦と聞。手本にして妾が帯を。織せたう思ふ程に。暫し貸てとお口うつしの。通りに申し出ましたれば。水原は暫く考へて。如何にしてか御前樣の。御耳へ入ましたか。大切の品なれど。直の仰せは否み難しと。惜そうに懐中より。出して渡した此裂が。貴方の御用に立ますか。ト差出せば光氏取上げ。「覺えある太秦錦。ヲヽ是れにこそ〳〵。是を此方へ取上れば。二葉になつて居るには及ばぬ。氣が詰るなら振袖を。脱で明日は眉をも取れ。して又水原は何れに居る。と問せ給へば高直差出で。「過刻の仰せの如く。詮議を遂んと存せし故。今宵は卽ち言の葉の。部屋に留めて置たるが。夫に附て可咲は。今言の葉が其品を。受納むると先よしと。心の緩みし體に見え。近う〳〵と始めに言し。詞とは引變り。今夜和女は私の部屋に。泊つて行など。云かくるを。發と思ひて目配で敎へ。「お心配ひ遊ばすな。女中の局に水原をば。留むる支度も做置たり。先入せられましと。其場を兎角取繕ひ。輕々しからぬ樣。藤の方の御狀も。私しが受取て。爰に持て候。ト差上ぐれば光氏



は。取手遲しと打開くに。詞は無て（撫子や露の所縁の詠め草）と斗り仄に書さしたり。倘思ひ懸なき返事に。胸打騷ぎて嬉しけれど。然らぬ風情に卷收め。高直には何やらん。密計を云敎へ。まづ打憩み給ひけり。

作者曰本編にものせし水原は源の内侍に比したり

○風冷に打吹て。漸更行程に人々も。皆眠れる氣色なれば。光氏は徐々起出で。寐衣の儘の肌寒きに。衣桁の羽織引下し。漸に忍び出で。女輩の常にすむ。局の方を心ざし。長廊下を彼方此方。佇ありき居たりしが。絲の音色の哀れげに。聞ゆるがふと耳に留り。向の方を打見れば。言の葉が部屋と思しく。障子を一間押開て。夫に背中を打もたせ。『山城のこまの邊の姥瓜を。ちぎりに來まかせ。ヤレ。こまの邊りの姥瓜を』ト此頃はやる隆達節を。聲可咲う唄ひつゝ。かた撥の音色仄に。彈居たるは彼水原なり。肌着計りに媚きたる姿形は若々敷。例の事には有乍ら。年に似氣なき樣なりと。光氏が聞居ると。知や知ずや彈止て。懷中へ手を差入れ。襟に顏を半かくし。溜息吻と吐たるは。何をか物を思へると。心の裡に打咲れ（月の夜に誰が閉たよ此つま戸）と忍びやかに光氏は。唄ひ乍ら立寄

ば。水原は其方を尻目に眺め。(君ならば開て來ませよ其つま戸)ト唄ひ添たり。叩く共よも開じと。厭ふが女の常なるに。夫に變りて蓮葉なる。擧動は興醒乍ら。心に思ふ事あれば。其儘には行過難く。此方よりも仂なく。戯ばみたる事共を。云懸給へば水原は嬉しく「濡衣さへも憎からぬ。人のきせしは嬉敷を。トいと馴顔に寄添けり。折しも太郎高直は。水原が日頃の行狀の。不審を見顯さんと。息を呑で窺へば。予より先に光氏君は。忍んで彼處の部屋にあり。時分は好と心に點頭。まづ水原を驚かし。樣子を探つて見る可と。咳しつゝ今閉し。障子を丁々音なへば。光氏は不斗是を聞つけ。高直なりとは思ひも懸ぬ趣に伴しつ「さては水原は我館に。忍び男の有ならん。和女の年と比べなば。誰かは知ねど大人敷。人にこそ有べけれ。夫に似合ぬ我姿を。見附られんは最耻かし。來べき宵にはさゝがにの。蜘蛛の擧動有べきに。其印を吾には告ず。憂目を見する憎さよ。ト私語ながら脫かけし。羽織を取て屛風の後方へ、隱れ給へば高直は。可咲さを漸堪へ。彼屛風に手を懸て。撤々と疊寄せ。四下を蹴立て騷がする。水原は前にも云如く。年は旣に老たれども、風流に身を持なし。斯る難義は昔より。身に覺えある事にや有らん。斯迄心慌忙しき。其



中にも光氏君を。如何に做ぞと悲くて。震ひ〳〵高直が。裳を取てひかへたり。光氏はしどけなき。姿を耻てや彼疊し。屛風をおさへて楯となし。はひ蔭れて顏をも出さず。高直は目を見張。彌怒れる氣色に伴し。今宵忍んで來たらん。と我云ひつる其時は。云々と返事もせず。外の男を引入て。是見よがしの淫奔女。覺悟なせ。ト言樣に。刀拔持振上れば水原は發と飛退つ。「アヽ我君樣我君樣。情に命を助けて。ト手を摺合せ伏拜む。娘の中か然なく共。女盛にあらんには。哀れと人も見做さんが。歯は脫て詞は漏り。顏はしわみて艶氣もなく。漸く二十の內と外。若き男の其中にて。物怖したる其樣は。梅と櫻の二幅對墨畵の枯木を其中へ。懸たる如くに似合しからず。光氏はつと立出。打笑ひつゝ高直が。刀を拔たる腕を捕へ。强かに掐りければ。刀は戞利と捨乍ら。猶笑ひをば押包み。恐ろしげなる顏色を。水原は怖々後へ退去。亂れし裳を搔寄て。脫捨置し帷子を。引寄て着んとするを。高直はつと捕へ。更に宥さん樣子も無。じり〳〵と詰寄て。「命惜くば助けてやらん。其代りには下帷子も。剝取て肌を顯し。耻かゝせて吳んずと。水原が寐衣の帯をとき脫せんと做ければ。脫じと此方は爭ひて。引あふ中に縫糸の。絽もやしつらん彼帯に。綻

び切て點々と。裡より溢るゝ數通の密書。高直は手早に取上げ。御覽の如く水原の懷中。詮義なして候へども。夫と覺敷物もなし。此書通にこそ故あらめと。差出す其内に。何思ひけん落たる刀。水原は執て我腹へ。突立んと做ければ。ほつと折て身に通らず。此方の一間に立隱れ。樣子を聞居し綾柳が。吃驚なして予をも忘れ。駈出んと做たるが。刀の折て水原の身に。過ちなきに再び驚き。仔細あらんと押靜め。猶ほも窺ひ居たりけり。高直は茫然たる。水原が側へ近く立寄り。「仰せを受たる事ながら。假にも君へ刄向ふ太刀。眞劍は恐れありと。夫こそは能狂言に。用ゐる木太刀の箔置なれ。夫で腹は切まい切まい。我君如何計らひ申さん。ト申し上れば光氏は。心靜に件の密書。彼方此方を打披き。悠然として水原に對ひ。「何かは知ねど捨身の覺悟。死は一旦にして易しと云。ハテ死にたくば何日でも死れる。先づ沈着と心を靜め。我云事を聞たる後。汝が事をも寛緩聞ん。足利の先祖より。傳る寶三品あり。故ありて殘ず紛失。其内に小烏丸。勅筆の短冊は。未だ我手に入ざれども。有所は確に探り知り。只玉兎の鏡のみ。詮義の手懸なかりし處。糺の舘に安產の。守りある由傳へ聞。藤の方御懷胎の其折柄。杉生を使ひとして。稲舟に彼守りを



乞求め。何心なく開き見れば。紙にすりしは立浪に。兎の形三日の月。寶の鏡の裏の模樣さては伯父君義勝公。取隱し置れしにて。盗賊の所爲ならずと察し。糺へ赴き人なき時。稲舟に問ければ。姫が答て云ける樣。仰せの如く其鏡は父君の御遺物。是を肌身に添置ば必ず思ふ男に添遂。安らかに子を產て。身に思はざる幸來り。如意寶珠にも劣らぬ守り故に和女にとらすると。仰せ置れし事どもは。乳人が妾へ物語。人の難義を救ふのが。御追善にもならんかと。其如く裏をすり。懷姙の女に與へ。是迄度々試しが。皆いと安く產落し。產後に惱者もなし。然れば彌々大切に。打臥時も手箱に入れ。枕近く置たるが。何の間にか鶴龜を。鑄附し常の鏡と入かへ。其御鏡は。先年紛失。今は裏をすりたるが。三枚四枚殘る計りと。聞て予も力を失ひ「して盗賊の手掛は。有や無やと押返し問ば。稲舟又答て「只今も申す如く。妾が側を離さねば。腰元に平常ゐる。女子の仕業に疑ひなし。合點のゆかぬは彼水原。妾が鏡を出すたび。手を合せては伏拜み。又は額にさゝげ持ち。何やら祈念をなす樣子。若や彼が心を懸。取隱しゝかと物語り。夫故に光氏。何日ぞやより戀に假託。戯れ寄て汝が樣子。窺ひ見れば案に違はず。取落したる此錦は。太秦裂と言

にてあり。我先祖尊氏公。洛西太秦廣隆寺の。聖德太子を信仰あり。數度の戰さに打勝しも。是皇太子の加護なり迚。彼寺に傳はりし。此錦の裂を乞受。玉兎の鏡の袋を作り。納め置れし品なれば。類あるべき錦に非ず。偖こそ彌盜賊は。汝なれと思ひ定め。腰元女を二葉に僞させ。取寄て熟々見るに。袋の錦は眞にて。中の鏡は似も付ぬ。今行はるゝ角鏡。又この錦と思ひ違へ。室町にて高直が。盜み取たる汝が守りの。其內には白糸と。取交したる數通の狀。山名へ心を寄る文體。夫のみならず今帶の。裡より溢れし數多の密書太秦裂の袋のみ。留置て御鏡は。早宗全へ渡せしか。抑汝は誰女。誰が妻にて年久しく糺の舘に仕ながら。主恩を打忘れ。敵に一味なしたるぞ。予には何の恨みかある。又今更に生害と。覺悟を極めて汝が胸中。訝しき事にぞある。高直と言合せ。今宵白痴をつくせしは。夫らの筋を詮議の爲。包まず語れ卒聞んと。辯舌淀まず言流せば。水原は吻と息を吐き。「仰せの通り御鏡を。盜んだは妾が仕業。今宵お返し申さんと。用意致して置ました。お受取遊ばせト。此方の一間に打向ひ。サア其品を上たがよいト。呼れてはいと綾柳が。玉兎の鏡を敬々敷。さゝげ出れば光氏は。燈火近附熟くと見。「是こそ實に寶の御鏡。何と



して綾柳がト。彌疑ひ晴ざりけり。水原は面目なげ首し。差俯いて居たりしが。漸に顏を上。「云へば言程我身の耻。言ねば叶はぬ此場のしぎ。事長けれど一通り。お聞なされて下さりまし。爰に居る綾柳が。父の片攬調大夫。子供を殘して女房は。先だちしと綾柳より聞え上しが夫には段々。深い樣子の御坐ると。其先へ死去し。妻と云しは御所樣の。お目懸らるゝ千景の方を。產落したる先妻にて。綾柳を擧けたる。後妻は此水原。女心の淺ましさ。繼子を憎みし其上に。嫉妬深いが妾の性質。調太夫はもてあぐみ。先妻の子は養女にやり。綾柳が四ッの年。妾しをも遂に離別。後悔先に立ずとやら。目の覺たやうになり心も乾度改めます。娘不便と思すなら。呼返して給はれと。種々詫事したれども。最四ッでは乳も要ぬ。己が一人で育てると。聞入なければ是非もなく。夫より所々彷徨て。稻舟樣へ宮仕へ。其御鏡を持者は。思ふ男に添るゝと。お物語を承はり。盜み取しは調太夫と元の女夫になりたさ故。綾柳を產んだ時。妾が年は最四十。花なき顏が此上に。萎ろひ行ば猶更に。呼返しても呉まいと。紅白粉で裝ひしが。お舘中の噂となり。年にも耻ぬと突じろひ。女中仲間の笑ひ草。老ての後は思ふ樣に。立働きも儘ならねば。朋輩の嬲もの。慰

み者になつて居ると。御奉公も勤よいと。心の中に合點して。是此樣に華麗な。姿を今に改めず。又懲ずまに一昨年も。調太夫と親しく語る。人を賴みて今は早。互に登りし老の坂。せめては狀を取交し。力と成て給はれと。書認めて送りしが。昔に變らぬ一徹者。一旦離別をした女の。狀を見るべき道理はなしと。封をも斷ず突戻され。重ねて言ん詞もなし。其時狀の媒酌せし。人より四才で別れし娘。成人なして赤松殿に。仕へ申すの由を聞飛立斗り嬉しくて。直に彼方へ尋ね行。此綾柳が其頃は。未だ中空と言し時。久振にて親子の名乘。夫よりは折節に。忍び／＼に逢乍ら。とこの山なるいさや川。いさと答へて我名をば。必ず人に漏すなと。口堅めして置たれば。親子の外に此事を。知たる者は絕てなし。去年の彌生上旬。例日の通り密に逢ひ。娘の顏を熟々見れば。物思はしき風情にて。やゝ共すれば淚を落し。常の樣には話もせず。何ぞ樣子の有事か。私には隱す事は無と。賺して問ば及びなき。貴方樣を戀焦れ。此願ひ叶はずば。ト命も惜まぬ覺悟の體。耻をも忘れ現在の。母に語るは能々な。事であらうと不便に想ひ。種々と云慰め。夫ならば大切に。是を肌身に附て居ると。望みが叶ふと其御鏡。渡して置たは子の可愛さ。不思議な事



でお情を。彼が受しも御鏡の。定めて威德で御座りませう。偖其後に噂を聞ば。調太夫は山名へ奉公。妾も敵に內通し。夫を功に又元の。夫婦にならんと今迄の。御恩を忘れ血を分た。娘をさへ袖にして。白糸より取入て。有事ない事宗全へ。是迄告しは幾度か。愚なる身の淺ましさ。したり顏にて人をも賴まず。調太夫が堀川の。住居へ直に尋ね行。まづ斯々と告しかば。調太夫大に怒り。己れが娘は光氏君。お目懸らるゝ而已ならず。義理ある姉は義政公の。愛妾の數ならずや。我山名へ入込しは。彼が謀反の樣子を探り。君へ注進せん爲なり。なんの女の怜悧げにと。彌罪に罪を重ね。立も立れず取縋る。も裳を拂つて突出され。淚乍らに御舘へ。歸し後に熟々と。思ひ廻せば廻す程。我と我身に愛想が盡恐れ多い若君へ。戲れ事を云懸しは。年にも耻ず主に對ひ。淫奔な女めと。御憤りを引出し。御手打に成たい願ひ。取交したる密書には。お役に立のも有うかと。後にて御目に留る爲。守袋の裡につめ。猶其餘りは此如く。帶の縫目の糸を斷。裡に隱して置つるなり然るに過刻高直殿。妾が守りを取れし樣子。さては此身の惡事の段々。はや知食す者ならんと。思ふ折柄御舘へ。御使ひに參れと仰せ。是僥倖と綾柳が。暫の中のお暇を。糺へ願

ひて呼寄たは。其御鏡を差上よと。云つけ置て御佩刀の。錆となる可き妾の覺悟。思ひ懸ない高直殿の。刀が木太刀であつた故。生耻を晒したも。お主の寶を盗取り。敵に降りし天の罰。只此上のお情には。其差添を高直殿。貸て給へとぞ泣居たる。光氏は打點頭。「木太刀と知ず我腹へ。突立たれば言譯に。自害なしたも同じ事。敵へ内通した罪は。早消たれば死に及ばぬ。今迄よりも白糸に。彌親しき體に見せ。心を許させ置がよい。夫に附て此光氏。又施すべき計策あり。以來心を飜へし。忠を盡さば調太夫が。心も自然に和ぐべし。尚あだめいたる姿に造り。高直にも戯れよ。予にも親しく言寄樣に。擧動て本心に。立返りしと悟られな。と言諭し給ひければ。綾柳痞を撫下し。「御鏡が夫程に。大事のお家の寶とも。今迄は努々知ず。一間に忍んで母の惡事。聞て驚く事斗り。何なる事ぞと思ひの外。今に始めぬ御仁心。母樣お前もお禮を。ト勸められても今更に。何と言べき詞もなく。只手を合せ伏拜み。有難涙にくれに梟。光氏は機嫌よく。「綾柳が此鏡にて。顏を直して居るのをも。物蔭よりは見たりしが。豈夫寶が汝の手に。有う共思はねば。予も心の附ざりし。高直水原も知通り。父公は去る年。鹿が谷の北に當つて。別莊の地を撰み。樓閣



を建られしが。襖屏風の類を皆。銀箔にて押たり迚。人銀閣と是を唱へ。遊覽の地と仕給ふより。東山殿と稱す。即ち此所を閑居と定め。兄義尙に世を讓り。給はんの御心づかひ。近うなりし時に望み。三ツの寶の其一ツ。家に歸りて先安堵。又高直に吩附て。水原の懷中搜らんと。解ほどきたる其時に。縹の帶の中絶て。落たる密書の事につき。馬之丞に言事あり。言の葉は何れに居る。料紙硯ト宣へば。「あいト答へて持出る顏を光氏打まもり。最眉毛を拂ふたな。よい手廻しと戯れ乍ら。何事やらん書認め。此書狀を石堂の。館へ早くと高直に。云附やつて此方を見返り。「言の葉は指揮して。水原の床をとらせてやれ。高直と怪しい素振。己にふつと見咎められ。面目ないやら過刻から。俯いて物をも言ぬ。若い中は彼樣に。耻か敷が女の情。今一人も汝は知て。ト仰せに言の葉心づき。「珍しい綾柳さん。其處は餘り端近な。水原さんも御一所に。マア〳〵此方へ過刻は。二葉樣の眞似をして。若君樣の仰でも。何か今では面目ない。紅さん早百合さん。何方〳〵もお達者で。綾柳さんに逢たのは。眞に何日の儘ちややら。ト其方此方を打混て。是より三人の物語は五月蠅てなん書漏せり。」此夜石堂馬之丞は。己が館に在けるが。夜中ばかりに光氏公の。

御直書到來して。何事ならんと披き見るに。『其方近年召抱へし侍。岸高頓五郎。同く小厠馬刀助の。兩人を何となく。供の中へ加へ入。只今舘へ來るべし。仔細は直に言ん』とあり。不審ながら支度を調へ。駕を早めて嵯峨へ赴き。「石堂參上仕つると。申し入れば。光氏は眠もやらずお在せしが。是へ通せと寢間へ招き。四下の人を遠けて。密語る事半時餘り。馬之丞は仰せの趣き。畏まり候と。御前を辷り出。乘物に乘移り。此駕直に糺へやれ。と。東を望み北へ折。道を急がせ既にはや。加茂の宮居も近附ころ。乘物を暫したてさせ彼頓五郎を近く呼。「稻舟姫へ我君より。密事の御用を承まはり。既に是迄來りしが。何とか倣げん君のお狀を。御次の間の違ひ棚へ。載置て忘れたり。是なくては行ても詮なし。太義乍ら其方は。御館へ今より戻り。箇樣〳〵に云入て。受取て來るべし。其中は駕を留め。予は是にて待合さんと。馬刀助を供に連させ。早く〳〵とせり立ければ。頓五郎心得て。遙々嵯峨の館へ歸り。其由を云入て。件の文箱を受取て。又もや彼處へ立戻る。其頃ははや横雲靉靆。凌晨近くなりに鳧。然るに過刻石堂が。駕を留めし邊には。絕て人氣のあらざれば。頓五郎其邊を見廻し。さては我遲きを待詫。姫君の御館へ。行せ給ふ者ならんと。心に察して糺の小橋を。渡らんと倣けるが。あら怪むべし主人の乘物。轅も折戸も破れ。河原表に捨置て。隨ふ供人更になく。四下に血淋漓て。草葉も赤に染なしたり。只事ならずと近くより。駕の戸押除差覗けば。あら無慘やな馬之丞。五體は續く處もなく。首さへも搔落し。持去し體なれば。頓五郎は呆れ果。暫し詞も無りしが。馬刀助を木蔭へ招き。「汝も我も宗全樣の。仰せを受て光氏の。樣子を探らん其爲に。石堂の館に奉公。何者の所爲かは知ねど。馬之丞が此最期は。手も濡さずに敵を一人。打取たるにて勿計の幸ひ。然し家來は狼狽て。皆逃去し樣子なれば。浮々爰に居る時は。其連累にて予々が。身にも詮義の懸るべし。早く山名のお館へ。立歸て此事を。申し上んと言ければ。馬刀助は打點頭。「夫よからん〳〵。此稻舟への光氏が。狀には何を書たると。彼誰時の未だ暗きに提灯に透し見て。『家の寶玉兎の鏡。今宵不思議に手に入たり。此鏡は義勝公より。和女、遺物の品なれば。此秋八月良夜には。必ず返し參らせん』「フウ玉の兎の緣をとり。月見に返す其鏡を。路にて此方へ〆子の兎。差上る者ならば。宗全樣には御滿足。夫も可是も可ア丶不便なは馬之丞。年若乍ら武道に達し。力もありとの世の噂。夫に似合す身體は微塵

石堂ごころか瓦堂。偕々もろい死樣。ト二人り一度に高笑ひ。折から來懸る忍駕籠。裡にはわつと女の泣聲。「石堂樣はご最後とや。夫や眞かト言乍ら。轉出しは色よき娘。此方の二人りは吃驚敗亡。顔見られじと提灯の。火を吹消て踪くらませ。足に任せて逃行けり。
以下は花の宴のおもかげに編り。此次の年にて光氏二十才の春なり。
○如月の二十日余り。義政公は室町の。南表の廣坐敷に。櫻の宴をせさせ給ふ。其名の薫る花の御所。今年は常より暖にて。今を盛の其景色。繪に寫とも寫えじ。宛然雪かと誤つ斗り。築山は只白妙にて。或は泉水に影をうつして。魚も櫻の梢を潜り。或は築牆に咲溢れ。行來の人も雲を蹈。日は能晴て空の景色。囀る鳥の聲々も。心地よげにぞ聞えける。義尚光氏初とし。文學に達したる。近臣多く打集ひ。探韻を賜りて。各詩を案ずるに。光氏は春と云字を。探り取て候と。宣ふ聲さへ人に勝れ。立上りて賢げなり。兄義尚も其生清麗にして武道のみか。和漢の文にいと精し。然ども才に誇らざるを。奥懐しげに見せんとや。萬の事を押鎮め。音聲遣ひにも心を用。もの〳〵しげに動作たり。自餘の人は晴々と。曇なき庭に立出。うち列るも恥か敷て。臆し勝に見ゆるも多かり。漸く詩も作り果。



亂舞の遊びに移りし時。赤松左衛門政則を。光氏は近く呼び。「去年正月二日の朝。御身の予に得させたる。袴の模樣の麗しさに。晴の折に用ひんと。仕舞せ置しが兄上にも。去頃同綾にて作り。進らせし由を聞。申し合せて小袖迄。今日一對に着せしかば。斯はやしに列りても。一層榮ある心地して。滿足なりと有ければ。發と許りに頭を下げ。「怪敷やつれ見處なき。模樣には候へども。召させ給へる人柄に。依ては艶にも見ゆるなり。有難き仰せを請。恐入て候。ト額に汗して苦げなり。此廣坐敷の右の方。廊下口の唐戸を閉。庭は築牆に隔たれば。花は一目に見え乍ら。男と面を合さねば。此一間を方々の。遊覽の席と定めつ。富徽の前は藤の方の。御子を擧けて時榮けるを。安からずは思ひ乍ら。斯る折には何日迚も。親げに動作て。「今日は天氣も晴朗なれば。貝覆ひ十種香の。氣の結るゝ遊びよりと。招き置たる女あり。召使と言には非ねど。妾とは親き者。是が舞は幸若節。今樣抔とは事變り。出雲の國より五條に登りし。お國と言が弟子となり。歌舞妓と稱る俳優にてなか〳〵興ある者なりと。宣へば藤の方。「夫は何より珍しい。杉生司もお縁へでゝ。拜見しやと云中に。夫々と富徽の前。指揮につれて彼娘。天冠を頭に頂き。御前へ立出て。手

を盡してぞ舞たりける。」漸入日になる程に。此方の間にても太郎高直。遊佐の國助初めとし。日頃能を好める者。樣々に興を添。いと面白くは見ゆる者から。紅葉の御賀の其時の維茂には比難く。其折思し出られて。義尙庭の櫻を折り。手を取て光氏を。せちに責させ給ひければ。逃れ難く立上り。いで〳〵花をくまふよと。櫻狩を只一さし。氣色斗り舞給へるに。似るべき者なく見えにけり。」彼方の座敷に數多の女。光氏の聲を漏聞。あのお窓の目隱しの。隙から那々お姿がと。立騒ぐ其内に。歌舞妓も已に果ければ。富徽の前は彼娘を。舞の衣裳の儘にて誘ひ。窓より窺ひ給へども。夕暮といひ殊には遠目。能も見えねど何やらん。打囁いて彼娘に。敎へ給へば藤の方。又若君の御事を。惡樣にや宣ふらん。など斯迄は惡み給ふ。とは言乍ら血を分し。我子と言にも非ざるに。又若君を寵愛む。己が心も怪しやと。自ら思ひ返すとは。富徽の前は氣も附ず。元の席へ立戻れば。藤の方は彼娘に。盃をさし給ふに。元來酒は好と覺敷。人も强ぬに數盃を重ね。後には强く醉しにや。舌も縺れ行儀も頽れ。足は取次に立上り。漸次へ辷り出で。袴も脫ず天冠の。曲みし儘にて臥ければ。富徽の前は溜息つき。最憂き氣色に見えけるにぞ。藤の方は氣の毒さ。



白けし座敷をくろめんと。又盃を取上て。浮世語に打紛らし。暫時をぞ移しける。

偐紫田舍源氏第十一編 終

# 偐紫田舎源氏第十二編序

實にいかさまに作り替へても。源氏まがひの繪草紙は。葵と僞る臺芋にて。其卷までは及びもなし。夕顔に至りなば。それかと寄て視る人なく。若紫の色あせて。懷かしからぬ末摘花。紅葉の賀にて狂言の。事悉盡んと推量り。既に前に引あげし。車爭ひの段にいたり。はやりたるが最悔しう。何に書つらんと思ふに甲斐なし。されば彼車の牛を。馬道ならぬ三筋町の。罾の駕籠に乘かへても。筆は走らず口は硬く。おとなしき人々は。斯くなんせそと敎ふれども。是は左樣に世に傳ふる。冊子にもあらずとて。校合の手もふれさせず。網代の些し馴顔に。物も見で綴りしなれば。表紙なども押折れ。すゞろなる簀箱のおくに。おしやられて。紙魚の御物にならんかと。中々心盡しなり。

天保五年甲午正月

柳亭種彦記

# 偐紫田舍源氏第十二編

柳亭種彦著

夜いたう更てなん。花の宴の事果ける。富徽の前は義政の。殿居に迚席を立ち。藤の方義尙も。各自歸らせ給ひぬれば。今迄騷しかりけるも。俄に長閑になりぬるに。月いと明ふ差出て。をかしき景色を光氏は。程好酒の醉心地に。見過難覺えければ。只一人り庭に立出て。藤の方の住給ふ。廊を忍びて窺ひ歩くに。人々も打憩みて。物音絶て無りしかば。寶の鏡水原の事。箇樣に思ひ懸ぬ程に。若し去ぬべき隙もあらば。藤の方へ聞えんと。立寄給へど杉生司を。語ふべき戶口も閉たり。打嘆きて人丸の。宮を拜して築山を。此方の方へ越くれば。富徽の前の住居なり。何心なく廊架に。立寄て打見れば。通口は開てあり彼殿居の留守ならん。人少なる樣子にて。奧の方のくるゝ戶も。押開し儘人音せず。箇樣な事にて世の中の。過失は爲ぞかしと。徐々昇りて差覗くに。人は皆寐たるなるべし。折



柄若うをかし氣なる。聲して扇を彈き鳴し。「朧月夜にしく者ぞなき」ト謠乍ら。此方の方へ歩み來る女あり。光氏熟々透し見るに。白綾の小袖を重ね。緋の袴を穿て居れり。あら目馴れざる姿かな。何者ならんと身を潛め。尙も樣子を窺ふと。彼方の女は心附ず。是も強く酒に醉臥。今目の覺めしと思しくて。袴は取て高欄に投掛。手を清め口を嗽ぐ。其間に光氏は。彼女の持て來りし。手拭を押隱せば。頓て其邊を尋ね巡り。人ある事を初て知打驚し氣色にて。「其處に居のは何者ぞと。問ば光氏笑を含み。「疎み給へる者にも非じ。ト少し前ににじり出。(問かしな糺の露の草の原)ト言樣に戶は押閉つ。女は胸も轟て。戰く〳〵あれ爰に。ト聲を立るを押鎭め。「予は人に許されて。常に此邊へ來る者なり。然れば人を呼たり共。夫を厭て歸はせじ、然迄に詫しと思はれそ。忍びて語らん事のあり。ト宣ふ聲も並々の。人にはあらぬ姿形。女は熟々打まもり。心に思ふ事もや有ん。只若う嬋妍て。强き心も知ぬ樣に。怖々敷は待遇さず。光氏何とか思ひけん。女を敵と突飛し。瞠乎と見やる目の内血走り。「我を誰とか思ふらん。此世を去し馬之丞。汝に恨を云はんとて恐れ多くも光氏君の。此御姿をかりの世に。何れか殘止まらん。老木の花は咲殘。若木の

蕾は先落る。老少不定は世の常乍ら。未廿歳を多くも越ず。刄に掛つて果敢なき最後。糺河原の露霜と。消しを問と言掛し。我發句にも心付ず。浮世に狂ふ淫奔者。許さん事は口惜に。是まで現出たるぞ。ト面色變つて立上れば。女は慄と怖氣立。たゞ淺ましく呆れたる。樣にて辭も無りけり。此方は吻と吐息をつき。「やよ桂木。夫婦と言にはあらねども祇園會の其時より。忍々に言語合ひ。飽ぬ別を爲たるは。酒に亂て嫉妬深く。人も知たるお家の近臣。琵琶之助が娘に似合ず。物見遊山に供人も。僅にやつして出歩き。蓮葉な身持の故ぞかし。其心だに改なば。表向より迎へんと。言しをよもや忘れはせまじ。富徽の前は自らの。姪故おん身に不便を加へ。義尙公の內室に。と陰に仰せは有乍ら。流石に予への義理を思ひ。今迄得心せざりしが。去年の夏吾儕が。糺で殺害されし時。緣盡ずして思はずも。御身彼處へ行懸り。悲嘆の淚に暮たれど。去者は日々に疎しと。早其歎きは忘果。此頃水原や白糸に。進られて世にも居ぬ。人に操を立んより。足利殿の內室と。冊かれんこと增ならめと。遂に卑劣心となり。最前彼方を透見して。遠目といひ殊に又。對の御服を召たる故。義尙君と思違へ。くるゝ戸を開置て。光氏君を引入しな。若し吾儕が生



存へて。此世に在さば其時は。汝何と云譯すると。じりゝ〳〵と詰寄られ。桂木は物をも云はず。御佩刀に手を打懸れば。扇を以て拂のけ。「此場で自害する時は。光氏君の所業なりと。御難儀の懸は必定。眞に心を改めなば。只此儘に立別れ。館の者に怪ませよ。弟と不義をせし女を。よもや兄の內室にと。重ては人も勸めず。富徽の前も此事は。思止り給ふべし。任意浮名の立ば立て。光氏君と添臥を。眞にしたるに非ざれば。予への操は立ならずや。以來後は我魂の。折々毎に若君へ。通ひて御身を慕はせ進らせ。義尙君との中をば斷ん。あれ〳〵四方に亂れ鳥。冥途の迎へ繁ければ。さらばと言捨て伏かとすれば。光氏は起上り。夢の覺たる有樣にて。四方を見れば彼女は。思ひ亂し氣色にて。淚に暮て側に有。「醉心地や例ならざりけん。思はず爰に熟睡て。何事をも知ざりし。御身は如何なる者にかある。名乘給へと言ければ。桂木は渧打かみ。(恥かしや弓張月の水の影)貞を破て二挺の弓を。引んとしたる過を。言とは光氏氣も付ず。早白々と明行ば。人々も起騷昨日の遊びの面白さに。寐忘し杯口々に。言私語きて行違ふ。氣色も知くて何事を。問はんも心慌忙しく。後に其名を知べき印に。扇斗りを取替て。立ち出給へば局々の。戸は早不殘

開渡し。光氏君が又例の。お忍び歩行と突じろひ。見咎め乍らむづかしさ。空寐を爲たるも有しなるべし。元の處に桂木は。立も立れず茫然と。御跡見送る後方より。白糸水原を誘ひて。富徽の前は立出給ひつ「義尙一人り庭に殘り。月を詠めて居る由を。是なる水原が告知し故。夫とはなしに桂木を。ト言懸て此方を見返り「何恥か敷事はない。卯月になれば打弘めて。義尙と婚禮さする。妾は昨夜殿居乍ら。其事の氣に懸り。今朝は早う引て來て。何かの事は水原にきく。と言つゝ見れば桂木が。心の裡の恥しさに。赤らむ顏をうち覆。扇は富士に三保の浦。目を留めて欻と驚き「ヤ、是は昨日御所樣が。是で舞と光氏へ賜はりし舞扇。と宣ふ側へ水原はすり寄。「どれ〳〵御見せ遊しませ。ヲ、私も慥に覺。扨は夜目にて着服の。對なを夫と見違て。此の唐戸を態と開置。引入たのは光氏樣。と呆れて徼と取落す。扇を取上げ富徽の前。衝立上つて齒嚙をなし。「言樣もない淫奔物。御愛子なるを笠にきて。兄をも母をも輕蔑。今に思ひ知せて。と無念の拳握を詰め。思はず扇の要はばら〳〵。「ア、モシ夫はゝ桂木が。言も云はれぬ我身の恥。只泣伏て居たり鳧。」光氏は館へ歸り。打臥たれど寢られず。彼くるゝ戸は何として。昨宵は閉で置たるならん。



夫に付ても藤の方の。住居は造作も奥深く。通ひ口の嚴敷も。心を用ひ下々まで。日頃規則の行屆故にこそ有らめと。淺間なりしに思ひ比べ。取換し彼扇を見れば。濃紫の色麗しく。裏の白きに猶榮あり。其色の濃方に。上にかすめる月を書て。水に寫し心ばへ。尋常たる繪樣ながら。懷しう玩弄たり。弓張月と言し樣。心に掛れば筆を取り。(世に知ぬ心こそすれ水の月)と書付て置處へ。高直御前に罷出。「私し父左衞門政則。今朝早く御所へ出。君に申し上る樣。拙者は義敎公の。御時より御三代。御家に仕へたれど。此度程に詩歌は更なり。能囃子物の音も。好調ほりて聞者さへ。寃然命を延る計り。面白かりし事は覺えず。昨日の御宴に就中。光氏公の櫻狩。予を忘れて立上り。翁もほと〳〵舞出べき。心地なんし侍ると。聞え上れば義政公。御機嫌殊に麗しく。「大内の大宴には。總て後宴といふ事あり。畏けれども夫を學び。今日も花見て遊ばんと。仰を受て御迎へに。只今參候と。聞いて光氏打點頭。「頓て我も出仕せん。先其前に問事あり。と膝元近く招き寄。彼扇を前に置き。「汝是を見知たりや。昨夜月の明に浮れ。思はずも富徽の前の。住せ給ふ廊架に。イて見入れば。白綾に緋の袴。夫に似合ず蓮葉にて。箇樣〳〵の女に逢り。館に使る

風俗ならねば。富徽の前の縁者なるべし。言を懸んと思中。眠る共なく吾儕は。彼處に倒て前後も不知。目覺て見れば、傍に侚去やらず女は居れり。然すれば左迄吾儕を。厭こも見えぬ者から。遂に其名を明て云はず。何迚言を通はすべき。様をば敎ずなりぬらんと。心懸に思なり。ト問はせ給ふも馬之丞が。世に亡魂の御身に添ひ。彼に心の留れるなるべし。高直は扇を取上げ。今宣ひし事共を。熟々思廻すに。琵琶之助の娘の桂木。昨日歌舞伎の舞をかなで。裝束の儘酔倒し。噂を聞ば夫ならんと。大方は推したれど。去年雨夜に馬之丞が。物語し事もあり。且は内々義尙公の。令室にとの御催し。其上に琵琶之助と。縁組たれば小舅の。夫こそ娘に候なれと。明々地にも言難く。「扇は見知ず候へども。惟吉諸共おん館の。歸を窺ひ見定て。扇の主の名は密に申し上候べし。ト直に光氏の。御供に從ひつ。室町御所へ參りければ。光氏も御宴の事に。紛れて其日は暮しけり。」夢の間に此如月も過行ぬ。斯て彌生の二十日餘り。光氏は晝頃より。室町の館に赴き。父義政の機嫌を窺ひ。次へ立出て茶を打呑み。休息なして居る處へ。近習の侍罷り出て。「青葉琵琶之助が家來大勢。只今爰へ罷越。若君へ此書翰を。奉つらんと最前に。嵯峨へ罷出たる處。



是に渡らせ給ふと聞。御跡慕ひて候。ト御玄關に控へて居れり。如何計らひ申さんと。言つゝ文箱差出せば。光氏は其書翰を開き。再父の前に出で。「此頃一日琵琶之助に。對面なしたる其時に。吾儕へ申す樣。我下屋敷の園の中に。花も尋常の花ならず。色美しく英は長く。世に類なき藤のあり。盛の頃に藤の花の。宴を催し候はん。必ず渡らせ給ふべし。御來駕なくば口惜と。呉々も言たるが。花も程好なりたる間。此者輩を供に連れ。今より彼處へ來れよと。迎への人を差越せたり。ト件の手紙を見せければ。義政は打笑ひ。「己れが園の英を。いと長々と褒たるは。自負顔にて可咲きぞや。類なきと云ふ藤は。赤や咲黄にや咲。早う彼處へ行て見よ。琵琶之助が妻帥は。富徽が實の妹にて。汝に付置く高直の。女房は又琵琶之助が。妹にてあるなれば。縁と云ひ殊には舊臣。よも疎略には做まじと。仰に光氏辷り出で。裝ひを引繕ひ。道行中に日は暮果。待るゝ程に渡り給ふ。琵琶之助は出迎。御乘物は此方へと。庭口より舁入させ。有難御來駕の。一禮述て土に手をつき。乘物の戸を引開れば。唐綾の羽織小袖。態とあざれて袴は穿ず。よしや作の細身の大小。蠟色に櫻の蒔繪鞘。大臣姿の娟きたるに。花の香も消おされて。輿も覺べき有樣なり。光氏

四邊を熟々見るに。實に彼が告しに違はず。藤は今を盛にて。燈籠の火を數多掲げ。宛然晝の如くなれば。殘る隈なく見渡さるゝに。磨き立たる樓閣の。造り樣の今めかしう。青葉の館と思はれず。何とやらん覺ありと。猶熟々と打守ば。三筋町の二タ見屋の。廣庭に造り花の。藤の棚を架渡し。景色を變て見せたるなり。琵琶之助は打笑ひ。「汚穢き我宿へ。如何でかお入を願ふべき。花も尋常の花ならず。色美しきと聞えしは。爰を指ての事にてあり。外は散ても猶盛の。櫻も兩木候とて。片貝阿古木呼出し。「吾儕お側に付添なば。御氣詰りにあらん間。早〱二階へ誘ひ進らせ。云付置たる御肴にて。御酒一獻と進められ。光氏も莞爾とうち笑み。「無念や汝が謀に。陷て不覺をとれり。百萬騎の大敵に。圍れしより最苦く。兜を脱で降參せり。殿して早來たれ。ト言捨二人りに誘はれ。頓て坐敷へ打通れば。枝折戸の蔭よりして。太郎高直ずつと出で。「樣子あれば此揚屋へ。今宵來れと貴殿の文通。其使と打連立。最前是へ來かゝりて。仔細はあれにて聞たるが。阿古木の元へ若君の。折々通はせ給ふのは。何かは知ねど底深き。御所存のある事にて。遊女風情の色に溺る。御本性にあらずとは。貴殿も兼て知るゝならん。然すれば君のお忍び歩きは。知ず



顏に動作べきを。何故にか此所へ。態々誘ひ給しぞ。ト問懸られて琵琶之助。默然たる顏を上げ。「血の餘とて老ての後。設たる子は可愛と。諺には言なれど。我子不愍と思ふのは。老も若きも隔はなし。桂木は吾儕が。十八歳の時の娘。和殿も定めし柏之助が。秘藏にあらうト言を打消。目に角立て尚詰寄り。「イヤ其事を聞はせぬ。光氏君に面目を。失はせまゐらせし。今宵の仕方が合點がゆかぬ。サア其譯をと焦立を。押鎮て小聲になり。「ハテ是から言ねば譯が知ぬ。一人り娘を甘やかし。異見もせぬ故桂木が。常々心に懸しが。去月御所樣の。花の宴より歸りて後。夜に紛れて家を脱出。世界に其名の轟く大德。一休禪師の元へ行き。尼になしてと願ひしかど。禪師更に許し給はず。糺の遊女地獄と言は。廓に在て座禪觀法。されば佛の道に入は。姿形に依べからずと。送り返し給ひしが。夫より只管無情を感じ。珠數を離ず魚肉を喰ず。僅な間に顏も痩。斯ては病氣になりもやせんと。蓮葉の身持を案じたる。昔戀しく夫婦の嘆き。此頃聞ば其夜さり。光氏君と廓架にて。忍び逢しと云噂。若や果敢なき夢を見て。及ばぬ事と身を嘆き。夫故の發心かと。思ふよりして今宵の催し。保養の爲と桂木を。無理に勸めて連來り。遊女や

舞子を呼集め。日頃好な揚弓の。道具を宅より取寄せて。東の方のあの二階で。遊ばせて置た程に。折を見合せ光氏君を。只何となく桂木が。側へ誘まゐらせて。娘の素振を窺ひて。窃に我へ知せてたべ。予々づくで云ふ時は。光氏君は貴殿の。妹婿なり桂木は。姪に等き續がら。其媒妁をと言ではない。若し世の噂が眞なら。異見の仕様もあらうかと。親の愚痴から起つた事。必ず笑て呉られなと。只手を合て拜まぬ斗り。賴めば太郎直高も。琵琶之助が心中を。察しやりて顔色和らげ。「夫こそは最易し。宜き様に計らはん。心を安んじ待給へと。座敷へこそは通りけれ。」西の方の高樓に。光氏は席を設け。阿古木を初め數多の遊女。藝子なんども居流れて。高欄を背中にしつゝ。琴胡弓種々に。物の音どもを調合せ。いと面白遊びしが。夜も少し更行程に。光氏强う醉惱める。有樣に動作ければ。枕薄夜衣夫々に。心を添て退つ。阿古木の外に人なれば。四下を顧み聲を密め。「去年心を付られし。玉兎の鏡は義勝公。竊に隱し置れしにて。再び家に戻りたり。又勅筆の短冊は御身が肌身に付置ば。我手にあるも同前にて。只此上は小烏丸。彼劔だに取返せば。三ツの寳は全く揃へり。心懸は御身の上。人は知じと言乍ら。足利の血筋の者。廓に置が嘆か



はしく。身受なさんと言つれど。幼時より我儘に。身を持なして今更に。武家の交六か敷と。今日迄も承引ず。夜毎に變る枕の數。末は夫婦と語合し。男のあらば媒妁せん。包まず語り聞せよ。ト言はれて阿古木は溜息つき。磯名〳〵と禿を呼び。「苦き海に譬たる。廓に浮々世を送る。ほだしと言は此磯名。今迄隱せし身の上の。昔を言は恥しけれど。豫ても知食す如く。父は母ゆゑ墮落の僧。世の交りの疎ければ。二度の煙も立兼て。妾は十四の春よりして。石卷の前齋と。いふ人へ妾奉公。此者は奥州の。郷士なりしが右の手を。くじきて刀も持難く。仕官の望みを思ひ絶え。山の姿水の流は。都に超たる景色なしと。北山邊に假住居。妾は其年姙身で。十五で產しは此磯名。かの前齋の貢にて。父母をも安く過せしが。不幸にして彼人も。世を早く過給ひ。此子を連て家に歸。行程もなく父も病死。遺物の金も使ひ失ひ。昔に增彌貧苦の上。又苦を重て母渦浪。風の心地と打臥給ひ。次第に重る樣乍ら。今は藥を參らせん。術に盡て此廓へ。身を沈めたる黄金にて。心の儘に養生し。一旦本復ありしかど。母も今では世に亡人。此子の便は妾斗り。されば今も宣ふ如く。身受なして得させんと。仰は度々ありしかど。此磯名をも諸共にと。聞え難くて

花も散。此身も恥ず憂勤。君は漸今年でお二十。妾は遙に年も長。まだ其上に此樣な。娘を持しと知給はゞ。彌厭ひ給はんかと。我あだ心の恥かしやと。磯名を膝に抱き上げ。顏をも上げず泣居たり。聞度々に光氏は。深く驚く氣色に伴し「思懸なき事を聞り。其前齋と云者は。腹こそ變れ我兄にて。義政公未だ御世を。治め給はぬ遙前。筋なき女に湯殿にて戯れ給ひて擧し御子。右の腕の利かざる故。武門の交り思ひ絕え。早世されしと云觸し。北山へ閑居ありしが。程なく眞に世を去給ふと。我も仄に傳聞り。其磯名こそ兄上の。遺子に紛れなし。此方へ〳〵と身近く寄せ。熟々と打守り。今迄心附ざりしが阿古木の顏に生寫し。容姿と云筋目と云。打捨置べき者にはあらず。此兒は今日より我に得させよ。惡き樣には計らはじ。去乍廓にありて。人も面を見知つらん。先一旦は影を隱し。成長なして呼戻し。近臣の其內にも。家柄人柄正しき者を。撰んで妻に送るべし。其忍ばせて置所は。ハテ何處にト思案を廻し。ヲヽ夫々伊勢の國。渡會郡の陣屋には。我腹心の者をおけり。是を指て下らすべし。慥御身の幼名は。いせと言しと物語。其子も伊勢に假住し。さかゆく末をみた扇。あふぐに加護の無らんや。宮居を拜すに便宜の地。心もとなく思ひな



ば。和女も共に行くがよい。併し彼處へ下るのは。未だ急ぐべき事にもあらず。只此廓をば片時も早く。立去に如はなし。幸ひなるかな野の宮の。傍らに先年。伊豫へ下りし喜代之助が。下家敷のありと聞。住荒しては有べけれど。物寂しくても暫しが程。隱れ住には其處こそ宜からめ。如何に〳〵と虛事眞。取雜言とは阿古木は知ず。「兄と添臥した女と。是より逢瀨の絕もやせん。我子の出世は嬉しけれど。又今更に引別れ。伊勢路へ下るが悲しさに。物をも云ず差俯く。光氏氣色を見て取て。「思ひ懸無き事なる故。直に返答も做兼つらん。磯名にも能云聞せ。書にて跡より云おこせ。ト云流して席を退き。二階を下りて緣側傳ひ。東の方の戸口により。打詠むれば藤棚は。此方の庭にも懸渡し。風に靡きて英の。妻戸に當るを見ん迚か。二階の障子を開渡し。人々の出居たり。顏は見えねど振袖の。模樣は目立館風。揚屋には似合しからずと。彼藤の方の住給ふ。園の事など思ひ出。佇むところへ高直は。急がは敷次より立出で。光氏の袖を引。「扇に書し月の行衞を。見定て候なり。彼二階にト指させば。「何月の出たるとや。心も空になるは迚。見上れども打垂し。簾の霞に隔りて。明白に夫と判ばこそ。光氏心や焦ちけん。其儘二階へ驅上り。「我も此家

の客なるが。連は何れも大上戸。强く酒を進られて。其坐敷には堪られず。憚り乍ら此蔭へ。暫し置て給はれ。ト衣桁に懸し小袖の裾を。引被ぎ給ひければ。桂木の腰元ども。打驚きしや顧返り。「女子計りの其中へ。無遠慮な人ではある。ト咎むる氣色を透し見るに。重々敷はあらね共。爰の廓の風俗ならず。空薫物の香滿。楊弓の矢の打散しは。今めかしき遊びを好む。女にこそ有らんずらめと。奥床敷思ひなされ。弓張月は何れならんと。彼方此方と見渡せども。彼朧夜に只一度。言葉を交しゝのみなれば。慥に夫と定め難く。彌彌醉たる樣に佯し。「狀が遣たや室町筋へ。取や違へて世の人に遣な。月の彼の樣の手を渡せ」ト踊唄を謠ひければ。「怪しうも春秋を。とり違へたるしが山かな。ト打笑ふは其心を。更に知ぬ腰元なるべし。猶倩と見渡すに。始よりして物をも言はず。床の柱に寄掛りて。水晶の數珠を爪繰。何やらん時々に。打歎く氣色するが。心え難く思はれければ。徐衣桁の小袖を引のけ。彼取換し扇を差出し。要を摘て其女の。膝の傍に投やれば。靜に女は扇を取揚。(世に知ぬ心地こそすれ水の月)ト吟じ終りて傍らなる。揚弓の弓を取揚。彼扇を打番へ。「讚ずる人は倘知ず。ト云さま此方へ射返したり。其聲は僞ひもなき。朧月夜にありければ。可咲き者から後には。阿古木があとより跟來り。窺ひ寄るに驚かれ。語も無て分れけり。(花の宴の卷終り)



○足利殿の幕下に。一色郡領持廉と云者あり。男女二人の子をもてり。兄は左京廣廉とて。義政公の昵近なりしが。色黑く髯むく〳〵と生たり迚。廣廉と云者無く、髯廉と綽名せり。其妹立田と云は。彼髯がちの兄には引替。容姿麗しく心賢く。詩歌管弦の道にさへ。疎からざる由聞えければ。是も或雲客を。立田が假の親として。忝けなくも義尙公の。內君に定りつ。其年の冬とやらん。義政公は東山の。銀閣へ移らせ給ひ。義尙公を武將と仰ぎ。彌世界無異を歌へば。富徽の前の逸早き。御心も和ぐべしと。秘めき云も有しなるべし。然ればや御世を讓られたる。其壽を申さんとて。國司郡司。皆々京都へ參着せり。彼伊豫へ下りたる。仁木喜代之助も是に付。急ぎ上京したりしかば。先室町の御所へ參り。直に嵯峨の館へ赴き。此由を云入ければ。光氏も今御所より下り、裝束も脫ざりしが。夫侍兼し此方へと。人なき所へ打招き。絕て久しき物語。思ひ出る事のみ多くて。暫く時を移しが。扨光氏の云けるは。先つ年凌晨が。舊寺にて自害の時。簾を以ての謎々は。解て

も難き富士の雪。未だ手に入らぬ小烏丸。去乍ら其有所は。慥に夫と知乍ら。劍の詮議と云なして。汝を伊豫へ下しゝは。宗入初め西國武士。宗全に加はりなば。夫を防がん爲なりしが。夫より火急の大事あり。去頃水原と云老女。數多得させし敵の密書。夫を熟々打見るに。先年亡し伊勢の國主。板畠則知が。一族未だ彼處にあり。赤松則祐則久兩人。播磨國に忍びしが。是も密に伊勢地へ赴き。より／＼味方を語らふ文體。捨置れじと我近臣の。影を隱して直に下し。渡會郡に陣屋を營み。守らせては置つれど。彼者武術は達し乍ら。年壯故に安心ならず。爾此儘華洛に駐り。妻子の迎へを伊豫へ遣はし。打揃ひなば伊勢へ赴き。彼陣屋に移り住み。怪敷事もあらんには。早速我に報知よと。仰せを聞て喜代之助。妻子を誘ふ迄もなし。某し一人發足せんと。言ふを止めて光氏は。少し面を打赧め。「方違への其時に。物越に見受しが。爾が妻の空衣とか。溫和やかなる品容貌。殊に怜悧の性質の由。是にも密に賴む仔細は。六條の三筋町に。阿古木と云へる遊女あり。家出ありし我叔母上。渦浪の實は娘。箇樣／＼の事共にて。當家の寶器勅筆の。短冊をも彼が持り。言出るも恥しけれど。我へ心を懸しを僥倖。取返さんと手を摧けど。なか／＼强愎き性質。



錦に針を包むと言んか。茨に咲し櫻と言んか。容貌とは換る心の中。彼古寺にて黄昏が。氣絶なしゝも彼が恨み。是より後も何事を。爲出さんも計り難く。如何に爲んと持厭む。折に僥倖磯名といふ。娘あり迚何時になき。涙に暮ての物語。其石卷の前齋は。我兄なりと跡方なき。僞りを言並べ。斯々拵へ置たれば。空衣を呼上せ。彼等親子を誘引せ。諸共伊勢へ下つて吳れ。磯名に不便を加へなば。我子に曳れて氣も挫けん。辛く當りて今彼が。憤怒を惹出しなば。勅筆の短冊に。過ちのある而已ならず。家の恥辱をや觸步行ん。夫故華洛を遠避る。思案は是より外になしと。在し事ども落もなく。繰返して宣へば。喜代之助小首を傾け。「开は輕きに似て輕からず。未だ阿古木は廓の內に。「されば爾が野の宮の。傍らの下屋敷を。思ひ出て其所へ。假住させんと思へども。兎に角末に承引せず。ト當惑面に顯れければ。喜代之助は故と打笑。「女は女同士とやら。仰の如く空衣を。人に知さず呼迎へ。其後事を計ふ可し。御意に掛給ふな。華洛に在し時だにも。常には住ぬ下屋敷。荒度儘に荒つらん。翌日より其邊を取繕ひ。某しは又伊豫へ。歸國なしたる體にもてなし。直に彼所へ忍び居て。折々御機嫌伺ふ可しと。日沒て後歸りけり。

二編の序にことわりし例の如く。此所は間にて以下は葵の巻のおもかげなり。

○義尙天が下を治め。世の中變りて其後は。光氏は差出て。事を爲んも懶く覺え。忍び歩行も包しう。引籠りて而已在ければ。六條の廓紮の館。其方此方に光氏が。信音絕しを歎くもある可し。然程に義政は。東山に住馴て。位に在し中とは引換。藤の方而已側を離ず。只下々の夫婦の樣に。最睦敷し給へは。富徽の前は彼所へ行。立並んで住はんも。心疚う思すにや。義尙の後見とて。室町に而已在しければ。藤の方は憚る人なう。心易氣に琵琶琴なんど。折節の遊に隙なく。義政は茶道を好み。古き器古き掛幅を。國々より求め出し。風流の座敷を造營。世に響く計りせさせ給ひつ。萬心意に足ざる事なく。最目出度は見えながら。只藤の方の生給ひし。御子を春若丸と名付。義尙己れが嫡子と披露し。生立往ば世を讓らん。其設けにて室町に。留置たれば見る事も。稀々なる而已朝夕に。戀敷思ひ給ひけり。」又空衣は夫より。告越し文に驚き。支度を調へ伊豫を立。遙々の海山越え。此頃竊に京へ着。彼野宮の近傍なる。下屋敷に隱れ住。光氏君の仰の趣き。喜代之助より委敷聞き。三筋町へ赴きて。二見屋の阿古木に逢ひ。禿の磯名を暫しが程。



伊勢の國へ誘引ん。願はくは諸共に。御身も彼所へ下り給へと。言を盡して言ければ。阿古木も兎に角光氏が。賴母しげなき擧動を。心に歎きし節と云ひ。愁ひ華洛に居る故に。偶の逢瀬はありて。却つて思ひの種ともなりぬ。幼き者を手離して。知ぬ人と知ぬ國へ。移し遣んも心苦敷。されば夫に假託て。俱に彼所へ至りなば。光氏の音信も。顏見る事も絕果て。却つて辛苦もなからんかと。心の中には思ひながら。初にも言如く。疑ひ深き性質故。年の明て此廓を。出るも程なき事なれば。只此儘に捨置てと。承引氣色はなかりけり。」光氏は二葉の上が。年頃心の打解ぬを。最憂事と思ひしかば。去頃ふと心付。玉兎の鏡の裏を摺り。守護なりとて贈り置。自らは彼鏡を。肌身に添て居たりしかば。其奇特にや彼方より。睦敷譚ひより。恨みがま敷事をも聞えず。今こそ漸々親々の。許し妻の思ひして。心易くやなりつらめ。光氏は赤松の。館に而已有けるが。此程より二葉の上。心苦しと打惱み。萬に付て心細氣の。形容に見えたりしが。月を重ねて其事しるく。疾病は漸次に怠ければ。光氏は珍敷。嬉き物から初産は。取分大事のとなりとて。加持祈禱などせさせつゝ。早腹帶の祝ひも近き。卯月中旬の事なりしが。朝疾起て光氏は。二葉の上に

打向ひ。「今日は中の酉の日にて。加茂の御生の祭りなり。奉幣使警固の爲。時の武將も馬にて打せ。渡り給ふが舊例なれど。義尙君は去頃より。御心地常ならず。させる事にはあらざれど。名代として某しに。參れよとは豫ての仰せ。去ながら和女の惱み。心元なく思ふが故。今迄御請せざりしが。昨日今日は取分て。顏色も常に變らず。心地快げなる容體なれば。我は彼所へ赴きて。夕暮には歸らんと。言慰さめて出給へば。四邊に候ふ女子共。御見送にと立上り。稍程ありて御前に歸り。當吉中垣なんど云。二葉の上の氣に入の。腰元共が口々に。「光氏樣の御服を召換。御馬に乘たる其立派さ。御小袖の色御袴の。紋柄の御好迄。人に優りて美麗く。御馬の鞍の梨地より。御顏がてら〳〵光る君と。誰知ぬ者はない。此中垣も御警固の。御行列を拜見に。今日晝からのお暇を。豫々願ふて置たれど。成ふ事なら貴所樣の。御供を致して參つたら。ト言ふを當吉引取て。「只今彼が申す通り。私し共が連立て。人に隱れて密々と。見上申した許りでは。張合もなく栞もない。サア御支度を遊ばしませ。舟漕男や山賤迄。遠い國から女房や。子を連て來る者さへある。夫をマア御正室の。貴所が御覽成れぬは。餘りと云へば本意ない事と。勸



められても常にさへ。物見遊山は嫌ひにて。進みて行ぬ二葉の上。況て此頃惱ま敷。只ならぬ身に有りければ。思も懸ぬ風情にて。只打笑て返答はなし。母小毬は物影にて。私語言ふを聞取てや。しとやかに立出つ。我子ながらも主人の内室。手は仕へねど慇懃に。「御心地も宜敷樣子。如何にも彼等が言通り。女子許り連立ば。道の程も淋敷て。面白い事もあるまい。御乘物を靜やかに。舁せて御出成れたら。却つて御氣も霽まして。御保養にも成ませうと。言れて漸々二葉の上。「夫なら髮を揃へてと。仰せに皆々打喜悦。夫御鏡臺御手水の。御湯を早うと言もあり。彼是衣服を撰出し。伏籠に伽羅を焚もあり。或は御供を觸流す。俄の事故上を下。稍時移りて支度も調ひ。豫ての設けと見せざるとて。付々の女供は。さまで衣裳に綺羅を飾らず。二葉の上の乘物へは。かべしろをりて引廻し。誰共知さず練出す。實に其日の賑ひは。一條の大路さへ。過る道なく立騷ぎ。所々の棧敷は。心々に架渡し。今日を晴と着飾りし。小袖の模樣帶の綾。夫さへも能き見物なり。兎角爲す間に日もたけて。二葉の上の乘物は。宮居近く往きたりしが。此所には猶人目を忍ぶ。彼方の奥方。此方の娘。乘物の内より見んと。蒔繪鋲打天鵞絨包み。麗びやかに引續き。二

葉の上の乘物を。立可き隙のなかりしかば。先に進みし侍ひ共。夫々と指圖して。差除さする其中に。戸無駕籠とか言習はす。莚を垂て窓めく所に。簾を懸しが二挺あり。窶れたるけはひに引換。黜れ出る小袖の裾は。金銀の糸持て縫。華麗なる模樣に白綾の。褄を重ねて淸らかなり。是は彼二見屋の。阿古木が日頃の物思ひを。慰めんとて出たるにて。今一挺は片貝と。禿の礒名が合乘なり。二葉の上の先走り。夫見苦し取除よと。言ども廓の舁夫は。更に立去氣色もなく。醉過たる上にやあらん。から〱と嘲笑ひ。「譜代の主人の大切も。一日乘たる旦那の大事も。さまで變りし事はなし。此駕籠ありても往來の。支障といふにもあらじ。向ひの方を通られよ。と口強くて手も付させず。侍ひ大いに打腹立。「誰とか思ふ今日の御警固。光氏公の內室なるぞ。神事の場に非ずんば。斬捨にもす可き奴。辛き目見せて追拂へ。と大勢一度に取卷たり。大人しき老臣は。眉を顰めて聲を懸け「此方とても忍びの御出。手荒くすなと。制すれ共。速り雄の若侍ひ。更に耳にも聽入ず。彼廓の舁夫四名を。思ふさまに打擲なし。猶倦足ずや思ひけん。戸無駕籠の垂も簾も。寸〱に引ちぎり。誰彼知ぬ傍らの。乘物の屋根へ打懸。動搖を作つて哄と笑ひ。繁りし森の



片蔭へ。二挺の駕籠は突入て。二葉の上の乘物を。守護して靜に打過けり。打擲れし舁夫共。猶懲ずまに追んとするを。駕籠より轉び落たる片貝。慌忙惑ひて引留め。此方を見れば阿古木の乘し。駕籠は棒さへ押折られ。言べき言も淚に暮。唯うろ〱と正度なき。礒名を膝に懷き揚。吐息つくより詮方なし。阿古木は人にも知れし身の。顏凝視らるゝも羞ヶ敷。又悔敷も身を震はし。何の爲にか來つらんと。思ふに今更甲斐もなく。繁りし樹立に隔てられ。練行祭祀は見え分ず。されば此儘歸らんと。すれども前は人込にて。通り出ん隙もなし。猶豫中に祭祀は濟みぬ。光氏君の御歸に早程はあらじ抔。邊りの者の言を聞き。流石に辛き其人の。御前渡りは見ま欲く。心弱くも待にけり。」光氏は事果て。靜に馬を乘出す。近習の者さへ花やかに。容姿を目映整へ。世に傳かれ給へる樣子。木草も靡く風情なり。是れを見んとて都鄙の老若。或ひは覆面市女笠。壺折姿なんど言ふ。賤しからぬ婦女もあり。或ひは世をも背ける尼の。群集に壓れて押倒され。打轉びつゝ物見るは。形にも似ず惡さよと。常には人の言めれど。今日は實に道理ぞと。咎る者も更になし。襤褸を纏ふ賤の男迄。己れが顏の曲むも知ず。打笑つゝ手を合せ。額に當て拜むもあり。光

氏更に目も懸ぬ。田舎武士の娘さへ。心の限り粧ひつ。六尺袖ひらめかし。棧敷の端へ立出て。熟々と打見るは。見んとや思ふ見られんとや。思ふ心の中の可笑く。彼方には駕籠の戸を押開て。花美染の裾を故と打亂し。此方には簾を捲。若き婦女の寄集り。聽惡き迄取々に。噂をしつゝ愛あへり。光氏は何事も。知ず顔に打過れど。立渡したる乘物の。簾の隙間を尻目にかけ。打微笑つゝ見るもあり。赤松のは殊更に。夫と著くて暫時が程。馬を駐めて立給へば。御供の人々は。皆々頭部を地に付て。打畏まり控へたり。光氏は微笑と笑ひ。「今朝出つる夫迄は。何の用意も無りしが。思ひ掛なく能是迄。彌々氣色の能なる可し。跡より靜に歸られよと。まめだちて渡り給ふ。遙か隔てし森の蔭。宣ふ事は聞えねど。阿古木は見るに堪兼てや。恥も人目も打忘れ。裳の土に汚るゝも。厭ず其方へ二足三足。歩行出てすつくと立。「二葉も君とは從弟同士。妾も同じ事ながら。父は果敢なき破戒の僧、孝行故とは言ながら。終に此身も世に零落。遊女となりし悲しさは。言ば家來に等敷者に。乘たる駕籠を打破られ。恥辱見せられたる無念さよ。突入られしは森の蔭。木草も繁る笹の隈。簸の隈川にあらねども。今若君の駒止て。暫時の間しめ〲と。二葉の上



の傅きには。何歟仰の有ながら。妾が方は影だにも。見ずに强面過給ふ。添臥したるは變らねど。定まる妻と仇枕。身の憂程を思ひ知る。其報いには二葉の上。其方にも思ひ知せんと。人目も包まずはら〱と。涙溢せば片貝が。「お腹の立はお道理ながら。此所は遙に隔れば。光氏樣の御心の。付かぬのは御道理。よし又夫と御存でも。是此樣に蓮葉な姿。彼方は御馬で御行列。人の思はく御供の手前。何樣に思ふても。御辭はない道理。此樣に申しては。御氣に障るか知ねども。今被仰たは實のお僻。サア〱お歸り成れませと。言慰めても茫然と。阿古木は立て藻拔の殼。窮鬼とか言ふ物の。此時よりして二葉の上に。附添行とは我も知ず。人は猶更しら綾の。裳の塵を打拂ひ。亂れし衣紋掻整ひ。甲斐〱し氣に片貝は。阿古木が姿を引繕ひ。駕籠に乘んとなしたりしが。垂も簾も引放ち。傍らの乘物へ。打懸て有ければ。「何方かは知ねども。最前より御乘物が。是に下して有たれば。容子は言ずに御覽の通り。荒くれ敷物を打掛。御乘物を汚せしは。此方の業ではなけれども。定めし内へも塵埃。お氣の毒やと詫ながら。取んとすれば聲懸て。「イヤ先待つてと乘物の。戸を引明て立出るは。賤しからざる老たる女。「思ひ懸なき事共にて御難儀察し入ま

した。破れしながら其方のは。取繕はば乘もせん。此方は屋根も微塵に砕け。お歸りの用には立まい。とあつて町の女中と變り。廓模樣の華美姿。三筋町へは遙々の。道の人目も煩はし。慮外ながら妾が駕籠で。送らせて參らせん。必ず氣遣ひし給ふなと。やがて阿古木が手を取て。磯名諸共乘物へ。移し載て樣々に。介抱すれば片貝は。夢見し心地嬉敷て。「お近付でもない者を。思ひ掛ない御信實。モシ。御禮を被仰てと言ど阿古木は只呆然。老女は莞爾打笑ひ。「取逆上て御出の樣子。先其儘に〳〵と。押止めて供人に。夫々と差圖しつ。毀損れたる戸無駕籠。假に縄もて結びつけ。漸々に繕はせ。片貝を夫に乘。其身は跡に引殘り。心靜かに歸りけるとぞ。」光氏直に室町へ赴き。今日の神事恙なく。濟たる由を言上し。退出んとし給ひしが。今日の祭を忍びやかに。見物したる腰元ども。とある所につどひ集り。其事此事姦敷。物語るが不圖耳に止り。前の神事の棧敷より。物騒しげなる渡かなと。立止まりて居給ふに。窓より扇を差出し。光氏を招き寄。「此所にやは休憩給はぬ。御坐を設け侍らんと聞えたり。打掠めて言たれば。聲は誰共聞分難く。扇に見知のあらんかと。引寄て見給へば。『(身は燃れ人のかざせる葵ゆゑ)。今日の人に代りて』とあり。



句の意は更に分らねど。手跡を態々思ひ出れば。彼水原に紛れなし。猶若々敷身を持なし。眞實の心を覺れなと。去頃致置きたる故。御簾の葵の根もなき事を。戯れに言つるならんと。扇を其儘投戻し。誰にあふひを願ひやすらん。高直か。片攪かと。仇なう言捨て。歸らんと爲給へば。水原は其儘走り出。「浮たる事には侍らず。密に申さん事のあり。暫時が間此方へと。人なき所へ誘引けり。

修紫田舎源氏第十二編 終

# 偐紫田舎源氏第十三編序

山名蟹澤入道千句連歌の序に。「扇の繪に女のかた畫たるを。源氏の意か伊勢物語の。意かと疑ふ事ありしを。花鳥風月といひけん巫女。梓によせて問しかば。六條の齋宮の母。御息所と名のりて。あらはれたりといふ事は。無下に近き作り物語なるべし。」といふ事あり。是序は康正二年に。桃華老人の書せ給ひしなり。この花鳥風月と題冊子。今もまれ〳〵に傳はれり（大本慶安三年印行小本貞享年鱗形屋板）こゝに宣ひし如く。花鳥（姉なり）。風月（妹なり）。といふ神子をまねき。繪を梓にかけて問とき。業平。光源氏。物語にも見えたる女房ども。かはる〴〵神子にうつり。種々の問答し。傍に掛置きし。鏡に人々の面影の。あらはるゝといふ事を綴たり。按にこの二種の物語の大意を。兒女なんどに知らせんとての業なるべし。されば此の卷の「物怪。窮鬼等いふもの多く出來て。種々の名のりする。」といふ條に。彼花鳥風月の。神子をかり用ひたり。こゝにそれを理るは。田舎源氏の註釋めきて。最烏許のわざに似たれど。四百年に近き古書の。花鳥風月の反古になるが歎

はしく。いはゆる老婆深切なり。

天保五年甲午春

柳亭種彦記



# 偐紫田舎源氏第十三編

柳亭種彦著

斯て水原は光氏の。膝元へ摺寄て。聲打密め言ける樣。「妾しも忍びやかに。今日の祭りを見物せんと。一條の大宮なる。馬場の邊りへ往たりしが。處もなく立込て。暫時駕籠を立煩ひ。漸々にして一叢の。森の後に乘物を。駐て居たる其前に。二挺並べて下したるは。町の者が物見遊山に。乘歩行戸無駕籠。折節に二葉樣も。其所へ御駕籠を向られ。差出てある戸無駕籠が。御邪魔に爲る迚。御家來が。制されても道を知ぬ。駕籠舁共は口答へ。憎い奴めと打擲れ。二挺の駕籠も粉微塵。垂も簾も引ちぎり。妾しの乘物へ。打懸て御同勢は。其處を過て向ふの方に。居敷てお在の時。貴方樣の御歸り。彼破られたる駕籠より出しは。六條の傾城にて。怨みがましき獨言。乘物の中に居て。心を注て能聞ば。忍び〳〵に通ひ給ふと。世に噂する阿古木とやら。今日の人とは其人に。替りて只今妾しが。書て

御目に懸たる發句。人の翳せる葵故。御正室の二葉樣。夫故胸を焦す者の。ありと言ふのを餘所ながら。御報知申すに御心の。注ざる容子は最前の。事をば知し召ざるならん。夫より阿古木は妾しの。乘物にて三筋町へ。送らせ遣て候が。其程々に御不憫懸。人の恨を請ぬ樣。御用愼を遊せと。彼駕籠の爭ひを手眞似仕方に打倣ひ。聞え上れば憫然う。心に思ふか吐息をつき。「二葉は言辭多からず。何事をも打鎮め。すげなき樣に見ゆれ共。情けも恥も知る者なり。此光氏が由縁ぞと。夢程なりと知るならば。如何でか强面事をせさせん。夫とは心注ず共。互ひに忍ぶ物見の場。左程手荒き擧動を。打捨ては置間敷が。速り男の若侍ひ。彼が制止を用ぬなる可し。阿古木は流れの女ながら。昔はよしある者なりと。姿の花美に引換て。打上りたる心の中に。嘸口惜しと思ひつらん。伊勢へ下す妨げに。爲もやせんと打咳き。歸らせ給ひけりとなん。」わざと日を經て光氏は。晝下る頃よりして。三筋町の揚屋へ赴き。何氣なき風情にて。彼阿古木を招きけるが。心地惡とて引籠り。家内の者にも逢ずとて。片貝が出來れり。其日は少し夏めきて。光氏は緣の端に。立出て居たりしが。片貝を近く招き。病氣の體は如何ぞと。密かに問給へば。片貝は打萎れ「些少



の事をも心に懸。物案爲給ふが。阿古木樣のお性質。夫が嵩じてお煩ひ。元はと言ば貴方から。年も遙にふけた上。浮節繁き川竹の。流れに沈み果たる身。末長うお情を。懸ては所詮下さるまいと。思ひ切ては居給へど。今更に振離なれ。伊勢へ下るもお心細し。可愛人の秋風に。吹立られて散行しと。世間の者の笑ひやせん。去迚何時迄此廓に。住果んとは猶思さず。起ても寢ても其事計り。比喩ば釣する浮の樣に。彼方へ流れ此方へ漂ひ。お心が浮て居て。定まらぬ故彼御病氣。其慰めに立出し。加茂の川浪荒き瀬に。立騷いだる事よりして。最ど憂世に倦果しと。亂し儘にて髪をも揚ず。闇き閨に引籠り。そゞろ言のみ宣ひて。更に正度も侍らず。ト語るに光氏眉を顰め。「先試みに某しが。阿古木の心に爲て言ん。磯名に着て伊勢國へ。我下らんと言たり共。光氏こそは止む可けれ。然るを却つて勸めしは。夫を機會に疎ま敷。我を遠くへ追遣ん。手術と彼が思ひしならん。其事和女に言つるかと。問せ給へば片貝は。打笑て只點頭つ。光氏猶も膝を寄せ。「夫こそ心の僻さ言め。父もなく親戚もなき。壹人の我子に數ならぬ。我身を爭で見代んと。思ふよりして斯は言つ。嵯峨の住家へ迎へんは。元來易き事なれど。館の女の交際は。物六かし迚承引

せず。華洛に長く居んと爲らば。何所にもあれ阿古木の望みに。任せて家をも造らせん。夫等の事を心に懸ず。氣の保養こそ専一なれ。能傳へてと口には言へど。兎に角阿古木が直ならぬ。心に倦じて嵯峨へ歸り。例の心慰さめに。西の亭へ赴きつ。紫が美しげに。粧ひ立て在するを。打笑て招き寄せ。「あら髪の婀娜さ。常よりも淸らかに。見ゆるとは引換て。額も襟も産毛の儘。幼稚時より剃刀の。嫌忌な性質と言の葉が。常々噂に言たるが。未だ癖の直らずや。爪取よしと暦にも。記して今日は吉日なり。髪を分て中剃も。剃ねば逆上て病ひも發り。髪も嘸かし結惡からん。皆の者をも思ひの儘に。つくり立て遊ばんと。言つゝ此方を振返り。女中衆〳〵と。呼立給へば言の葉小弁。訝しながら諾と答へ。出れば光氏打笑ひ。「今呼たるは紫の。御附の女中の事にてありと。犬吉初め合手の童。皆打集め言の葉に。夫々と差圖して。芥子の殼めく些少なる。髪へ髢の添を入れ。片外しに結直させ。又は長き前髪の。先を削で二つに分け。額に佶と角を入れ。若衆の如く作らせつ。或は雀の尾に縫で。下髪の可笑氣なる。袴を穿せ裲襠を着せ。童の姿に似合ぬを。打見やりつゝ興に入。紫は我手づから。額を埀て粧はんと。剃果て髪を解分。「餘りなる迄多き事



よ。翠と賞柳に稱へ。最長きと言ふ人も。額髪は少し短く。後毛はある物なり。其條もなく揃ひたりと。剃惱ひて打眺め。暫くして中を押分。程よく切て剃果つ。是にて結能く爲りつらん。言の葉ソレ。と件の髪を。渡しながら光氏が（生行ば我獨見ん柳哉）と聞へ給へば紫も（青柳や定めぬ露の落所）と見するともなく。鼻紙へ書付て在するさま。早人の妻めきて。見ゆれど年の若ければ。あどけなうして愛らしく。箇樣なる串戲に。世の憂事を打紛らし。程なく夏も過行けり。」夏の末には二葉の上。心地爽やぐさま爲りしが。秋風立て打返し。此頃太く煩ひければ。父母は言も更なり。高直夫婦誰々も。打歎く事大方ならず。光氏は初より。睦ま敷中にもあらねど。彼御鏡の德にや賴けん。漸々に心も解。且只ならぬ身と爲て。夫よりの患みなれば。心苦しさ限りなく。初子の顏を安かに。見せしめ給と神に祈り。思ひ歎きて赤松の。館に而已明し暮し。時々ならでは嵯峨へ歸らず。忍び歩行の事なんどは。久敷絕て看病に。心を用ひて側に附添。二葉の上の體を見るに。是尋常の疾病に非ず。物の怪の業ならんと。我も思ひ人も云へば。先彼が身に添ふは。誰かの怨みト言を知り。其後驗者に言附て。追退けんと心を定め。大原に人を使はし。梓神子二

人を招けり。此二人は姉妹にて。姉の名を花鳥といひ。妹を風月と呼なして。華洛に知ざる者もなく。不思議を顯す巫なり。扨姉妹はしとやかに。二葉の上の容子を伺ひ。一間所へ退くにぞ。光氏は彼所へ立出。四邊の人の漏聞ば。能らぬ事も有らんかと。腰元共を遙に遠避。いで〳〵語れと宣へば。二人の神子は心得て。神下ゝとか言ふ物を。さら〳〵と言終り。梓の弓を打鳴し。目を押眠りて居たりしが。人の魂や移りけん。風月は涙を浮め。光氏を打眺め。「妾は元來覺悟して。此世を逝ば夢程も。人を怨ん筈はなし。まだ其上に有難き。清水寺の法の聲。跡弔ひて給はれば。天道に果を得ん事。近くにあれど淺ましや。また絶難き輪廻の覊絆。御顔ばせの見ま欲く。恐多くも二葉樣の。御身に添し今迄の。科を免して給はれと。打泣聲色容ちさへ。此世に再回黄昏が。生れ出たる心地して。なつか敷や思しけん。光氏は目をしばたゝき。「和女が生たる娘ありと。臨終に母の物語。何國に居るか報知てと。問せ給へば差俯向。「今申さず共其行衛は。後には知ろし召事あらんと。猶何やらん言んとするを。姉の花鳥が突除て。目の中血走り息を吐き。「己れが罪己れを責。人を怨は道ならねど。二葉の上の煩ひは。弱目に乘て出來れり。人たがへなり過ちすなど。



其時聲は立たれど。夜着にて口を押へられ。聞えざりしや一刀に。差貫されて無慘の最後。元はと云ば爾の母。御寵愛を笠に着て。餘りと云ば蔑視。其無念さに唐土の掛金。括し紐は文車の。廻る因果に有ながら。親戚の者も絶果て。香華手向る人もなく。地獄の苦患止時なし。あら苦しやとかつぱと伏す。光氏更に合點行ず。「して〳〵和女は何者と。慌忙敷尋られ。神子は再回面を揚「名にも似ず夜こそ萎め晝顏と。言しは妾が事なりと。只呆然となし居たり。風月は入替り。「妾は荻に置露の。消えたる魂にはあらざれど。君の爲とて直ならぬ。曲む心の弓取に。強い悲い枕添。思ふ中をば中川の。水の逆さに流れ行く。野越山越海を越。今迄遠く隔りし。唐の鏡は歸來て。見ゆる時も有乍ら。憂名もよしや蘆垣の。近き邊りに住ながら。徐との風の音信も。なくて過行果敢なさを。不憫と思給はれと。口說立れば光氏は。夫ぞと思ひ當りけん。打點頭てぞ居給ひける。是より姉妹交る〳〵。或は謀叛を企て。打滅亡され政則に。怨ある者の類ひ。或は母の小毬が。まだ若き其時に。悋氣よりして科もなく。追拂ひたる女なんど。此程より二葉の上を。惱せたる窮鬼。多くの物怪出〻り。種々に名乘しつ。皆立去て二人の神子は。我身に戻り姿を改め。光氏に打

向ひ。「只今迄は何事を申したるか妾し共は。聊か覺えはなけれども。此弓の弦音に。曳れて寄來し人々は。さまで怨も深からねど。御身の弱りに添たるにて。皆重要敷者にはあらず。玆に一つの御大事。申すも恐れ多けれど。正室樣の御容體。先程熟々伺ふに。なか〳〵梓の弓にも乘ず。只御身に附添居て。さまでに苦敷目をも見せねど。又片時も離れやらぬ。一つの物の侍るなり。執念き氣色顯はれて。朧氣ならぬ窮鬼。此生靈は妾し等に。なか〳〵移るさまならねば。年の程方角も。確かに夫と指難し。御心當りも侍らば。御言宥め遊ばせと。やがて暇を乞ければ。卷絹結綿數多の祿を。取せて神子を歸しけり。」光氏は夫よりも。德高く名の聞えし。僧を請じて祈せければ。彼重要しからざる生靈。死靈も大方退きけれど。梓神子の言しに違はず。かの一つの窮鬼は。二葉の上に附纒ひ。言辭少き常には引換。分ちも知れぬ漫言を。言雙べては打笑ひ。又終日に物言ず。何事を按ずるにか。熟々と打泣て。節々胸を堰揚つ。アラ堪難やと口には言ねど。苦敷容體の顯れければ。斯ては如何ある可きと。小毬は見るに悲敷。少し疾病の怠りし。容子を窺ひ腰元共を。密かなる一間に集め。四邊を憚り聲を潛め。「二葉の上の御患み。生靈の業なりとは。宣ふ事にも知るゝ故。占方の上手を喚び。占なはせても確乎に指し。聞え當る事も無し。光氏君を戀慕ふ。婦女の怨みと思はるゝが。誰で有ふか心々。包ず言て見やいのと。問れて當吉進み出て。「我君樣の御通ひ所。此所彼所と言ふ中に。糺に御出の稻舟樣と。言懸るを中垣が。「否々彼方は御器量の。惡い上に愚鈍敷。御性質と云取沙汰なれば。何も夫では無さうな。疑は敷い彼嵯峨の。御館へ名も知さず。御迎成れた彼婦女。一人に御不憫を。御懸遊す世の噂。夫が若やと紫が。年最若く添臥も。まだせぬ中と知ざれば。私語騷ぐを高直の。妻篠淸は次の間より。立出で押止め。「誰が聞まい物でも無い。密に言やと母の側。摺寄て手を仕へ。「只今皆へ御尋に。就て妾が心當りは。加茂の祭祠の折柄に。二葉樣の御召成れた。御乘物の妨げと。打破られし戸無駕籠。乘て居たのは阿古木とて。六條に名高き遊君。忍びく〳〵に若君の。御情受し者の由。高直殿の侍ひが。其時彼所に在合せ。始終りを見たりしが。此者は若君の。御供に就て六條へ。行たる事も侍る故。阿古木の顏をも能覺え。憫然とは見乍らも。詮方なさに知ず顏。作りて居たと物語。數多の人に傳かるゝ。正室樣の御威勢。羨まし敷と我駕籠を。打毀されし無念さと。凝固りし其思ひが。懸るまい物でも無

い。御心を添られませと。聞て小毬片頬に笑。「氏素性も無き流れの身。黄金を積ば思はぬ人をも。思ふと見するが遊びの習ひ。若君様も一花の。眺めに散て御心の。何迄殘りて在すべき。彼方は毎夜に替る枕。夫程深き執念の。遊女に在ん道理はなしと。思ひも寄ぬ形容にて。物語を外へ移し。「先程其方が持參した。蟲籠。御菓子。秋の花。種々を差上しに。御紛れに爲て能と。殊の外なる御喜悅。今すや〳〵と御睡眠。御目が覺たら御容子を。御前へ出て伺やと。引連奥へ入にけり。」阿古木も心地常ならずと。引籠り居たりけるが。久敷廓に時めきて。主人も彼故年々に。多くの金を得たる上。年期の程も纔なれば。心の儘に遊せて。客を迎へる事を勸ず。閑雅なる所へ移らば。氣の保養にも爲る可しとて。鞍馬の野中の別莊へ。此頃送り遣たる由。光氏仄に傳へ聞き。彼篠清が小毬に。言つる事は知ざれど。二葉の上の煩ひは。若や彼が怨恨かと。光氏も心の中に。豫て疑ひ居たりしかば惟吉計りを供に連。思ひ起して野中の里へ。至りし頃は秋の日の。早西山に入果て。最闇う爲たれど。一度通ひし道なれば。覺えある流れに添ひ。確乎に此所と内を見やれば。節能も片貝が。門の邊りに佇み居て。「如何なる風に吹れてか。此方へ靡き給ひしならんと。



直に打連入ければ。案内を乞ふ迄もなく。頓て臥房へ打通り。阿古木の體を熟々見るに。左迄姿は衰へねど。物思ひの亂れにや。目は打潤み鬢の毛の。そゝげしをも取揚ず。此方を見遣て言辭もなく。涙をほろりと翻しゝ樣子の。憫然思ひ成れ。近々と傍に寄り。「心地は如何に在するぞ。往日よりの。和女の惱み。知ざるにては無れども。二葉の春の下旬よりして。何と無く打患み。些少怠る容體なりしが。此頃又も打返し。最困し氣に侍るなり。彼は元來心に叶ふ。妻と言にも有ざれど。其親達の事々敷。歎かるゝを見るからに。振捨ても出難く。其上に此鞍馬は。旅めきて遙々の。道の程には若し人の。目に懸らんかと忍ば敷。夫彼に打紛れ。心の外に音信も。爲ずして過たる我罪は。免してよやと懇切に。語ひ聞え給ひければ。阿古木は涙押拭ひ。「二葉樣の御煩ひ。夫故問ぬと被仰るは。又例の假託種。とは思へども六條に。換りて遠き別寮迄。尋ね給ひし嬉しさよ。能御心に染ずとも。彼方は正敷御正室。殊に今では御懷姙。御大切に遊ばして。外へとては御心の。移ぬは無理ならず。夫を待のは我ながら。魯鈍さよと此頃は。斷念て居る物を。中々今宵の仰せにて。物思ひや增らんかと。顏を背けて常よりも。心苦敷其氣色。乘たる駕籠を打破られ。

無念に思ふも道理と。思へば哀れに見成れて。「二葉が病氣の日に添て。快愈爲往ば度々も來らんが。彼が患みは生靈。物怪の類ひにて。最困し氣に侍るを。引放ちても出難く。和女の父の寂寞阿闍梨の。靈等と言ふ者の。有れどもさして徴もなし。夫は元來根なし事。嗚呼何物の業なるかと。先打かすめて何となく。心を引て見給へば。阿古木はにつこり打わらひ。「何の怨みもなき父上。其靈魂が正室を。苦しめ給はん所謂はなし。夫こそ妾が業ならめ。此年頃は憎し共。さまで思はで居たりしが。果敢なき駕籠の爭ひより。心動きて此怨み。何の世にかは晴さんと。只呆然と物思ふ。我魂ひのあくがれ出て。二葉樣に添行けんと。思ひ知らるゝ事のあり。此身は此所に在ながら。終ぞ見もせぬ赤松の。館の容子は能知れり。一昨日昨日と打續き。東山より御見舞。折の菓子を二葉樣が。三つ取てきこし食。跡は御厨子の二重目の。棚へ乘て置給ふ。其前の日の華桶に。挿たのは桔梗と龍膽。お床の左に今朝もあり。又正室の母上と。見ゆる人がくよ／＼と。義政公より絶間なく。御使ひの度々に。御祈禱の事さへも。仰せ給はる辱けなさ。夫に付ても最惜き。身なれば隨分養生して。快方なりてよと。打泣側に腰元共。世の中に二葉樣を。惜まぬ者は一人も



ない。其思ひでも遠からず。御本復遊ばすと。打私語しは昨日の夕暮。嗚呼淺ましきは此阿古木。母は氏ある人にもせよ。今は廓に此勤め。只身一つの憂歎き。夫より外に世の人を。惡かれ抔とは思はねど。前にも既に聞えし如く。駕籠の簾を引ちぎり。恥辱見せられたる祭りの後。只一節に世を憂しと。思ひ浮れし其心。鎮まり難き故にやあらん。打睡眠ば其夢に。彼正室と覺敷人の。最淸にて在する所へ。往かと思へば常々に。變りて心猛々敷。彼正室を引寄て。打かなぐる事度々なり。此拂曉に見し夢も。彼所へ往て正室の。顔熟々と眺れば。頻りに嫉く又例の。ひたぶる心發り來て。襟髮取て膝に押付。ひきまさぐると思ひしが。妾が袖に正室の。挿給ひし簪しの。引かゝりて傍らへ。戞然と落る音に驚き。目覺て見れば夢なれど。其の簪しは是れ此所の。枕のもとに現にあり。是にて侍ると取出すを。光氏手に取打見れば。二葉が好みのかざし草。疑ひもなく夫なれば。身の毛慄然て物をも言ず。阿古木は又も涙に暮。思ひより外なる物は心にて。此身を捨て我魂の。彼所に浮れ往つるか。現ともなき折々の。あるを怪敷思ひしなり。さまで無き事をさへ。言立るは人の口。況て此事世に洩なば。善なき名をや立られん、死ての後に怨を殘し。人

か苦しめ坏するは。物語にも見えたれど。夫をだにも罪深き。あな怖ろしの心やと。笑ひし者が淺間しや。其身は此世に在ながら。さる疎ま敷事をして。人に嘲り譏らるゝは。過世の業にや侍らん。とは言ながら夢に往。夢にて人をさいなむは。思ひ止る樣もなし。強面君に露程も。心を懸じと愼まば。自らに止もせん。嗚呼夫とてもうたてやな。是より絕て思はじと。思ふも物を思ふなり。父を失ひ母にも別れ。便りにす可き者もなく。子は有ながら只一言。母と呼せし事もなく。年比萬憂きと言ふ。憂きは此身に積たれど。斯迄つらく悲敷事は。今迄覺え侍らずと。淚に其身も浮ばかり。歎けば聞居る光氏は。憐れとも怖しとも。心地迷ひて默然と。差俯向て有けるが。兎にも角にも言宥め。阿古木が心の和ぐ時は。二葉の上の煩ひは。自然と平癒爲す可しと。言辭を盡し理を盡し。種々に言諭し。思ひの外に秋の夜も。明るに近き鐘の聲。さらばとて別れを告。立出玉ふ朝朗に。此所は人目もあらざれば。阿古木は髮をも取上ず。亂れし姿の儘ながら。片貝に手を引れ。枝折の戶口へ立出つ。駕籠をつらせて步行路より。歸らせ玉ふ御形容。つれ〴〵と打見送り。猶振離れて伊勢の國へ。下らん事を思ひ返し。只茫乎と佇みけり。



著者曰。本編に出せし篠淸は。柏木衞門の母上四の君に比す。源氏物語の行狀の委しからざる人故。此草子にも稀々ならでは出さず。

○二葉の上の日每の苦み。阿古木の怨といふ事を。館の者は知ざれども。生靈の所業なりとは。其狀著く顯れければ。世に知れたる驗者を多く。赤松政則招き寄せ。云々の由を告げ。祈禱の事ども依賴ければ。驗者は各自口を揃へ。さばかり執念生靈は。容易は退かず。彼方を調じて命を取。此方を助け參するが。是法の習慣なりとて。頓て護摩の壇を構へ。北に向て本尊を懸け。荊棘のある華を供じ。男木女木の燃立中に。けわんのけしを打燻れば。其薰り一間に滿ち。火は飛散煙りは閣く。振立る鈴の音。凛々と響き渡り。如何なる天魔の所爲なりとも。降伏す可くぞ見えたりける。光氏一人は阿古木の思ひと。確乎に知ては有ながら。夢に浮れて通ふと言ひし。彼魂ひの此所にやあらんと。物語るのも怖敷。今又護摩の法力にて。命を絕ば執念の。愈々增りて忽ちに。二葉を冥途へ誘ひやせんと。心の裡には思へども。制むるにも禁め難く。紫野の野宮へ。阿古木を早く移し遣り。空衣を付置て。礒名を厚く勧りなば。彼が心の解もやせんと。喜代之助を密に招き。其事を打

刹語。野中の里へ空衣を。遣はして見せ給ふに。阿古木は重き疾病にあらねど。そこはかとなく煩ひて。只しどもなく怪敷事を。一人吻き呆然と。心浮れて定まらず。打惱みて有る由を。仁木より告來しければ。光氏も詮術なく。思はず月日を過しけり。」二葉の上の御産には。まだ程も有んとて。御物の怪の事をのみ。館の者は打案じ。油斷して有けるが。俄に其氣色ありて。打惱み給ひければ。政則夫婦は言ふも更なり。人々も狼狽惑ひ。彼御祈禱の法師ならば。今こそ殊に御大事と。護摩壇に上るもあり。經卷を披くもあり。各自法の有ん限り。丹精を盡しに盡して。責懸〱祈禱けれど。例の執念き物の怪一つ。更に動く氣色なきは。世に珍ら敷靈なるかなと。名高き驗者も持惱みぬ。されど斯迄調ぜられ。些少は御身を退きしか。今迄心苦し氣に。打臥居たる二葉の上。面を上て目を開き。「アラ喧しの般若聲。光氏に申し度。事の數々侍るなり。久敷惱みて聲も嗄れ。騒が敷ては言ふ事も。御聞取れ遊ばすまい。暫時祈禱を止させてと。宣へば政則小毬。打心得て立廻らす。屏風の内へ光氏を。頓て誘引參らすれば。二葉の上ははら〱と。落る涙を掻拭ひ。さも懐し氣に御顔を。見遣ながらに。物をも言ず。息も絶氣に打伏倒れ。今を限りの形容



を。見るに目も暮心も消え。有繋の政則氣も亂れ。扨こそ二葉は覺悟して。我なき跡の事等を。聞え置にや有んずらめ。親には包む事をさへ。語りかはすは夫婦の情。此所に在ては氣も置れんと。心に思ひて小毬に。目配しつゝ諸共に。次の間に立出れば。祈禱の法師も皆退き。聲を鎭めて法華經を。讀居る形容は猶ほ尊し。光氏は近く寄り。「四隣に憚る人もなし。何事にもあれ宣へと。言つゝ熟々打視に。最長くふさやかなる。髮を一ッに束ねて引結。白き單衣に白き帶。姿に引れて夫さへも。色ある絹より花やかにて。腹は最高う膨脹。打惱みて臥たる形容。由縁なき人だにも。此體を打見なば。憫然と思ひて心も亂れん。況てや壯き時よりして。親の結びし妹脊中。悲しさ比喩ん方もなく。心地迷ひて跪居たる。光氏の袖を捕へ。「あな苦し。心憂き目を見せ給ふ。怨しさよと計りにて。物もえ言ず。泣給ふ。常には行儀正敷し。恥かし氣に待遇て。我袖を引寄る。事抔は爲ざりしが。吁不審と光氏は。心に思ひて摺寄る顏。最たよ〱と打見揚。涙潸然繇るゝ形容を。見に愈々胸難り。餘りに痛く泣ければ。所詮亡身と覺悟して。跡へ殘れる親達の。歎きを思ひ且は又。我に名殘を惜むかと。思へば胸も張裂る。涙呑込光氏が。「何事にもせよ深く案じ。

氣を痛むるは疾病の障り。和女は左迄の惱ひならず。頓て全快し給はん。假令如何なる事あり共。必ず心に懸給ふな。彼世に長く添遂ん。親となり子と爲るは。殊更深き契りぞや。政則小毬夫婦にも。是限對面無きには有ず。廻り〳〵て逢見る事も。有りなん物と心易く。思ひなし給へやと。言慰むれば顏打振り。「イヽや妾は死はせじ。今はや息も絶々の。形容に待遇て。君を此所へ招きしは。餘りに強く祈禱て。最苦しきを暫時が程。休めんとての僞り事。是見給へとツと立て。更に疲勞し體もなく。裳を集め姿を繕ひ。轉し脇息引起し。肱付もたせて莞爾と笑ひ。「此所迄夜毎日毎。來らん心は無れども。起ても寐ても物思ふ。寔に人の魂ひは。あくがれ出る物になんと。さも懷し氣に言ひながら。四邊見廻し息を吐き。(歎きわび空に亂るゝ我魂を。結び止めよ下交の褄)と。吟ずる聲なら姿なら。二葉の上とは思はれず。變りし容姿の最怪し。と能々思ひ廻らせば。只彼の阿古木に紛れなし。アヽ淺間しや先頃。彼が我に言ひたるは。此所に仕ふる女の中に。阿古木が親敷者ありて。樣子を尋ね印と爲べき。簪を奪せて。さも有氣に某しを。驚かするにや有ん歟と。一度は疑ひしが。今眼の前にあり〳〵と。斯る不思議を見る物かな。あな疎ましと思ひながら。



猶も素知ぬ風情にて。「左言ふは二葉に附添し。物の怪と覺えたり。抑々和女は誰なるぞ。確乎と言て聞せよと。問れて片頰に笑を含み。「名乘も有繫面て伏。是見給へと懷ろより。取出したる錦の袋。光氏手に取押開けば。阿古木が肌身を離さゞる。彼勅筆の短冊なり。扨はと愈々怯げ立。見れば姿も蓮葉にて。膝も崩れ衣紋も亂れ。屛風へ脊中を持せ。眥引上此方を見遣り。「此正室の御惱は。受て生れし天の命數。弱目に乘ては來たれども。我苦しめる計りに非ず。夫に驗者を召集め。妾が命を絶んとは。道に在ねば驗はなし。疾々思ひ止り給へ。まだ末久敷壽きを。己が怨恨に縮めなば。祈禱せ給ふ迄もなく。天の咎め地の罰にて。此身も安穩なるべきや。妾が命のあるをもて。妾が業にあらざる事は。知し召給へやと。怒りの面色あらはれて。最高らかに。言ひければ。只淺間しとは世の常なり。又た人や近う來らんかと。光氏心も心ならず。彼祈禱の僧共は。此騷がしきを洩聞けん。同音に讀經しつ。護摩の壇には鈴の響き。「あな喧しやと兩手にて。耳を塞いで二葉の上。夜着に持れて打伏倒れ。少し聲も鎭れば。物の怪の退たるやと。小毬手づから藥を持寄。かき起して介抱すれば。愈々其氣著るしく。程なく安々產給ひぬ。嬉しと覺す事限りなく。

總て館は搖る計り。皆々喜悅さゞめきけり。され共久敷打惱み。疾病に疲勞し上なれば。後産の事心元なく。政則夫婦は在るとあらふる。神に佛に願を懸け。光氏は玉兎の鏡に。彼勅筆の短冊を。取添て臺に据置。心に祈念なしけるが。夫彼の加護にや寄けん。後の物も平かに。事なく果て思ひしより。惱敷氣色もなく。生れし御子は殊更に。健かに見えければ。丹精凝し祈禱たる。驗者は護摩の壇を下り。經卷を卷收め。したり顏に汗押拭ひ。是より爽ぎ侍らんと。打集りてぞ壽きける。兎角爲す間に日は沒ぬ。五ッの時辰の響く頃。腰元使ひの壹人の女。光氏の前に手を突き。「只今糺の御館より。名を早百合とか言ふ女中。若君樣へ直々に。申し上度事ありとて。彼に控て居りますと。聞て小首を打傾け。「何用有て來りしか。心得難き事にぞある。此方へ召べと閑靜なる。一間へ招き見給へば。早百合に在ぬ空衣なり。思ひ懸ずと言んとせしが。深き容子のある事ならんと。思ひ返して打笑ひ。稻舟よりの使ひなるか。近う／＼と傍らの。女共を遠れば。空衣はしとやかに。「先以まして正室には。安々と御喜悅。御血心も在せられず。男御子にて在すれば。殊更の御滿



悅と。言ふに愈々不審晴ず。「二葉が安産せし事だに。和女の知ん筈はなし。殊に男子と言ふ事は。何者が告たりけんと。宣へば聲を潛め。「阿古木を何卒言宥め。少しも早く野宮の下邸へ連往んと。今日も亦野中の里の。別莊へ音信しが。阿古木は窓に打凭れ。前後も知で臥てあり。暫時有て目を覺し。妾に申す樣。今赤松の館にて。二葉の上の御産あり。しかも男の御子なりと。人々喜悅騷ぎ。儀式作法の嚴しく。賑敷其樣子。豫ては最も危しと。言聞えしを平かにと。思へば心も只ならず。覺れば此所に在ながら。眠れば彼所へ往通ひ。我にもあらぬ我心地を。熟々思ひ續くるに。是見給へや此樣に。寢衣は護摩の煙りに色付。けしの匂ひの身に染て。怪敷事而已多ければ。髮を洗ひ寢衣を着換。試み侍れど睡眠ば。猶幾度も其如し。我身ながらも疎敷を。況てや人の口の端に。掛らん事の恥かしやと。人には云でくよ／＼と。心一つに打歎けば。現か夢か定め兼。最ど亂れし妾が心。思ひ遣りて給はれと。言懸て打驚き。今若君との不問語。名乘出んも耻かしさ。勅筆の短冊を。御目に掛しが其中に。祈禱の僧共喧敷。讀經爲しに驚かされ。其儘歸りし口惜さよ。年も長て色香なき。此身を節々光氏君。此迄訪せ給ひしは。眞實を見せて彼短冊。取戻さんとの

御心とは。知て居ながら浮々と。夫を渡し參らせては。愈々逢瀨は絕果んと。猶狂は敷形容なるを。妾しが押鎮め。憚りながら御心の。夫は僻に侍らん。貴女大事と思へばこそ。磯名樣の事迄も。吳々との御賴み。先御言葉に隨はれ。喜代之助の下邸。彼野宮と押並び。紫野の中なれば。寂寥所に侍れど。世を忍ぶには人目もなし。先是へ移られてと。言慰めしに漸々と。阿古木の心打解て。九月にならば磯名を連。參らう程に彼子の事。宜なに賴むと云ながら。膝の邊りの團扇を取り。我魂ひの浮れ出。何とても赤松の。館へ行其時は。此團扇は手に持て、此身に懸る護摩の煙りを。打拂ひ抔したりしが。けしを焚其薫りの。是へも止りて燻りたり。餘りに困め給ふなと。君の御目に懸る樣。言付りては歸りたれど。妾が伊豫より歸りしは。人に知さぬ事なれば。仁木の妻とは名乘難く。此頃途にて昔日の腰元。夏野に逢しが今程は。稻舟樣に仕へ參らせ。早百合と云ふ由聞置しを。思ひ出して赤松の。此お館には妾の顏。知る者なきを僥倖に。糺よりのお使と。似つこらし氣な僞り事。是御覽遊ばせと。阿古木が手馴し彼團扇を。取出せば光氏は。燈火を近付能視るに。實に空衣が云ひしに違ず。驗者が彼を調ぜんとて。焚たるけしの香染徹り。所々焦



たるに。(袖濡るとは知りながら早苗かな)と。書たる手跡の美しさは。多くの人に勝れたれど。黃昏が投節の。可笑かりしに引換て。此團扇は手に觸るもうたてく。彼所へ打捨吐息をつき。「是より阿古木を問はざる時は。彼勅筆の短冊を。渡しゝ故と却つて恨み。二葉の爲にも惡からん。と有て最前我を引付。空に亂るゝ我魂を。結び止よと打怨し。其顏ばせはまだ目に在て。對面せんも怖しゝ。和女明なば阿古木の許へ。我文を持往て。猶も心を宥めて吳れと。頓て料紙硯を取寄。二葉の產後の惱み烈敷。例の赤松夫婦の者。傍らを離れねば。我も有繫に振捨て。立出難き事抔。細々と書たる末に。『我は戀路に身もそぼつを(袖濡る夫はあざみの早苗かな)』卷收めて渡し給へば。空衣は心得つ。隱れ家へこそ歸りけれ。」二葉の上は衰へし。姿を恥て光氏に。夫より對面し給はず。頃しも秋の中旬にて。若君生れ給ひしは。霧深く立籠たる。夕暮にて有ければ。夕霧丸とぞ名附ける。御顏ばせの美麗さ。光氏君の御誕生。の其節に露違はず。我程能婿を取り。我程能孫を舉けし。武士は華洛に有じとて。政則の喜悅は。更に比喩ん樣もなし。されども未だ二葉の上。全快爲しと云ふにも有らねば。是而已心に掛りけれど。最甚う惱みたる。其疲勞にある可き間。

頓て爽ぎ給ふ可しと。左而已は深く案じわびず。産の穢に憚るべき。日數も早く過にしかば。光氏は今日初て。室町に赴かんと。中垣を近く喚。云々の由を語り。二葉に對面爲させよと。宣へば打心得。直に産家へ誘引參らせ。二葉の上に打對ひ。「御顔ばせの窶れしを。恥かしと思し召。夫は餘りに若〱し。御子迄御擧げなされし御中。サア御逢遊ばせと。中垣が屏風を明け。光氏を押入れば。此程絶し物語り。種々聞え給ふにぞ。二葉の上も時々に。打答へ抔する聲の。最弱氣には聞ゆれど。早亡人と見えたる姿を。思へば夢の心地して。「去頃和女が某しに。云ふ事なりと此所へ招き。言辭もなくて打臥たる。其時ハッと胸塞り。心亂れて後の世の。契りの事さへ聞えしが。今更思へば忌〱しと。宣ひながら彼息も。絶〱に在けるが。引換して脇息引寄。莞爾打笑み惡さげに。物言懸し事共を。思ひ出して心憂く。「まだ物語は種々あれど。何を云ふても久敷惱み。疲勞の殘りてたゆげなれば夫は重ねて緩々聞えん。藥劑の絶間なき樣に。怠らずまゐられよと。心を注て勞りつ。立出んとしたりしが。振返つて熟々視るに。人に勝りて美麗なる。姿の甚う弱り果。有か無かの氣色にて。打臥給へる其形容の。何とやらん苦し氣にて。亂れたる筋もなく。髮はら



〱と枕の上に。飜れ懸るも淸らかなれば。何に足らざる事ありて。年頃さまで睦まし敷。語ざりし我心の。怪敷迄に打視られ。「東山の御機嫌を。伺ひて疾歸らん。箇樣に朝夕和女の傍に。附添居らば我心の。安からんと思へども。小毬は只幼き。子の如く和女を思ひ。此處を片時離れねば。心無しとや思はんかと。其前を憚りて。隔て住は最苦し。早安らかに子は生ぬ。心強く思ひなし。本復ありて褥を並べ。常の居間に住ふ樣。早く爲りて給はれと。懇切に聞え置き。最淸氣に衣服を整へ。立出給ふを二葉の上。常よりも目を注め。見送りて臥給へり。其日左衞門政則も。引續きて室町の。御所へ出仕したりしが。九月に爲ば九日に。菊合せや催はさん。十三日には夫々にて。月見の遊びや爲ん抔。取々の評議にて。政則も歸り難く。光氏と倶々に。其夜は御所にぞ止まりける。」赤松の館には。人少にて寂寥なる。夜半ばかりの事なりけん。二葉の上は顏色變り。俄に例の胸を堰揚。最甚う苦しむにぞ。室町へ人を走る。其程もなく絶入給ひぬ。足を空に誰々も。駈戻りしが事敗れし。其跡なれば途方を失ひ。素より祈禱の僧共を。請ず可き暇もなく。只館の内の物。騷ぎ狼狽て柱に當り。疊に躓き駈廻り。所々の御見舞と。使者は大勢立籠ども。誰取次者

もあらず。其甲斐もなき魂招ひ。女の泣聲充滿〳〵て。怖敷迄に見ゆ。不具なる子さへも。親は惡しと思はぬが。總て浮世の習ひなり。況や斯迄容貌。打揃ひたる子を先立。小毬更に生體なく。袖の上にて愛たりし。玉の櫛笥の夫よりも。猶淺間し氣に泣まどひ。姉も無く。妹も無く。娘は一人なるをすら。年頃淋敷思ひしが。是より如何に爲す可きと。沈み入て起も揚らず。政則も日に增て。二葉の上の惱みも薄く。爲り行給ふを見るからに。斯ては本復遠からじと。心に賴みし上なれば。殊更に猥猥ながら。老少不定は是非なしと。小毬を叱咤勵し。香を盛華を手向。定まる佛事の準備なんど。爲せんとしたりしが。小毬初め侍女共。只管に押止め。是迄度々物の怪の。業にて息も絕々に。見えさせ給ひし事もあり。夫だにも退かば。蘇生給はんかと。人の云ふに隨ひて。いかめ敷祈禱ども。殘る事なく。仕盡して。枕抔も二三日は。其儘に爲置けるが。漸次〳〵に面影の。變り往給ひければ。今は更に詮方なく。鳥邊野にぞ送りける。我子ながらも主人の正室。政則も御供しつ。彼方此方の御送り。寺々よりは念佛の。僧共多く集りて。廣き野に所なし。終夜嚴しき。儀式に罵り騷げ共。果敢なき死屍と爲たる人を。思へば最ど光氏は。夢の如くに立歸る。



曉深き道の邊の。草葉の露は先立て。下の雫の後るゝも。終には消る習ひなり。歎くまじとは觀ずれど。彼黃昏一人の外。斯る事を見給はねば。類ひも無げに思ひ焦れ。駕籠にも乘ず往艱み。茫然として立止る。其日は八月廿餘日。打曇りたる有明の。空の景色も哀れさ增り。口に言ねど政則が。子故の闇に暮惑ふ。其形容を道理ぞと。見るに愈々胸塞り。不覺に空を打眺め。(昇りぬる煙りか曇る月の影。)と呟きながら赤松の。館に漸々歸り着き。枕は取ど睡眠れず。近頃心も解懸り。猶行末は睦敷。語んと思ひしが。夫も甲斐なく爲りしかと。珠數取出して手を合せ。法界三昧普賢大士。と經文を靜やかに。打誦して居給ふ形容。行ひ馴たる法師より。猶尊くぞ見えたりける。夫よりも光氏は。此所に泊りて嵯峨へも歸らず。心深く思ひ焦れ。眞實に跡を吊ひ。夕霧丸を見給ひて。斯る絆の爲かりせば。髮を切衣を染。菩提の道に入らばやと。打歎きつゝふと小玉の。言ひたる事を思ひ出で。嘸此頃は紫が。淋敷やあらんかと。思ひ亂るる節もあり。夜は屛風を立廻らし。只一人打臥つ。宿直の人は其四邊に。近々と有ながら。何とやらん傍ら淋敷。佛間には念佛の聲。拂曉方は殊更に。秋の哀れも增り行。風の音而已身に染て。寢覺勝に明し兼。西の窓の障

子を開き。高欄に押懸り。霧深く立渡る。朝朗の空の氣色を。打眺めて在るに。風荒らかに吹來り。村雨驟に降出て。はら〳〵と袖に懸れば。雨とや爲りけん雲とや爲りけん。今は知じと獨語。面杖突て居給ふ形容。見捨て過し女の魂ひ。必ず止りなんかしと。打視られて高直は。御前ににじり寄り。「誰とも名をば名乘ずして。只今是を持參り。其使ひは直樣に立歸りて候と。差置を見給へば。今や開かんとする菊の枝に。短冊を結付たり。(聞も哀れ後るゝ人の袖の露)と最優に書なしゝは疑ひもなき阿古木の筆なり。二葉の上は定まりし。命數なりとは言ひしかど。正々と其靈の。移りしを見たりしかば。アナ強面の吊ひや。心憂しとて傍に差置。彼の勅筆の短冊の。故を知ねば若々敷。行狀なりと人も言ひ。終に浮名を流さんかと。思ひ亂るゝ顏色を。見上て苦敷高直が。常の如くに可笑事。眞實なる事取交て。物語に打紛らし。種々慰め聞ゆれども。兎に角に果々は。哀れに果敢なき世談に。移りては吐息をつき。此頃風をや引たりけん。頭部痛く候と。言ひ紛らして立行けり。」兎角なす間に秋も立。冬の初旬になりにけり。或夕暮の事なりしが。光氏の言ひけるは。我忌は疾に果ぬ。され共。立日迄はとて。此館に留まりつ。夫を過ても七日〳〵の。佛事



の事に取紛れ。思はず日數を重ねたれば。父君兄上方々も。心元なく覺されん。今宵は一先嵯峨へ歸り。衣服を改め明日は。室町へ出仕せんと。暇を乞せ給ふにぞ。小毬は此頃の。風に誘ふ木の葉より。脆き涙に咽びつゝ。又悲しさの改まり。例の如くに沈み入。御前に出やらず。政則壹人立廻り。左あらば君の御出の中にと。侍女共を呼集め。二葉の上の衣服調度。遺物に分ち與へければ。光氏は其心を察し不覺哀敷其處邊を見るに。當吉は親も無く。幼少時より仕へ馴。一入不便を受たれば。ト髮を切て最小く。締束ねしも哀れに見え。其外とても一樣の。島田に結びし計にて。櫛笄の飾りも無く。皆一列の白小袖。人多き程猶淋敷。有しに變る形容を。打視りて目をしばたゝき。「二葉の上は世を逝ぬ。物添しとて和女等迄。散々に暇を乞ひ。別れ行なば政則夫婦。我も力の無くならん。是より幼稚人を見捨ず。心長く衞立て。くれるが二葉へ追善ぞと。不圖燈火を眺れば。目の內濡て見え給ふに。眞實の心顯はれて。在合ふ人々皆打泣。腰元共は言辭を揃へ。「假令御暇賜る共。此館を退かん。心は更に侍らず。只是よりは貴方樣の。御出の間遠に爲んかと。夫が悲敷侍ると。言れて光氏打點頭。「愈々絕ず訪はん。其印には夕霧丸。此所の夫婦に預け置

と。言ひつゝ顧み給ひければ。障子は悉皆開通り。二葉の上の住馴し。座敷迄も能見えつ。屏風脇息褥迄。昔日の儘に在ながら。其人而已は空蟬の。空敷心地し給ひて。立惱ひて在せしが。氣を取直して立出つ。駕籠に乘んと爲す時しも。折知り顔なる村時雨。さら〳〵と打濺ぎ。木の葉を誘ふ風の音。慌忙敷吹拂へば。燈火消て薄暗く。御前に侍ふ人々も。何とやらん心細く。野邊送りより間暇ありし。袖共濡ひ渡りぬるに。光氏君は取分て。ト御心を察しけん。中垣か夕霧丸を。乳母に抱せ參らせて。父君へ御暇乞と。御側へ差付れば。何心なき笑顔の。其美麗きに光氏は。歎きを忘れ立出けり。」既に嵯峨の館には。今日なん歸り給へると。御先觸の有しかば。書院座敷を拂ひ磨き。男子女兒の立集ひ。今や〳〵と待聞え。さゞめき渡る其處へ。光氏は歸り着。乘物より立出れば。手に手に手燭を携へて。迎ひに出たる侍女共。我も〳〵と衣裳を飾り。櫛笄の瑇瑁は。灯影の映りて目ばゆき迄。金銀輝く平元結。兵庫勝山折柳。其程々に結揚し。髮には梅が香を散し。何れも淸氣に化粧しつ。並居るを見に付。彼赤松の腰元共。毛卷束の色も無く。淚敷事而已繰返し。言續けてはさと打泣。漫ろ寒き夕べの景色の。哀れなりしを思ひ出。西の亭へ渡り給ふに。



衣替の晴にとて。皆新ら敷仕立けん。若き侍女童迄。姿を見能整ひて。鮮明に出立つ。紫は取分て。美麗う引繕ひ。在るを見給ひて。光氏些少心を慰め。「思ひ掛ぬ事共にて。久敷逢ざる其中に。思ひなしか丈も高く。大人ら敷爲りたるぞ。小袖の色は言の葉が。好みにこそ有りつらめ。縫模樣の風流さ。心憎しと言ひながら。小き屏風を引除て。熟々視り給ひければ。紫は耻らひつ。打萎みて在する形容。只彼叔母上藤の方に。露違ふ處なし。言の葉は御夜食の。御膳を頓て御前に持出。「御憔悴の見え給ふは。久敷間の御精進。夫故にや侍べらん。早御日柄も立たればと。春ならねども櫻鯛。鱸は松に由緣ある。目出度物のみ取揃へ。種々進め參らせけり。

## 修紫田舍源氏第十三編 終

大正八年十二月二十二日印刷
大正八年十二月二十五日發行

（田舎源氏）　頒布價金貳圓五拾錢

校訂者　廣瀬夏樹
東京市神田區表猿樂町二十一番地

發行者　田中健介
東京市麹町區飯田町二丁目五十番地

印刷者　佐々木俊一
東京市麹町區飯田町二丁目五十番地

印行所　秀光舍印刷所

不許複製

發行所　東京市神田區表猿樂町二十二番地　東京トモヱ文庫
（振替東京四一四一九番）

# 小夜衣草紙

繪入合本全一冊
頒布價金一圓五十錢
密送料金八錢

第一 小夜衣草紙 式亭三馬作
第二 十八大通百手枕 田水金魚作
第三 亂れ櫻戀の出雲 西澤一風作
第四 戀の花染 自笑山人作
第五 男女川草紙 笑亭樓山人作

第一は三馬の傑作として知られたる辰己の園を改題せるものにして卽ち江戸ッ子の根生骨を醉道の眞水に洗して當代女郎の腸を割つて見せたる大通の洒落本なり。第二はもと（箱まくら）と稱して安永七年刊行せられた珍無類の洒落本にて『傾城買指南』に筆を起し色の世界を卐巴と書きなぐつた逸物也、第三は『堀川波の鼓』『女敵討高麗茶碗』『笹野權三重帷子』など丶種々に作られしもの本篇は『亂脛三本鎗（八卷）』にして果敢なき不義の戀物語なり、第四戀の花染は花の都、梅の難波に時花淨瑠璃人によく八文字屋版と稱する自笑山人の作なり『色にかけては身を打ち家を失ふ形勢、狂言ながら見る人の爲になるべし、アいふか管なり』と當時の人情を穿つたる戀の花染め、扨も色の濡れ世なるかな。第五男女川草紙は艶な色糸を經緯とせし時代敵討物なり、共に共に言はぬが花。強いて粹士の燈下に薦む。

松亭金水著

# 花かたみ

前篇 上中下卷
中篇 上中下卷
後篇 上中下
繪入

全一冊 頒布價金一圓五十錢 密送料八錢

『花かたみ目並ぶ人の數多あれど、忘られぬらん數ならぬ身は』と古今和歌集の歌より作意をとらへし、これも由緣の江戸紫。作者は爲永春水の高弟松亭金水が一代の傑作にして國寶的江戸文學の遺物なり

○全篇彩るところ皆當代の露骨なる戀物語、さりとて淫蕩墮情に走らず處女らしき戀、貞實の戀、逡巡の戀など娘氣質の種々は秋の花野の夕日に照り映えし如く、いづれも紅白の小田卷の糸をもてつゞりしもの情趣横溢、蘭燈の影に親しむべし

○殊に本書は江戸の未期嚴酷なる幕府令に遇ひ人情小說類悉く著述の道を絶たれし當時の作なれど、茲に古本新粧の美を現はしてこの紀念すべき傑作を刊行せしものなり

## 風流 江戸むらさき

絵入合本全一冊
頒布價金一圓五十錢
密送料金八錢

第一　春色雪の梅　柳亭種彦作
第二　封じ文廓の初買　西澤一風作
第三　風流江戸紫　平賀原内作

第一春色雪の梅は草香の亟が小姓粂之助と腰元お梅が淡き戀物語にはじまり義人孝子をがらませし時代蒔繪の敵討種彦が絢拾の人情話し。第二は三人吉三の江戸狂言、色は思案の垣根の梅に鋏を入れし封じ文、いづれも戀の阿修羅場を鳴りもの入りで大詰めまでやん／＼の鶺鴒石、三篇物の讀物也、第三『風流江戸紫』は戀の羽扇といふ變てこもないものに打乘りて日の本は勿論、唐天竺の色里をあさりつくしさる島に漂流して男郎屋を開業するに到る、嘘か誠かともかくも志道軒の根なし戯言。讀む人天外の奇にありと云はざるものなかるべし。

鼻山人著

## 粋色 風流男

全一冊　頒布價金一圓　密送料八錢

前篇　上中下卷
後篇　上中下卷
（繪入）

○爲永春水の筆に髣髴たる鼻山人が一代の傑作なり
花咲『お内儀さんのおあんなんす主に、これほど惚れたも因果で御座りいす何卒始終見捨てずにおくんなんし』。綱五郎『嘘にも左樣いふ心意氣から、素より此方ャ末長く、世話もしてやりてゐのサ』と
○互に結びし惡緣に呪はれたる中根屋綱五郎が流々轉々の粋物語、前後の貳扁に別ちて浮名の樣は、それから、それへと傳はつた面白き事限りなき人情本中の白眉なり。

# 岩戸神樂

第一　根なし草女護の島風　四季山人撰
第二　岩戸神樂　夢中山人撰
第三　箙の梅　十遍舍一九作
第四　里鶴風語　風來山人作

繪入合本　全一冊
頒布價金一圓五十錢
密送料金八錢

扨も辰己の全盛は虚と實を汐境にして、日毎夜毎の入舟出舟を遠慮もなく寫した珍本中の珍本は第一女護の島風と知り給へ、第二岩戸神樂の作者は曰へり『八文字が見作意せる豆右衛門にはあらね共、我夢中に一つの樓へ登り閨中を遊行するに、人見て不怪、心の欲るにまかせて耳にき、目にみしまゝに、愚毫して一笑に呈すと…………』洒落本中の權輿をなすもの也。第三は十遍舍一九が洒落本の處女作にして、梶原源太が番場の忠太を引具しその花廓通ひ帶紐を解く裸武者色戀の仇敵座敷の對陣、願はくは御見物の加勢を得たし、第四里鶴風語は平賀源内の不朽の戲作にして、閑素幽棲の聖犬悟和尚に嬋娟たる艶女をからませて色の浮世の大問答。扨も極樂淨土は花街の三つ蒲團の中にあるものなりとか。

219
1160

終